黒の錬金術師　理の探求者

伊倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の錬金術師　理の探求者

【Nコード】
N7574T

【作者名】
伊倉

【あらすじ】
オンラインゲームを楽しんでいたはずがいつの間にかその世界にいてネナベだった僕はキャラクター『クロウ・リー』になっていました。ネカマのギルメンマリーは女に。同じ境遇の人が約三万。ここは現実化したゲーム？　それともよく似た異世界？
神は僕になにをしろと？
零細ギルド『ルナティィック・ハッター』のギルマスクロウがメンバーとともにサバイバルします。
自治組織が発足したアルファ。様々な問題が起きはじめました。な

んとかしましょう。
一部のＰＫが招いた『コモン』との関係悪化。できるだけのことはしますけどねえ。

始まりの日（前書き）

趣味でちょこちょこ書いていましたら、読みたいというご要望がございましたのでアップさせていただきました。亀更新になります。シモネタ注意。

始まりの日

ふと気がつくと木造の部屋にいました。僕は重厚なテーブルの前で書類を処理していたようです。書類の署名は「クロウ・リー」
僕はペンを持つ自分の手を見詰めました。
そんな馬鹿な！
意味不明の悲鳴を上げてました。
「領主様、どうしました？」
同じ部屋にいた茶色の髪の純朴そうな青年が尋ねます。軽鎧をつけています。
見知らぬ顔です。でも、思いっきり心当たりがあります。
「マリス、だよね？」
「はい。どうしたんですか？　いきなり悲鳴を上げられるものですから」
僕はじっとマリスであるらしい青年を見詰めました。瞳の中に僕の姿が映っています。黒髪、黒瞳、丸眼鏡。記憶のグラフィックより少し中性的になっていますが、ほとんど『クロウ・リー』の姿です。ぽっとマリス（？）の頬が赤くなりました。
なぜそこで赤面する。
恐らく今現在僕達の館からは五つの悲鳴が上がったはずです。聞こえませんが。
僕はついさっきまで自室のパソコンの前に座ってオンラインゲームをやっていました。ゲームの名前は『クリエイト・ミレニアム』β盤のころからこのゲームをやりこんでました。キャラクターの名前は『クロウ・リー』最高レベルである１００までいってしまいましたが、ずっとこのキャラです。補助魔法使い（メイン職業）にて錬金術師（アルケミスト）（サブ職業）です。メインよりサブに力はいってますが。
僕はギルドマスターをやってます。ギルドの名前は『ルナティック・ハッター』名前の意味は考えないでください。ツッコミは禁止

です。
　五人の小さなギルドですが、全員最高レベルまでいってしまいまして、戦闘に見切りをつけて現在領地経営やってました。
　といっても、館に村ひとつの小さな領地です。ギルドでこのゾーンを購入しました。全員１００レベなのでけっこうお金持ってるんです。
　このゲームの領地ルールは個人、またはグループ単位で領地となるゾーンを購入します。一度購入すると維持費として毎月その千分の一の金額を払い続けなければなりません。領地にはノンプレイヤーの領民がついてきまして、土地に住み畑を耕したりして税を納めます。それで維持費以上の収益が上がりますので維持は難しくありません。
　領主となったプレイヤーは地域の発展に力を入れれば収益が上がります。館と村ひとつというのは最小の領地ですが、五人のギルドではこの位でいいでしょう。
　いちおう村を守るという名目で兵も雇わなければならないのです。その最小単位が五人のノンプレイヤーキャラクターで、カリス、サリス、タリス、ナリス、マリスと名づけました。ネーミングセンスにおいてのツッコミは受け付けておりません。
　ちなみに館には執事、料理人、メイド、下男、下女が五人セットでついてます。解雇することもできますが、館を維持するのに便利ですし、雰囲気重視で雇い続けています。
　僕はゲームのキャラクターとなり、ノンプレイヤーキャラだったマリスが人間（？）として目の前にいます。
　夢でしょうか？　夢であって欲しいです。
　眼鏡をかけなおし、部屋に控えていた白皙の青年執事セバスチャン（ネーミングセンスについては突っ込まないように）に言いつけました。
「急用ができました。書類の決裁は済んでいますから、もっていってください」

「かしこまりました。旦那様」
セバスチャンが一礼しました。
僕は部屋から出てギルドメンバーを探すことにした。
(ウィンドゥが使えれば楽なんですけど)
部屋という独立したゾーンにいなければウィンドゥに現在位置が表示されます。
そんなことを考えていたら脳裏というか、目の前に見慣れたゲームのウィンドゥがひらきました。びっくりしましたが、精神を集中するとウィンドゥを見ることができるようです。これは便利。
屋敷の庭にギルドメンバーの反応がひとつあります。名前はマリアンネット。種族人間。性別女性。メイン職業盗剣士レベル１００。サブ職業追跡者レベル１００。マリーのようです。
彼もこの世界に来てしまったようです。可哀想に。

庭に駆けつけると打ち砕かれているマリーがいました。うずくまって頭を抱えています。気持ちはわかる。わかりすぎるほどにわかります。
「マリー、気を確かに」
「マリー、いうな！　なんなんだよ、これは！　いつから『クリエイト・ミレニアム』はＶＲになったんだよ！」
メイド服を着込んだ一見お色気満載の美少女が泣き叫んでいました。男声で。
金色の縦ロールに童顔。小柄。巨乳。メイド服。口元にホクロ。男の妄想満載のマリーですが――実はネカマです。
ネカマなんです。
ふだん、男の夢巨乳メイドとしてエロかわゆく積極的に振舞いますが――実はネカマです。
ネカマなんです（強調）。
『クリエイト・ミレニアム』における男性ユーザーと女性ユーザーの比率は男七割女三割というところでしょうか。

で、女性キャラはチヤホヤされる傾向にあるようですが、マリーは男性ユーザーでありながら女性キャラ使ってました。
男の萌え心を揺さぶるお色気キャラとして知らない男性ユーザーを誘惑しておいて、実はネカマですとばらして恐慌状態に陥れるという残念な人です。ある意味性質が悪いです。
ネカマなんです。
もう有名なので新人ぐらいしか引っかかりませんが。
ネカマとわかっていて遊びに付き合ってくれる度量の広い人もいます。
いいのか、それで。
「裕也くん、とりあえず取り乱していても仕方ないです。とりあえず、状況を把握しましょう」
「ない」
「――はい？」
大きめのエメラルドのような瞳に涙をためて上目遣いにマリーこと裕也が訴えた。
「ないんだよ！　アレが！　本当に女になっちまった！」
マリーが泣き叫びました。ナニカ大切なものをなくしてしまったようです。
ちょっとひきました。かけるべき言葉は一つしか思いつきません。
…………ご愁傷様です。裕也くんの男の御冥福を祈ります。

いや、人事ではないのですが。

失念してましたが、うちのメンバーとは念話機能という離れていても連絡のつく機能がありました。それぞれ呼び出してみました。
『こちらギルマスのクロウです。皆さんどうしてますか？』
『クロウ、どーなってんの、これ。ジュネになってんだけど』
『我輩はソウセキになってますにゃん』
『僕はアマクサになってるぞ』

『僕もクロウになってますよ。裕也もマリーになってるし。いちいち念話も面倒ですので館の執務室に集まってくれますか？』

僕のギルドは五人です。
ネカマにてメイド姿を好んでする盗剣士にて追跡者“贋物（フェイク）”マリーことマリアンネット。
守護者にて農婦“鉄壁”ジュ姐さんことジュネ。女性なのに壁役を選ぶ豪傑です。
獣族の盗剣士にて縫製者ソウセキ。ギルドの知恵袋です。老師とか御隠居とか呼ばれています。ときどき日向で昼寝をしているのはロールプレイですよね？　いつか巨大な籠をプレゼントしたいです。毛布ひいて寝床にしてください。
召喚師にて賢者のアマクサ。気難しい気取り屋です。ロールプレイ……ではなく地ですね。
そしてギルドマスターの僕、クロウ・リーです。
執務室のテーブルを囲んでいる皆さんは見事にキャラの姿です。緑色の髪のジュ姐さんは大柄で畑か果樹園の手入れでもしていたのでしょうか、作業着です。猫の頭にほっそりとした体をタキシードで包んだソウセキ。ローブ姿のいかにも魔法使いなアマクサ。
「皆さん見事にキャラの姿ですね」
「そうですにゃん。我輩は夢オチを希望しますにゃん」
にゃん言葉を使うソウセキは落ち着いているようでした。冷静な人がいて助かります。
「僕もそうですけど、どうなんでしょうね。夢にしてははっきりしてますが、まだ一部しか試していませんがゲームの中のシステムが使えますよ」
「そんなこと、いつ試したんだ」
甘いマスクのアマクサが顔を歪めてきく。
「ついさっきです。意識するとウィンドゥがひらいてメニュー画面が出ます。やってみてください。なにができて、なにができないの

か確認する必要はあるでしょう」
「食べ物は食べられるよ。さっき果樹園の葡萄で試してみた。本物の味がしたよ。びっくりだね」
熱烈的な牧場〇語のファンであるジュ姐の発案でこの村の開いていたスペースには果樹園や農牧地が作られてます。さらに凝り性のジュ姐は酒造場や乳製品工場も作りました。本来スキルを持つものが素材を用意してメニュー画面から造りたい料理や加工食品を選択すればあっという間にできますけど、それでは味気ないとわざわざ施設を作らせたのです。加工するまでにそれなりの時間がかかりますけど、個人がひとつひとつ作るより大量に加工品が作れます。
畑、果樹園、麦畑、牧草地を開墾してつくり、動物小屋、酒造場、乳製品工場を作るのにも資金が要り、家畜の購入、種や苗の購入、さらに面倒を見る農民、杜氏、職人のノンプレイヤーを雇うのにギルドは一時多くのクエストを行わなければなりませんでした。
いい思い出です。資金の回収は期待してません。
おかげでワインやウィスキー、チーズやヨーグルト、バターを出荷できるようになってます。これらを貯蔵しておく倉庫ももちろんあるので。
「あ、それからトイレも使えたから」
試していただけたのですね。施設はオブジェクトではなく本物として使えるようです。助かりました……トイレットペーパーは“紙”で代用が効くでしょうか？　確かトイレットペーパーというアイテムはなかったはずです。ある意味切実な問題です。
「食事を取ることと排泄が可能ですか。本物のようですね、この体」
何気なくいうとアマクサが呻いて頭をかきむしった。隣のマリーは呆然としている。
「とにかく、情報収集するべきでしょう。そのほかにも自分達で試すしかありませんね」
「他のプレイヤー達はどうなっていますかにゃん」
さすが老師です。そういえば僕らがこの有様ということは、他の

プレイヤーもこうなっている可能性があります。
「ああ、それも確認する必要がありますね。そう、顔見知りに声をかけてみましょう」
「念話使えば？」
アマクサの提案をソウセキがゆるく頭を振って否定した。
「無駄ですにゃ。混乱しているようで、あっちこっち話中ですにゃ」
もう試していたんですね、老師。さすがです。念話はギルドまたはパーティならば多重会話が可能ですが、それ以外は一対一での通話になります。他への通話中は繋がりません。
ためしに通話リストを表示してみましたが、僕のところもほとんど通話中です。
「それならタウンに直接行ってみるのも手だわね。マーケットに流した品物引き上げてみる？」
「その手続きもありましたか。では僕が行きます」
「なんで品物を引き上げるんだ」
アマクサが怪訝そうに言う。
「こんな状況ですからね。物価が動く可能性があります」
「それもありますが、自棄になるプレイヤーもいますにゃん。一人では危ないですにゃん」
確かにその可能性もあります。自暴自棄になった人はなにをするかわかりません。
「じゃあ、あたしもいくわ。１００レベルですが魔術師系の装甲は紙です。言いだしっぺだし」
「じゃあ、俺もいくよ。危ねえだろ」
名乗り出たのがマリーなので全員複雑そうな顔になりました。紙装甲の魔術師系と女性だからと言うことでしょうが――今は君も女の子なのだよ、裕也くん。
「みんなで行くと『陽だまり村』（領地。ネーミングセンスについては突っ込みは禁止）が無防備になりますにゃん。また、あっちから情報を求めてこっちに流れてくるプレイヤーもいるかもしれませんにゃ？」

どうします？　と言いたげにソウセキが首をかしげた。猫っぽいです。ゴロゴロさせたいです。

「では、ソウセキ老師とアマクサは残って対応してくれませんか？　平和的な人ばかりとは限りませんので」

「その場合は出入り禁止にするですにゃん。情報を求める良心的な人にはそれなりに対応しますにゃん」

「うむ、領地を守るのは領主の役目だからな。僕も異存はない」

「ではそれで行きましょう」

タウンと呼ばれているのは五つの都市です。宿屋、銀行、貸し金庫、復活するときの大聖殿、マーケットなど各種冒険者に必要な施設があります。ゲーム内で死ぬとそのタウンの大聖殿で復活します。プレイヤーはそのうちのひとつをホームタウンとします。

普通、宿屋の一室で足りなく、領地やギルドキャッスルなど独立した本拠地を持つほどではないギルドはギルドホームという施設、ゾーンの一種を借りて本拠地や倉庫とします。

大中小のレベルがありますが、これらは会館という施設にあります。実際にその建物内にあるわけではなく、ドアというオブジェクトでワープするわけです。

会館はギルドの結成や入退会の手続きを行う場であり、倒したモンスターなどが落とすドロップ品を換金できる窓口もあります。マーケットの窓口もありまして、貸し金庫、銀行などの施設が集中してます。

会館のマーケット出品窓口に品物をもっていくとなぜか離れたマーケット会場に品物が並びます。品物を引き上げるときも窓口で手続きをするとすぐ品物を返してくれます。ゲームでは当たり前だったのですが、現実世界となった今ではどうなんでしょう？

タウンに行く前に僕には越えなければならない試練がありました。僕はその前で硬直していました。もう生理現象の我慢は限界で

す。しかし――トイレに入るということは、いままで避けてとおってきたものに直面させられるということなんです。
トイレの利用は可能であることはわかっています。しかし――それは――
はっきり言っちゃおう。
僕は――現実世界でゲームをやっていたプレイヤーの僕は――女だ。いわゆる腐女子気味の。ぎみどころか骨まで腐っているとは友人一同の弁だが。
ゲームのキャラクター『クロウ』は二十歳の男だ。理想の姿がえられるゲーム世界で僕は男を演じていた。ゲームでは男女による数値的な区別はないので不利なことはなかった。
まさか、まさかゲーム世界に来てしまうなんて考えないじゃないか。
もうだめだ、僕はトイレの個室に突撃し――現実を思い知った。

ついてました。

細かく描写するとR18タグがいります。
「キノコ」と表現されることの多いものですが、むしろ――ああいえ、どちらにしろ――なんでしょう、滑稽な代物です。こういうものがついているのは悲しいです。ああ、いえ、男性にとっては大事なものなんでしょうが。BL本で表現されるものなのでまったく未知の物ではないのですが、正直不恰好です（きっぱり）
泣きました。男として生きていくしかないようです。誰か男子の生態について詳しく教えてください。要至急。

執務室に戻る僕の足取りはゾンビのそれだった自信があります。

タウン事情　有象無象の様子

ホームタウンに設定したタウンには帰還呪文という、どこにいてもそれさえ使えばホームタウンの入り口に転送されるというものがあります。移動は一瞬でした。

僕たちが選んでいるホームタウンはアルファといいます。高層ビルと巨木が立ち並びツタが絡まる独特の外見をしています。

道端にはプレイヤーらしき人達が呆然と座り込んでいたり、泣き喚いていたりします。皆混乱しているようです。無理もありません。

いちおう武装していますが、刺々しい雰囲気は感じます。もっともタウンの中は戦闘禁止です。戦闘行為を行いますと強制的に牢屋にテレポートさせられます。そのシステムが生きていれば手は出してこないでしょう。

「裕也くん、着替えなかったのですか？」

ジュ姐は鎧姿ですが、裕也ことマリーはメイド姿です。ちなみに魔法の加護つきで皮鎧程度の防御力のあるものです。メイド服で戦闘するためのアイテムです。なんかミセパン（女子専用）というアイテムもあります。こういうニーズがあることがなんとなく嫌です。

「……着替えがねぇよ。知ってんだろ、露出の多い服しかねえんだ」

ネカマとしてエロかわゆく振舞っていたせいですね。自業自得です。

「帰りに買いましょう」

目指す会館はタウンの中央にあります。東側に大聖殿、南側にマーケット、西側には宿街、北側には広場があります。

タウンの中央に向かう途中、野次を浴びせかけられました。

「よう、兄ちゃん。女二人連れていい身分だな」

「こっちにも回してくれよ」

「姉ちゃん、仲良くしよーぜ」

ヒュウヒュウと口笛が鳴らされる。

「うるせぇよ！」
裕也が怒鳴り返しました。ぎっと睨みつけられて、男達が変な顔をしました。
だって男声だもん。
というか、いつものようには対応できないようです。彼もいっぱいいっぱいなのでしょう。
「裕也くん、彼らの言う兄ちゃんって僕のことだよ。君は女の子」
「いまはマリーだからね」
ひくくっとマリーが引きつった。
ネカマの悲しさだねぇ。
「もしかして“贋物”マリーか？」
声をかけられてマリーが振り向きました。僕らもつられて振り向きました。
『クリエイト・ニレミアム』のグラフィックは秀逸です。キャラクターの姿は大概美形ばかりです。
見上げるような長身に鎧の、銀髪の貴公子のような青年がいました。
眼鏡です。眼鏡が似合います。ゲームにおいて眼鏡はファッションでしかありません。キャラクターに視力の補正はないのです。かく言う僕も伊達です。
というか眼鏡萌えです。
グラフィックはパターンがあるので似通ったキャラクターはたくさんいるのですが、誰だか分かったような気がします。
「“狂戦士”ヴォルグ？」
ウィンドゥをひらいて確認しました。
戦闘系の大手ギルド『銀狼騎士団』のギルドマスターです。昔馴染みですが、こうして顔を会わせることになるとは思いませんでした。
有名人の登場に野次を飛ばした人達がこそこそ離れていきました。
「そういう君はクロウか」

ジロジロと僕を見るのは仕方ありません。僕だってガン見しちゃいます。
基本はキャラクターの容姿なのですが、本人の容姿が微妙に入り込むようです。僕のクロウも本来はもう少し男らしいはずでした。僕本人の容姿の補正が入ったのか中性的です。本人の容姿補正が入っても相変わらず僕のど真ん中です、この人。
「まさか、こんなふうに顔をあわせることになるとは思わなかったね」
「まったくだ……それで、どうなっている？」
「なにが？」
ヴォルグが複雑そうな顔をしました。
「…………体のことだ」
がっくりとマリーが膝をつきました。そっちのことですか。
「……クロウ・リーになってるよ」
「クロウは男で、マリーが本物になっているということか？」
そのとおりです。もう“贋物（フェイク）”ではありません。シクシクとマリーが泣きました。強く生きてください。
「そういうことです。今日はどうしました？」
「換金とマーケット品の引き上げと、情報収集だ」
「うちもです。情報交換しませんか？　まず会館にいきましょう」
「いいだろう」
「マリー立てますか？　行きましょう」
マリーが力なく立ち上がりました。可哀相に。僕達は連れ立って会館に向かいました。

会館は各種施設の窓口です。二階からはギルドホームの入り口が並んでいます。
会館には現在何人のユーザーがアルファをホームタウンとしてログインしているかという表示があります。何人がこちらに来てしまったのかという確認もかねてました。

それを信じるのなら現在アルファには約一万五千人のプレイヤーがいます。付け加えるなら、ログアウトは不可能です。

ヴォルグがドロップ品の換金をしている間にマーケットの品物を引き上げる手続きをしに窓口に向かいました。

そこで出品物の取り下げをしている女性を見かけました。そそとした眼鏡の美女です。凛とした美貌は見覚えがあります。ウィンドゥで確認しました。

「『お茶会』のヘレーネさんですね」

「あら？」

少し間があってからヘレーネが応えました。ウィンドゥで確認したのでしょう。

「ごきげんよう、クロウさま。今日はどうなさいました？」

『お茶会』は二十人ほどの小さなギルドです。うちのギルドとは友好的な関係です。『ルナティック・ハッター』の『お茶会』と並んで揶揄されることもあります。偶然です。うちのノンプレイヤーのメイドがアリスというのも偶然です。偶然ということにしておいてください。ちなみに下男がハリスです。ネーミングセンスにおいてのツッコミは受け付けておりません。

「こんな状態ですからね、マーケット品の回収と情報収集にまいりました」

「あら、でしたらうちと情報交換いたしませんか？　よろしければギルドホームへどうぞ」

『お茶会』のギルドホームは二階です。場所としては申し分ないのですが、もう一人いますので即答はできません。

「願ってもないことですが、『銀狼騎士団』のヴォルグさんもいらっしゃいます。あちらの意向もききませんと。あちらがよろしければ、一緒にうかがいたいと思います」

領地の収益は小麦や野菜の形で納められます。それは会館で換金するかマーケットに流してお金にするかしてます。僕らの場合税金として納められる小麦野菜などは会館で換金し、それ以外のワイン、

チーズ、バター、ヨーグルトなどの加工品をマーケットに流しています。マーケットの商品は換金という買い取られた品物と、ノンプレイヤーキャラクターの造った品物か、委託で売られているプレイヤーの流した品物です。

僕達は委託の品物をすべて引き上げ、別名四〇元ポケットと呼ばれる異次元バックに入れました。魔法の品物で、９９品目の品物が９９個まで入ります。それでいながら重さを感じさせません。まさに未来からきた猫型ロボットのポケットのようです。入りきらなかった商品は貸し金庫に預けます。

ヴォルグも品物を引き上げ合流しました。異存はないそうなので、『お茶会』のギルドホームにお邪魔します。

『お茶会』のギルドホームは四つの部屋と広間、倉庫と厨房からなるようです。食料アイテムは厨房に専用の貯蔵場所があります。冷蔵庫なのですが、入るアイテムの量はそんなかわいいものではありません。これにオプションとしてお風呂とトイレがありますが、そういう無駄なスペースを作るのを嫌い、つけないギルドが多いそうです。だってたんなるオブジェクトだったので。

通された部屋は少女趣味のピンクとフリルとレースで構成されたお部屋です。ファンシーという言葉だけでは足りないような気がします。ヴォルグが居心地悪そうにあたりを見回しています。同じく居心地が悪いだろうマリーは……外見だけなら馴染んでいます。だってかわゆいメイドだもん。

『お茶会』のギルドマスターは向日葵という治療者の女性です。治療魔法を使える職業はいくつかあります。かくいう僕、補助魔法使いも使えますが、治療者はその技能に特化してます。

名前のとおり花かお日様のような笑顔で僕たちを迎えてくれました。

ヒマ姐さん、笑顔が眩しいです。

「よう来てくれたな。まま、座り。うちらの間や、遠慮はいらんて」

「お言葉に甘えさせていただきます」
　僕達はそれぞれあいている椅子やソファに座りました。ひらひらレースのクッションが愛らしいです。
「ヒマちゃん、元気ないよ。大丈夫？」
「いやぁ、ジュッちゃんにはわかっちゃう？　こっちも混乱してん」
　ジュ姐さん、よくわかりましたね。僕は全然わかりませんでした。
「こっちは十八人ログインしてたん。全員こっちにきとるわ」
「こっちは八割がログインしていた」
　何人とは言いませんでしたが、『銀狼騎士団』の八割というと、千人は軽く超えているはずです。規模が違いますね。
「うちは全員です」
　全員でも五人ですが。
「もう、気がめいってな。夢なら覚めて欲しいわ。そりゃぁ、現実世界が味気ないから『クリエイト・ミレニアム』しとったんよ。そんでもこれはないわぁ。死んだら現実戻らんかな？」
　ヒマ姐さんが泣き言言ってます。ヴォルグが顔をしかめました。
「それはない」
『はい？』
　その場にいた全員がヴォルグを見ました。
「……あの時、我々は低レベルのメンバーのレベルアップのため、狩をしていた。ちょうど戦闘中、突然ゲームが現実となり、混乱した。そのせいで死人が出たが、大聖殿で復活が確認された」
　…………たんたんと……淡々と語られる言葉に絶句しました。とんでもないときに現実化したものです。
「……死ねん……ちゅうことかいな？」
「正しくは、死んでも復活するということですね。死ぬとどうなります？　ゲームのシステムはどのくらい現実化していますか？」
「クロちん冷静やな〜」
「死はほとんどゲームと同じだな。死体は光の粒子のようになって消え、所持金と所持アイテムの半数を撒き散らす。ペナルティにつ

いては実感がないそうだ」
ヒマ姐、僕より冷静な人がいますよ。ゲームと同じように素材やアイテムが手に入る。ただ……」
「ただ？」
なにを思い出したのか眉間のしわが深くなりました。
「戦闘をゲームと同じに考えない方がいい。あれは……あまりにも生々しい。戦闘中、ゲームでよくやってたようなウィンドゥをひらきっぱなしにするのは難しいぞ。言葉にするには難しいが……あれはゲームの戦闘とは別物だ」
「戦闘なさったんですね？」
ヴォルグが頷いた。
「僕は引率として低レベルのメンバーについていたんだ。パーティ外だが、危なくなったら助けに入る予定だった。現実化で混乱している隙に攻撃されて――助けに入ったんだが間に合わずメンバーが死んだ。あれは嫌なものだ」
重い言葉です。肝に銘じます。体験者の言葉なので。
「なんか怖いなぁ……死ねへんけど、生きてくのも大変そうや」
「戦わずとも生きていくことはできますけどね。資金はそのまま通用しているようですし、マーケットにも品物が溢れています。とりあえず寝るところにも食べるものにも困らないでしょう？」
僕がそういうと、ヴォルグとヒマ姐の顔が情けなさそうに歪みました。なにかまずいことといいました？
「ああ、クロちんはまだ知らんのやな。ヘレーネ、悪いけどお茶持ってきてや」
急話だったのでしょう。すぐヘレーネがお茶をもってきました。
「どうぞ」
ヘレーネが僕の前に紅茶をおき――僕は首を傾げました。違和感。なんでしょう？　このお茶変です。
一口飲んだマリーが顔をしかめました。

「なんだよ、これ。湯？」
そうです。見た目こそ完全に紅茶ですが、紅茶独特の匂いがしません。
「あんなぁ、飲み物はみんな水と同じ味や。食べ物も全部同じ味するねん。うちら、ゲームが現実化したあと、落ち着こおもて、お茶にしたら飲みもんは水の味しかせえへん。食べもんは味のせん食感だけのもんや。ありったけの料理アイテム確認したでぇ」
「それはうちも確認した」
二人のギルマスとヘレーネが嫌そうな顔をしてました。
「うち、おいしいもん食べれんなんていややわ。なんね、なんの罰ゲームやねん」
「うっそぉ、味したよぉ」
ヒマ姐の言葉をジュ姐が遮りました。
そうです。おかしいです。ジュ姐がすでに食べ物を試して味がすると言っていました。
「あたし、果樹園の手入れ中に現実化したの。で、目の前の葡萄もいで食べてみたら、葡萄の味したよ？」
ヒマ姐とヘレーネ、ヴォルグが眼を見張りました。
このさい論より証拠です。僕はバックの中から引き上げたチーズを取り出し、ひとかけら短剣で削り口に放り込みました。
もぐもぐ、おや？
「味します。チーズの」
うちのチーズはこんな味なんですね。おいしいです。
「そんな馬鹿な！」
「え！　試しましたよ、チーズも」
「味、せんかったよね？」
ヴォルグが自分のバックの中からチーズを取り出しました。ヘレーネが厨房に引き返します。
ヴォルグのチーズと『お茶会』のチーズ、それに『陽だまり村』特産チーズを人数分だけ切って全員で試食しました。

まっずぅぅぅ！　ヴォルグと『お茶会』のチーズ、味がしません。
「うえ、なんの拷問だよ」
「がまんできる程度ってのがよけい酷いわ」
マリーとジュ姐にも不評です。
ところが『陽だまり村』特産チーズだけが味がします。
「旨い……」
「美味しいですわ」
「なんでや、なんで味があるんや！」
他にも引き上げてきた『陽だまり村』の品物を試食してみました。
不思議なことに、陽だまり村印の商品はみんな味がします。
なぜうちの商品だけが？
ヴォルグが突然肩を掴んで言いました。
「売ってくれ。倍だしてもいい」
アップで迫らないでください。胸キュンしたらどうするんですか？　いまの僕は男なんですよ～。
「ああ！　ヴォルちんずるい！　うちんとこにも売ってや！　友達やろ？」
「そうですわ！　売ってくれますわよね？」
「と、友達価格で定価でいいです」
ヴォルグと『お茶会』に引き上げてきた商品の一部を販売しました。現金のみの販売とさせていただきます。チーズとバターとヨーグルト。ヴォルグだけがワインも購入しました。
まいどあり。お客様は神様です。
「どうしておたくの商品だけ味がするのでしょう？」
ヘレーネが首を傾げました。こっちの方が知りたいです。
「さあ？」
「わかんねえ」
「あたしは知らないよ」
うちの特産品と他の食料アイテムの違いですか？
なんなんでしょう？　謎です。

「そういえば、あの、クロウさま」
「なんですか？」
「おたくのマリーさまとクロウさまは、その、どうなっていますか？」
こっそりとヘレーネが聞きました。その質問今頃ですか。
マリーがぐれました。
「見てのとおりです」
『お茶会』のメンバーも僕達の性別が逆転していることは知っています。
「クロちん……ついているんか？」
ヒマ姐が声を落として聞いてきました。
「……ついてました」
きゃあ、と女子一同（マリーのぞく）が嬉しそうな悲鳴を上げました。今にも「みせて（特大ハート）」と言いそうなキラキラオメメはやめてください。
「ど、どんなん？」
「なにがですか？」
「ナニが」
きゃ～露骨といったのは誰でしょう？　空耳ですね。×つの？　という言葉も空耳ですね。僕にはなにも聞こえません。
「どんなといわれても、自分のしかわかりませんから」
「ここ、一階にトイレがあるで」
ギルドホームにはトイレ風呂をつけていない場合が多いのだそうです。そこで今は一階の公衆トイレを利用している人が多いのだそうです。
ヒマ姐、僕に男子トイレでナニをしろと？
…………いつかはクリアしなければならない試練なのでしょうが、いまはスルーさせていただきます。
マリーが拗ねてソファでゴロゴロしています。ヴォルグがどこか遠くをみて黄昏ていました。現実逃避するとは軟弱な。

「これから大変ですわね」
ヘレーネさん、頬を染めながら期待を込めた瞳をしないでください。というか、ナニを期待しているんですか？
「そうですね。とりあえず、困りそうなことがひとつあります」
「なんですか？」
「下着です」
ずるっとマリーがソファから落ちました。
「下着？」
「は？」
全員意味がわからないという顔をしてました。気づいたのは僕だけですか？
「いちおう、今は全員着用していますよね」
「いやや わ、クロちんのエッチ」
きゃらきゃらとヒマ姐が笑いました。
「ふざけていませんよ。女性用はミセパンとミセブラというアイテムが存在しますけど、僕の記憶している限りでは『クリエイト・ミレニアム』には男性用の下着アイテムは存在しません」
「………あ……」
さすがにプレイ暦の長いヴォルグにはわかったようです。
「つまり、男性キャラは現在はいているものが一張羅になる可能性があります」
つまり今はいているものを洗うときには替えがないということです。
嫌な予想です。全員が必死に覚えている限りのアイテムを思い出そうとしていますが、たぶんそうなるでしょう。
女子用にはなぜかミセブラとミセパンというアイテムがありますが（どんなニーズですか。マリーのようなネカマさんのリクエストですかね）、男性用のものはありません。
切実な問題です。
「ノンプレイヤーキャラクターもいますから、需要がないわけでは

ないでしょうが、マーケットにはないでしょうね」
「ＮＰＣ？　あれはＡＩだろう」
プレイヤーは冒険者と呼ばれ、ノンプレイヤーキャラクターは自らを『コモン』と称しています。
「………それはどうでしょう。領地を持っているとノンプレイヤーキャラクターと接する機会があるのはわかりますよね？　彼らも現実化したんじゃないでしょうか？　少なくとも感情も意思もあるように思われました。それをＡＩ人形といえるかどうか」
マリスは僕に見詰められ、てれていた。出かけるまでに数人と接したり質問したりしましたが――あれを人形とはとても思えませんでした。
彼らは僕達に雇われているという自覚がありました。彼らの感覚からすると、いつものように暮らしていた僕らが突然同時におかしくなったという感覚のようです。
執事のセバスチャンやアリスが心配していました。
「クロちんとこの執事のセバスチャンというと、あの美青年やな」
「クロウさまでしたら、絶対眼鏡仕様になると思いましたのに」
「ジュ姐が僕とキャラかぶるからやめてって言ったんだよ。つけたかったな、眼鏡」
館を買い取ったとき、働くＮＰＣの外見を選べます。僕は執事をとりました。
ロマンスグレーと迷ったのですが、黒髪黒瞳の白皙の美青年にしました。執事なので名前はセバスチャンです。これは譲れません（なぜ？）。他のセバスチャン（？）と区別するためノワール・セバスチャンと名づけました。名前の元ネタはわかっても沈黙してください。できれば眼鏡にしたかったです。せめて片眼鏡でも。でも、まあ、満足しています。
ちなみにメイドはマリーが取りました。金髪碧眼で巻き毛のアリスちゃんです。男の妄想の産物ですね。なんでもルナティック・ハッターにはアリスがいないとだめなんだそうです。その根拠はなん

でしょう？
猫はいますが、双子はいませんよ。
下女はランちゃんです。アマクサ命名。
下男はジュ姐が名づけました。ハリスくんです。
料理人はソウセキ老師が名づけました。ヤンさんです。
ワだけはちょっと変則的ですが、アカサタナハマヤラワ、コンプリートです。
……だからネーミングについてのツッコミは禁止です。
「……とにかく、情報交換をしないか？　こちらでわかったことは教える」
ＮＰＣの話で盛り上がっていた僕らはヴォルグの呆れたような声にはっとしました。
「ええ、こちらもお願いします」
「うちらもそれでいいわ」

タウン事情　有象無象の様子（後書き）

お待たせしました。二話目です。ネーミングについての突っ込みは禁止です（笑）ガールズ（？）トーク少し。

マーケット事情

少しまじめな話をしましょうか。僕達は情報交換をしました。
タウンとタウンは直通で繋ぐ転送用のシステムがありました。門の形のオブジェクトなのですが、これをくぐると別のタウンに転送されます。他のタウンに移住するとき便利です。しかし、今回わかったことなのですが、この“天界の門”と呼ばれるシステムが稼動していませんでした。確認済みです。
タウンは分断されている状態です。
他のタウンにいる人にも念話は可能だということです。
『銀狼騎士団』のメンバーが他のタウンに遠征中だったそうです。
「ギルドキャッスルの方に帰ることも出来るからな。今は他のタウンの情報収集をさせているが、どこもあまり変わらない状態だ」
「それで、いまどのくらいのプレイヤーがいますか？」
「五つのタウンを合わせれば、約三万くらいだ」
つまり半数はアルファにいるということです。
「危険ですね。ヒマ姐達もそうですが少人数で出歩かない方がいいです。固まっていた方が安全です。僕の見立てでは、モンスターよりプレイヤーの方が危険です」
レベル１００モンスターは滅多にいませんが、１００レベルのプレイヤーはめずらしくありません。
「そやねえ。うちらは当分ギルドホームで寝泊りする予定や」
「我々も今日中にはギルドキャッスルに引き上げる予定だ。今後はアルファをホームタウンとする」
ここで何度か名前がでてきても説明を省いているギルドキャッスルについて説明しましょう。
そのメンバーが１００を超えるような大手ギルドになりますと会館のギルドホームでは間に合わなくなります。タウンの周りにはいくつか建物があります。これが購入可能なのです。領地やギルドホ

ールと同じです。購入し維持費を支払えばいいのです。領地との違いは村と領民がついてこないことでしょうか。
『銀狼騎士団』は当然このギルドキャッスルをお持ちです。
それからいくつかの情報交換した後、おひらきとしました。

「クロウさま達はこれからどうなさいますの？」
「マーケットに行きます。マリーが服を買うので。あと、こんな状況ですから、必要になりそうなものを買っておきたいです」
ヒマ姐とヘレーネさんがそっと目配せしあいました。
「うちらも一緒に行っていい？」
ヘレーネさんがどこかに念話を送っています。
マリーの衣装を新調しにマーケットに行くことを知ると、『お茶会』の女性メンバーが一緒に連れて行って欲しいと主張しました。
「クロウさまのおっしゃっていたとおり、下着は必要ですわ」
「そやねん、で、ミセパンってどこで売っとるん？」
………マリーさんお願いします。
「ああ、マーケットでも委託のところは普通売ってないからな。ノンプレイヤーキャラがやってる小さな店があるんだよ」
アイテム化されるということはそういうニーズがあったということですが、チラリを前提としたアイテムなど、どういった人が欲しがったのでしょう。謎です。マニアックです。
「場所は……わかりづらいから連れてってやるよ。タウンにひとつしかないからな」
「おおきに」
男前です。マリー。
ヴォルグがナニヤラ苦悩の後にのたまいました。
「………うちの女子メンバーにも教えるべきかな？」
「だと思いますよ。あんまり数の多いものではないので、同じ結論に至った人が買い占める可能性があります」
『銀狼騎士団』にも女性メンバーがいます。百人はいるでしょう。

わかっていて教えなかったら後で恨まれるかもしれません。
あ、てれています。恥ずかしがっています。なんですか、婦女子の下着ぐらいで。からかいたくなるから赤面しないでください。
「銀狼のメンバーなんか一斉にきたら売り切れるやないか」
「そうですわね、急ぎましょう」
ヒマ姐とヘレーネが催促したのでマーケットに移動することにしました。

マーケットはタウンの南側にあります。
ノンプレイヤーキャラクターのお店または委託販売場、会館がプレイヤーから買い取った品物を販売するスペースも存在します。プレイヤー直営の店などもあります。
NPCのお店、会館の買い取り品は定価が存在し、この金額は変わりません。物価の目安になっています。
委託販売またはプレイヤー直営の店にはNPCや会館では売ってない品物もあり、販売価格は出品するプレイヤー自身で決められます。
プレイヤー直営の店には露店、カート販売、店の三種類ありまして、普段はにぎわっているのですが、今日はさすがに閑散としています。店を出す気力もないようです。
マリーの先導で進む僕たちに、なんともいいがたい黒い視線が向けられます。無限の呪いがこもっていそうです。
視線の先はおもに僕とヴォルグです。『お茶会』のメンバーの半数は女性です。美女、美少女に囲まれたハーレムに見えるのでしょう。お門違いもいいところです。僕は美女に囲まれてても嬉しくありません。ヴォルグだけ呪ってください。
入り組んだ道の奥まったところに『かわゆいしたぎのおみせ（ハート）』というふざけた看板のお店がありました。ショッキングピンクの外装がファンシーです。
マニアックです。イタイです。

ヴォルグが思わずといった感じで背を向けました。巨人とも渡り合うと謳われた"狂戦士"ヴォルグに敵前逃亡を促すとはなんという攻撃力でしょう。『かわゆいしたぎのおみせ（ハート）』恐るべし。

がしっとマリーがヴォルグの腕を掴みました。笑顔なのに眼が笑っていません。黒いです。逃がすものかという気迫を感じるのは僕だけでしょうか？

背後にアナコンダのヴィジョンが見えます。目の錯覚ですね。

「ここだぜぇ、さあ、入ろう」

「いや、僕は……場所はもう伝えたし」

「あ～ら、ここで帰るなんて、いわねえよな？　なぁ？　なぁあ？」

ドスのきいた声で脅しているマリーはおいといて、さて、ここでミセパンの解説などしたいと思います。

『クリエイト・ニレミアム』では装備を取ると下着姿になります。これはいちおう素っ裸に見えないようにという配慮でした。しかしながらミニスカートの戦闘服（そういうニーズがあった事自体嫌です）ができてくると、見える下着が淡色の味も素っ気もないものでは寂しいとの意見が寄せられ追加されたアイテムです。

マリーが愛用しているような皮鎧程度の防御力のあるメイド服、同じく皮鎧程度の防御力のあるセーラー服などの愛用者が利用しているらしいです。

マニアックです。そんな服装で戦闘したいということ自体がマニアックです。さらにその際のチラリを前提とした要望であることは、さらにマニアックです。

ちなみに男性用にはソウセキ老師も愛用している皮鎧程度の防御力のあるタキシードがあります。

普通の女性の意見とは思えませんが、そういう理由で造られたアイテムです。基本的にファンシーでラブリーなデザインばかりです。Tバック、Tフロント、紐パンのような扇情的なデザインのものは存在しません。

純白、ピンク、水色などの柔らかい色彩に、フリルやレースやリボンがこれでもかとばかりに愛らしさを表現しています。

ものによっては魔法付与により防御力のある下着もあります。ぱんつの防御力を上げて、ナニからナニを守るのでしょう？

謎です。

狭い店内の中に愛らしいものが所狭しとおいてあります。

「あ、これ可愛い」

「こっちもレースが愛らしいですわ」

「そっちのはノーマルなやつ。そっちの高いやつは魔法付与で防御力あげたやつだ」

「わ、わたしにはどれも派手すぎます」

リボン多寡でかわゆく仕上げられたものを手に、女の子が恥らっていました。初々しいです。

見せるためのものですからねぇ。

「諦めろ、それが一番地味なデザインだ」

きゃわきゃわと『お茶会』の女性陣が下着を選んでいます。カップがどうのという会話も交わされております。貧乳、巨乳仕様のミセブラもあるので安心です。マリーの解説のもと、数枚選んで売り子に声をかける娘もいます。和気藹々としています。

和みますね～。和みです。

和む女性陣とは裏腹に『かわゆいしたぎのおみせ（ハート）』はヴォルグのＨＰ以外のナニカに大ダメージを与えているようです。

壁になつくのはやめてください。連れとして恥ずかしいです。

マリーのように堂々と仁王立ちしてください。高笑いまでしろとは言いませんから。

しかしながら、男性用下着がないというのは性差別です。男は×××でいろというのでしょうか？

試練です。

そうしていると新しい集団の客が着ました。服装からいって『銀狼騎士団』の女性メンバーのようです。ヴォルグの連絡が届いたよ

うです。狭い店内があっという間に満員です。下着も数枚は欲しいでしょう。さながらバーゲン会場のようになってきたので、買う気のない僕とマリーとヴォルグとジュ姐は店から退散しました。
店の外までお客が並んでいました。今日は売り切れ必至です。
「買わないのか？」
「俺はもう何枚かもってるぜ」
そうです。マリーはミセパンの愛用者です。屋敷の個人用倉庫にあります。ミセブラももっています。たぶん、着用済み。マリーがいま死亡したら、予備のミセブラとミセパンと陽だまり村印の商品を撒き散らして死ぬでしょう。
そんな死に方は末代までの恥！　死なないでください。
「あたしはいいよ、当てがあるから」
「今の僕に女性用の下着をはけと？」
少し間があってからヴォルグが視線をそらしました。
いま、なにを想像した！
「じゃあ、僕はここで」
立ち去ろうとするヴォルグにいちおういっておきたいことがありました。今日のあの騒ぎでは下着を買えない人もいたでしょう。
「ヴォルグさん、もし今日下着を買い逃し、すぐにでも予備が欲しいという方がいらっしゃったら、御連絡ください」
「なぜだ？」
「融通します。うちの縫製者がレシピをもっているので」
マリーの戦闘用メイド服とミセブラ、ミセパンはソウセキ老師の作品です。老師の戦闘用タキシードも同じ。
ミセブラ、ミセパンのレシピというのは存在します。意外に高レベルを必要とします。ノーマルのミセブラ、ミセパンで８５レベルを必要とする代物です。魔法付与ミセパンは９０レベル。
ナニユエここまで高レベルなのでしょう？
うちのマリーにせっつかれ、ソウセキ老師がなくなく習得しました。全デザインをコンプリートしているはずです。「我輩はこんな

ものを作るため縫製者になったのではないのですにゃ～」と泣きながら作られます。
このさい老師には泣いてもらいましょう。世のため人のためです。生産系のなんでも屋と呼ばれる錬金術師ですが、洋服系のスキルはありません。
ここで僕のサブ職業『錬金術師』の説明などしたいと思います。
『クリエイト・ミレニアム』において錬金術師とは鋼ではなくアトリエのほうです。意味がわかっても沈黙してください。
そもそも最初のバージョンからあるサブ職業でして、冒険に必要な品物を自作するのはこの職業にやらせようというコンセプトで創られたのではないでしょうか。当時のほかの職業は冒険に必要なスキルばかりだったのです。
よって錬金術師は武器、防具、アクセサリ、道具、各種ポーション、薬品、地図、書類、食料アイテム製造などのスキルを持ちます。後に追加された服飾のスキルはさすがにありませんが、皮鎧なら作れます。
後にユーザーのニーズに合わせ料理人や鍛冶屋など各種の生産系職業が追加され、錬金術師が得られない高レベルレシピなどが創られましたが、５０レベルまでのレシピなら大概はもってます。
高度なものではないけれども、おおよその間に合う生産系レシピを持つ器用貧乏のなんでも屋、それが『クリエイト・ミレニアム』の錬金術師です。
もっともポーション製作などに錬金術師しかもてない高レベルレシピもあります。
しかしながら、縫製者は完全に後付けの職業であり、戦闘用メイド服やミセパンは縫製者専用レシピです。綿花から糸をとり、布に仕上げるレシピは縫製者かＮＰＣしか持てません。
陽だまり村の綿花はソウセキ老師がひなたでぽくぽくしながら糸に加工しています。糸玉をつついて遊んでいるのはロールプレイですよね？

「……そういうことは副官の南と交渉してくれないか？」
「えっと、南さん……以前ミリオン戦闘やったときも副官だった方で間違いないですか？　その方となら念話できます」
「ああ、彼女だ」
「わかりました。そちらに連絡しておきます」
硬質の美貌を誇る黒髪の女性でした。『お茶会』の敏腕金庫の見張り番ヘレーネさんもそうでしたけど、できるナンバー2の女性というのは凛としたイメージがあります。ヒマ姐さんを太陽とすれば、ヘレーネさんは月、南さんは夜の闇のよう。それぞれが魅力的な大人の女性です。
恐らく商売になるでしょう。
もともとゲームであった『クリエイト・ミレニアム』では衣服はそう需要があるわけではないのです。ましてミセブラ、ミセパンなどマニアックなファン専用のアイテムでしょう。しかし、現実となった今では一部のマニアしか持っていないアイテムであったものが必需品となります。
比率をそのままもってくるのならアルファには約四千五百人の女性がいるはずです。その全員が洗いかえ用に下着を欲しがれば、NPCが定期的に供給する量ではとても間に合いません。まして、ミセブラ、ミセパンのレシピをもっている縫製者も少ないでしょう。
皆無とはいいませんが、件のレシピはイベントをクリアしてもらうものです。実用的な役に立たなかったマニアックなアイテムの製造レシピを手間暇かけても欲しがる物好きがそういるとも思えません。
うちはクリアしました。マリーの要望で。鬼です。ちなみに戦闘用メイド服のレシピもイベント品です。鬼畜です。
「こ、これが、我輩が目指した縫製者の高み（いつ、そんなもの目指していたんですか、老師？）だというのですかにゃ！　否！　断じて否ですにゃ～っ！（ＴＴ）」
ミセパンレシピをコンプリートしてしまったときの老師の無念の

雄叫びはメンバーの涙を誘いました。笑いすぎて。
老師！　狙っていたでしょう！　タイミングよすぎです。パソコンの前でお腹を抱えて笑いｗキーを連打したのは僕だけではありません。

ヴォルグ、『お茶会』メンバーと別れ、マリーの装備を新調するためいくつかの店をのぞきましたが、結果はあまりはかばかしくありません。マリーの職業は『盗剣士』です。
この職業はロビンフッドとか某Ｚの身軽で剣技もできる怪盗みたいなものをイメージしているようです。
その特徴は早さです。暗殺者と盗剣士が『クリエイト・ニレミアム』の速さにおけるトップです。そのかわり鎧は皮鎧までという制限があります。
その鎧の防御力が問題です。
ＮＰＣが造る皮鎧は防御力が一定です。高品質の皮鎧というのもありますが、プレイヤーの造ったそれには敵いません。高レベルのプレイヤーが造った品物にはボーナスポイントがつきます。レベルの高いプレイヤーが作った品物ほどステータスが高いのですが、今回の騒ぎでプレイヤーの多くが品物を引き上げてました。
現在売られているものではソウセキ老師作戦闘用メイド服より高性能のものはありませんでした。老師の縫製者レベル１００は伊達ではありません。
「どうします？　防御力は下がりますが、出来合いのものを買っておきますか？」
「うぬぬぬ」
「下に着る服だけ買って、皮鎧は僕が造りましょうか？　老師の戦闘用メイド服には劣りますが、ここにあるものよりはましですよ」
僕の錬金術師レベルは１００なので、ボーナスがありますが、皮鎧のレシピ自体はあまり高レベルのものはありません。中レベルがせいぜいです。

「そうするしかねえか……」

「メイド服は勝負服としてとっといて、普通のときは皮鎧使えば？」

……ジュ姐、メイド服が勝負服ってなんとなくマニアックです。

けっきょくマリーは露出の少ない服を購入しました。僕が使える最高級の素材を買い集め、いったん領地に帰ることにしました。もちろんマリーの自腹です。

他にいくつか品薄になりそうな素材を買い集め、帰路に着きました。

ちなみに、タウン以外の場所に領地やギルドキャッスルなどの本拠地がある場合、そこも帰還呪文の行き先のひとつして選択できます。ギルドホームはこれに含まれません。

とにかく、領地に帰るのは一瞬です。

さて、これからどうなるか不安です。

マーケット事情（後書き）

ばんつネタ、ここまで引っ張れるとは思っていませんでした。ＷＷＷＷでいいんですか？

領地に帰るといくつかのことが解決し、また謎が増えました。
まずトイレットペーパーのことです。
屋敷の倉庫にありました。もちろん買った覚えも造った覚えもありません。
トイレットペーパーをどうしようかと立ち話していたら、セバスチャンがいいました。
「ございますが？」
「どこに！」
「お屋敷の地下にある倉庫にございます。清掃道具などお屋敷のメンテナンスに必要なものをしまっておく場所でございますが」
セバスチャンに案内してもらいました。確かに清掃道具とか予備のシーツ、カーテンなどと一緒に山積みになってました。
セバスチャンに聞いてみましたら
「こちらのペーパーは旦那様方が毎月お支払いになっておられますお屋敷や領地の維持費のうちから賄われております。毎月いつの間にか補充されております」
館の維持費にそんなものが入っているとは知りませんでした。
「というか、どこで作っているんですか！　誰がもってきているんですか！！　そんなレシピあるんですか！！」
セバスチャンが眼を見張りました。トイレットペーパーのロールを片手に考え込んでいます。
「考えたこともございませんでした。そういえば不思議でございます。どこで造られているのでしょう？」
謎のアイテムです。『トイレットペーパー』。誰がどこで作っているのでしょう？
そういえば『クリエイト・ミレニアム』のトイレは水洗でした。
しかし、下水道を造った覚えはないのです。流したものはどこへ行

くのでしょう？
　さらに謎です。

　そしてもうひとつ。陽だまり村でもお茶がお湯でした。料理アイテムは味がしません。
　メンバーを集めた緊急会議で老師が証言してくださいました。
「三時にセバスチャンがお茶とお菓子をもってきてくれましたにゃ。にゃんと、報告どおり飲み物は水の味、食べ物は味なしですにゃん」
「陽だまり村でもですか」
「ただし、素材の状態では味がする。他にうちの特産品は加工物だが味がある。砂糖、塩はちゃんと味がある」
　アマクサが付け加えました。
「料理アイテムは味がなくて、素材は味がする……ですか。うちの特産品と料理アイテムの違い……なにか法則のようなものがありそうですが……」
　僕は腕を組んで考え込みました。
「それから……下着のことですにゃ、海パンではどうですかにゃ？」
「か、海パン？　あ！」
　忘れていましたが、この『クリエイト・ニレミアム』にも水着がありあります。
　海辺の町のクエスト関係で報酬として『～な水着（女子専用）』のレシピがあるのです。～は大胆、とかエッチ、とかの言葉が入ります。
　誰の趣味だよ！
　その中で確かに『海水パンツ（男性用）』というハズレ報酬がありました。ちなみに『～な水着（女子専用）』レシピもコンプリートしているはずです。マリーの要望で。鬼畜です。「ま、またつまらぬものをコンプリートしてしまったのですにゃ～」という老師の無念の叫びはメンバーの爆笑を誘いました。
　後に老師お手製の水着でリゾート気分を味わったのはいい思い出

です。おかげさまでうちのメンバーは全員水着をもっています。
ちなみに女子用の水着に比べると『海水パンツ（男性用）』の必要レベルは低いです。四十です。半分です。性差別だと思います。
一時的な代用品としてはいいでしょう。
「その手がありましたか」
ぱんつ事情はいちおうのめどが立ちました。
「『銀狼騎士団』の下着の注文を受け付けるつもりですかにゃ？」
「そのつもりです。女子メンバーだけでも二百か三百はいたはずですよね。大口ですよ」
「大口過ぎますにゃん！　我輩を過労死させるつもりですかにゃ！
それに陽だまり村の綿花はまだ実験段階で数が少ないのですにゃ。数百もの注文は受けられないのですにゃ～」
綿花栽培は最近始めたばかりでした。素材がなければ注文がこなせないのはどおり。しかしながらちゃんと対策はしました。
「安心してください、老師。こんなこともあろうかと、素材を買い込んであります」
僕はバックから布を取り出しました。綿花もあります。逃げ道は当然潰します。
「ぐにゃん！」
老師は痛恨の一撃を受けた。
「NPCの供給量はひと月にいくつと決められています。シェア独占も夢じゃありません。おそらくミセパンのレシピをもっているようなコアなプレイヤーは少ないです。ましてや、あの高レベルですよ。造れるプレイヤーはそうはいません。今までマーケットに流れたこともないでしょう」
「我輩とて、隠しておきたいですにゃ」
老師には隠しておきたいことが満載です。アレやコレやのイロモノレシピをコンプしているなど、大きな声ではとても言えません。
「いいじゃないですか。人助けですよ。老師がやらねば、女の子たちがノーパンになってしまうのですよ。いいんですか！」

「それはそれで男のパラダイスのような気がしますにゃん」
うぬ、そう来たか！　ぱっと他のメンバーを見渡しましたら、アマクサとマリーが高速で眼をそらしました。しかし、僕は彼らの口元がにやけたのを見逃しませんでした。
いま、なにを想像した！
男というイキモノは！
「なんてことを言うんですか！　いいですか、考えてみてください」
僕の脳裏には南さんの凛とした軍服姿が浮かんでいました。
「あの『銀狼騎士団』の女性の軍服の下がラブリーなミセブラ、ミセパンになるんですよ！　それはそれでギャップ萌えじゃないですか！」
「確かに！」
マリーが即答しました。中身は男ですね。老師の耳がピクッと反応したのを僕は見逃しませんでした。畳み込むなら今です。
「恨まれますよ。女の恨みは怖いですよ」
「そ、それはひしひしと感じますにゃ。しかし、我輩はぱんつ販売で天下をとりたくないですにゃ！」
「とれるんですか？　ぱんつで」
「ぱんつの神と呼ばれたくないですにゃ！　ぱんつ販売で歴史に名を残したら末代までの恥ですにゃ！　ぱんつ販売で名が売れてもいいんですかにゃん！　うちは帽子屋（ハッター）であって下着屋ではないのですにゃあ！　『ルナティック・ランジェリー』とよばれてもいいのですかにゃん！」
『それはいや（だ）（です）（ね）！』
ギルドメンバーの心がひとつになった瞬間でした。
いいえ、下着をばかにするつもりはありませんが。下着を笑うものは、下着に泣くのです。後一週間もすれば現実となるでしょう。一週間同じぱんつはけますか？　僕は嫌です。毎日取り替えて洗濯したいです。
「大丈夫です。あわせて特産品も売りますから。なぜかうちの加工

品には味があります。きっと欲しがる人は増えるでしょう」
　味がする理由がわかれば、もっと儲けに繋がるでしょうが。
「それはそれとしておいといて、ひとついいですか？」
「なんですか？」
「ヴォルグさんから忠告されましたが、戦闘はゲームだったときと違い過酷なようです。しかしながら、領地を持っている以上、戦闘は避けられない義務でもあります。どうしたいですか？」
　これは領地を持つものだけのイベントですが、領地をモンスターが襲うというイベントがあります。
　もともと領地というのは自動生成で造られたタウン近くの『小さな村』なのです。これを買い上げて領地にするのですが『モンスター（または野生生物）が村をあらす』という軽いイベントが三ヶ月に一回ぐらいの確率で発生します。
　さしてレベルの高くないモンスターですが、放置しておくと領地に被害がでます。これを撃退するのも領主の役目。
　領地を持つほどのプレイヤー、またはギルドであれば難しくありません。
　ドロップ品は臨時収入となります。素材も手に入るので悪いイベントではないのです。
　自分でやるのが面倒なときはＮＰＣの兵士を雇えます。最低五人雇わなければならない義務がありますが、自分でモンスターを撃退するのが面倒な人はこの兵士を多めに雇っておくのです。
　五人ずつの単位で雇えます。強さは大したことありません。レベルにして２０くらい？　雑魚モンスターとどっこいどっこいの強さです。プレイヤーが戦闘を指揮することもできます。その場合はＮＰＣとパーティをくんだことになります。戦闘を繰り返すとレベルが上がりますが３０ぐらいが限界です。死ぬこともありますが『コモン』は復活できません。新しく雇いましょう。
　たとえ兵が倒したものでもドロップ品や素材は領主のものとなります。館の倉庫に納めてくれます。働いてくれた兵士にボーナスを

渡すと忠誠心が上がります。
兵士は忠誠心がなくなると脱走します。忠誠心には気をつけなければなりません。戦闘が終わっても傷を癒さなかったり、兵士が死んだりすると忠誠心が減ります。月々の給金を支払わないと一気に０になります。
給料の未払いは厳禁です。兵士だけのパーティの場合は予めポーションなどをわたしておくとよいでしょう。館に帰ってきたとき負傷していたら、すぐさま治してあげましょう。ボーナス、プレゼントなどで忠誠心を上げておくことをお忘れなく。
どれだけゲームのシステムどおりなのかわかりませんが、このイベントが起きる可能性はかなり高いと思われます。
うちは自分達でやればいいと思っていたので、最低限しか雇っていません。
「どうしたいとは？」
老師、猫言葉が消えております。顔がマジですね。
「僕たちにはいくつかの選択肢があるということです。ひとつは領主であり続けること。いくつかの義務を背負うことになりますが、陽だまり村と館が僕たちのものです」
これもひとつの選択肢。
「ひとつは領主であることを放棄すること。月々の維持費を支払わなければ、当然領主の権利を失います。この場合僕たちには何も残りません。追い出されるだけです」
これもまたひとつの選択肢。権利を失えばアイテムとともに館から強制退去させられるのです。
「ひとつはこの館を含む『陽だまり村』を売却することです。この場合、最低でも資産の半分は残ります」
領地は売りに出せます。会館で買い取ってもらうこともできますが、その場合どれだけ発展させていても最初にゾーンを買い取ったときの半額になります。他のプレイヤー、またはギルドに買取をお願いすることもできます。その場合の金額は相談になります。

買い取った方は決められた維持費を会館に支払えばいいのです。前の持ち主が作った施設がそのまま使えます。
これは領地を管理しきれないときの手段です。ギルドキャッスルも売買できます。
プレイヤー同士の売買の場合は、賢者あるいは錬金術師が書類を製作し、本人たちの署名ののち会館での手続きが必要です。
「どれを選びます？」
「愚問ですにゃ」
老師が紅茶風お湯を啜りました。
「せっかくここまで発展させたんだよ。まだ試したいこともあるし」
「僕に育てた薬草達を手放せと？」
メンバーの意見を代表し、マリーが腕を組んで傲然と言い放ちます。
「ここは、俺達の家だぜ、ギルマス」
男前です、マリー。
「素晴らしい。全員一致ですね。では、僕達にはやらなければならないことがたくさんあります。領地の維持費を稼ぎ、兵士の給料、使用人の給料、職人達の手当てを支払わなければなりません。そして、領地を守るためには戦わなければなりません」
思わず笑ってしまうのを僕は止められませんでした。さすが僕のギルドのメンバーです。『気狂い帽子屋（ルナティック・ハッター）』の名前どおり酔狂人がそろっています。
「戦闘訓練をしましょう。ローテーションを組んで。陽だまり村に一人は残るようにしましょう。なにかあれば念話で連絡してくれればすぐに駆けつけれるように。残った人はなにかの襲撃があった場合、兵士を使ってくれてもかまいませんよ。まずはレベルの低い狩場から初めていきましょう。慣れるのが大事です。少しずつ難易度を上げていきましょう。戦闘方法も考える必要がありますね。基本的なフォーメーションを決めておきましょうか。さあさあ、僕達には泣いている暇も立ち止まっている暇も絶望する暇もありませんよ。

さっそく作戦を練りましょう」

これはクエストです。内容は『異世界と化した世界で領主であり続けること』『生き続けること』『この世界の法則を見抜くこと』

このクエスト確かに『ルナティック・ハッター』が請け負います。

あまたの謎と世界の法則（後書き）

ぱんつネタ、まだまだひっぱるかも知れません。実はネタの仕込が多すぎて読者さまがどこまで拾ってくれているか不安です。仕込みすぎ？

一日経ちました。この世界でもお腹はへります。うちの料理人が夕食を用意してくれましたが、味がありませんでした。サラダもです。ところが野菜を丸かじりすると味がします。サラダと野菜の違いですか？　料理と素材？　謎です。
とりあえずうちはまだましでしょう。ヨーグルトやチーズ、バターなどをかけたりのせたりして味が足せます。
朝食ののち、ヴォルグに念話をかけました。
「おはようございます。『ルナティック・ハッター』のクロウですが、少しよろしいでしょうか？」
『ああ、かまわない』
「昨日はあの後どうされました？」
『怒られた』
「はい？」
お約束のやり取りのつもりだったのですが、怒られた？　『銀狼騎士団』のギルドマスターが？　誰になぜ？
『食料のことだ。ギルドの共通口座を使ってでももっと買っておけと』
ああ、納得しました。ヴォルグ個人の所持金（ドロップ品を換金したお金はギルドのものということで手をつけませんでした）のほとんどを使っていたのですが、あの量では『銀狼騎士団』全員にはとても回りません。大人数ですからね。
『こちらから連絡しようと思っていた。売ってくれないか？』
「いかほどですか？　と言っても他との兼ね合いもありますし、うちの製法ですと時間がかかりますので、今すぐということでしたら数に限りがあります」
『どれだけ出せる？　出せるだけでいい』
「御予算は？」

『二倍までなら出していいそうだ』
　率直ですね。駆け引きをするつもりはないようです。まあ、顔見知りですし、初回からそれほど足元見るのも可哀想ですので、販売できる数とちょっと割り増しさせてもらった金額を表示し、了承してもらいました。
　さすがに大手ギルドですね、金に糸目はつけません。まいどあり。
「さすがですね。じゃあ、こちらもサービスしますよ。果物、野菜などは素材の状態なら味がします」
『果物はこちらでも確認したが、サラダは味がしないぞ』
「“サラダ”という食料アイテムに加工するからですよ。生で丸かじりしてください。手で塩を振り掛けるくらいなら大丈夫ですよ」
　あれ？　いま何か引っかかりました。アイテム……素材……
『なるほど。後で試してみよう。確かそっちは、果物も野菜も栽培していたな？』
「村を持っていますからね。そっちの商談はまた後ほど。ところで昨日アルファにうつると言っていましたが、他のタウンのギルドキャッスルはもう処分してしまいましたか？」
　ここで『銀狼騎士団』の説明をいたしましょう。“凶戦士”と異名をとるヴォルグさんが率いる戦闘系大手ギルドです。ヴォルグさんは現実世界でもサバゲーを嗜むミリタリーマニアです。その手のちょっとした知識が豊富です。
　そもそもファンタジー系RPGでは初心者は迷ったら人間の戦士をやれと言われております。そうすればそこそこ活躍の場がありますので無難です。
　戦士系は前衛の花形です。“肉の壁”という別名もありますが。敵に対する壁となり後衛を守る、もしくはアタッカーなどその活躍は華々しいです。プレイスタイルはシンプル。“とにかくブッ叩け”“タコ殴りにしてナンボ”だと僕は常々思っております。
　え？　偏見？
『クリエイト・ミレニアム』では戦士系をやりたければ『銀狼騎

士団』で学べといわれております。

『銀狼騎士団』ではその蓄積された戦闘ノウハウを新兵にきっちり叩き込み、一人前に育ててくれます。

低レベルのメンバーのレベル上げの狩りにギルマス自ら付き添うぐらい面倒見のよいところです。そのため新人は入りやすく、育った後もギルドを離れない人が多いです。

大規模戦闘においても主戦力となることが多いです。

メンバーが大変多いため、『クリエイト・ミレニアム』の五つのタウンすべてに規模こそ違えギルドキャッスルをお持ちです。

『そうしたいところだが、維持費を支払ったばかりだし、この有様では売りに出したところで買い手はつかん。会館に買い取ってもらうしかないが、そこまでして処分するほど困ってはいない』

「では、その処分ぎりぎりまで待ってもらえませんか」

『……なぜだ？』

「そちらさま限定ですが〝天界の門〟の代わりになります。維持しておいたほうが得策かと」

『クリエイト・ミレニアム』の五つのタウン――アルファ、ベータ、ガンマー、デルタ、イプシロン、ギリシャ文字読みにしただけです。安易！――を直通で繋いでいたワープポイントは稼動していません。しかし、帰還呪文における『領地、ギルドキャッスルも目的地に選べる』という法則を使えば、複数のギルドキャッスルをお持ちのギルドはαタウン近くのギルドキャッスルからβタウン近くのギルドキャッスルまで一瞬で移動することが可能です。

ギルドに加入したその瞬間から選べるので、一時的にそのギルドに加入し、移動した先で脱会するということも可能なのです。

なにかに使えませんかね？

『それは気づかなかったな。わかった場合によっては更新も考慮にいれよう』

「あ、そうそうギルドキャッスルには最初から風呂、トイレがついてますよね？」

『ああ、助かっている』
トイレが使えなかったら困りますものね。
「これは僕達の館であったことなんですが、地下倉庫がありませんか？　もしかしたら、トイレットペーパーがしまわれているかもしれません。館では維持費のうちだったそうですが」
『――確かめさせる。少し待ってくれ』
「お待ちします。それはそれとして、こちらが本命なんですが、下着の――」
『それは南と話してくれ』
少し恥ずかしがったような響きがありました。愛らしい女性用下着とは関わりたくないようです。わからないでもありませんが。
「男性用です。代用品ですが」
『なに？』
「『海パン』です。下着ではありませんが、代用品に――」
『あるのか！　そんなアイテム！　ああ、いや、確かネタアイテムとしてあったな。レンタルのが』
知っていたようです。さすが古参のプレイヤー。女子用水着は売っていましたが、海パンはレンタルしかありませんでした。女の水着は売り物になっても海パンは売り物にもならないシロモノだったようです。
性差別だと思います。
手に入れるにはレシピを手に入れるしかないのですが、欲しがる人がそれほどいるとは思えません。
というか、レシピがあることさえ知らないのでは。
まあ、ゲームの中では海水浴できるわけじゃありませんからね。
確かにネタにしかなりません。
『売ってくれ！』
「いかほど？　お値段は昨日のミセパンと同額でどうですか？」
いや、本当はもっと安くてもいいんですが。物の値段の目安は習得必要レベル×で決まるので、本来は半分ももらえば適正でしょう

か。

すみません、足元見ました。

『ちょっと待ってくれ――とりあえず８４２枚――大至急だ！　できれば三日以内に』

「無理です！　うちの縫製者が過労死します！　というか、素材も足りません！」

予測を遥かに上回る注文に僕は驚きました。８４２というのは、男性メンバーの数でしょう。一人一枚欲しいのはわかりますが、三日以内って、そんな性急な。

この世界でも過労死ってあるのでしょうか？　死んでも復活するそうですが。

「時間ください。まずは女性優先で」

『必需品なんだがな……』

「それはわかります。しかしない袖はふれません。注文は受け付けますので、複数回に分けて納品させてください。ある程度製造できましたらそのたび送るということで」

交渉して注文は受けて、三日後に作れている分だけ納品。後は素材が手に入り次第作れるだけ納品していくということになりました。

『ちょっと待ってくれ――あった？　そうか。ありがとう。トイレットペーパーのことだが、本当にあったぞ。地下に倉庫があるとは知らなかった。それもすべてのキャッスルにだ。維持費に入っているなら、更新していくのもありだな。助かった』

「それはよかった。ところで、南さんとの交渉ですが、サイズやデザインのことがございますので、直にカタログなど渡したいのですが、お時間いただけますか？」

『最優先で行かせる。今日、何時ならあいている？』

「では、午後の四時か五時くらいで。アルファの宿でどうですか？　それまでに海パンの枚数とサイズだけまとめておいていただけると助かります。海パンのデザインはひとつだけなので、Ｓ、Ｍ、Ｌ、ＬＬのサイズがございます。ええ、お願いします」

大口の注文受けました。『銀狼騎士団』は現在男子８４２名、女子３６５名の１２０７名です。けっこう高いアイテムなのにぽんっと買うとおっしゃいます。太っ腹です。
大もうけはよろしいのですが、なぜだか切羽詰まっているかのように感じられました。たかが下着なんですけどねぇ。
「仕方ないですにゃあ。あそこは戦闘系ギルドですにゃあ」
「戦闘とぱんつになんの関係が？」
老師に相談すると即答されました。老師は昨日作った商品見本を渡してくれました。これからカタログを作ることになります。
それにしても、おおげさな。ノーパンだって死にゃあしません。
野郎のノーパンはキモイですが。
「━━あー、クロにゃんも男になったからには知っておくべきかにゃ。男には納まりの悪い──というか、安定の悪いところがありますにゃ」
「わかります。こんなに××ものだとは思いませんでした」
実感しております、老師。
「あーあー、エキサイトすると変化しますにゃ？」
「あんなに変化するとは思いませんでした。不気味です」
別のイキモノみたいで気持ち悪いです、老師。
「……それをサポーターなどで押さえつけないで激しく運動するとズボンとかの布地で──こーこすれて、どえらいことになるのですにゃあ」
「どえらいことってなんですか？」
どうなるというのでしょう、老師？
「──」
老師？
「…………」
ろーうーしー？
「我輩の口からはとてもいえないのですにゃぁぁぁぁぁ！　男なら、

言わずとも察してくれますにゃあぁぁぁ！　体験するですにゃ！　こ、これ以上は、セクハラですにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

老師が突然ダッシュをかけました。

逃亡されました。

廊下は走っちゃだめですよ老師。

猫の獣人族であるソウセキ老師には敏捷にボーナス点があります。さらに盗剣士という職業にも速さにおいて職業ボーナス点がつきます。装備が洋服のタキシードなので、装備の重さによる修正値がありません。

よって同じ盗剣士であるマリーが追いかけても引き離されるばかりで追いつけないでしょう。

老師はまさにスピードキングです。本気で走られたら捕まえられません。

というか、なぜここで逃げる。

僕はなにか老師の逃亡を促すようなことを言ったでしょうか？　セクハラって、老師の顔はトラジマの毛皮で覆われているのでわかりませんでしたが、恥らっていたのでしょうか？　そんな、恥ずかしい話しましたっけか？

謎です。

とりあえず、今日はアマクサが居残り組みで、残りは戦闘訓練に行きます。約束があるので遠出はできません。

五つのタウンのうちアルファは「最初」の意味のとおり比較的初心者向きです。「初心者にも安心」な狩場から中上級者向きの狩場も回りにあります。ベータ、ガンマーはともかく後に追加されたデルタ、イプシロンなどは上級者向けです。

計画では最終的にオメガまで作るつもりだったのではないでしょうか？

とりあえず、普段だったら行きもしない低レベルの狩場にお邪魔しました。

あまりにプレイヤーのレベルが高いと低レベルのモンスターは近寄ってくれません。そこでアマクサくん特製『撒き餌（モンスターをおびき寄せる消費アイテム）』を使って無理にでもでてきてもらいました。
　ドロップ型のポヨポヨしたモンスターとか、昆虫、植物、小動物を模したモンスターとかが主流です。ゴブリンや肉食動物はもう少し難易度の高い狩場に行かないとでてきません。

　結論から言いますと、僕らは強かったです。カンストしているので当然ですが。
　盗剣士のマリーやソウセキ老師、守護者のジュ姐の一撃がかするだけでバタバタとモンスターが倒せました。反対に相手の攻撃は防御力に防がれてＨＰ通りません。
　ですが、実体化したモンスターは迫力があって少し怖いです。
　やはり攻撃しながらウィンドゥをひらくのは難しいようなので後衛が全員のＨＰとステータスの確認をするのがよろしいようです。
　戦闘系のよく使う技能――「剣技」はショットカットに登録されているのでメニューを開かずとも使えるようですが、ゲームと違って命中率が低いそうです。というのも、ゲーム時代は攻撃対象を指定して剣技を使えば百発百中でしたが、この世界では当てにいかなければあたらない、そうです。
　魔術師系の呪文も目視がいるようです。ゲームでの個人指定やフィールド指定の代わりが目視のようです。
　僕の補助魔法使いという職業は名前のとおり仲間を補助する魔法または設置型が多く、直接攻撃魔法は多くありません。仲間の能力の一時アップ、もしくは敵の状態異常が基本です。
　はっきりいって地味です。
　エフェクトも少ないので、画面に呪文表示が出ないと使ったかどうかわからない魔法が多いです。この世界では呪文表示も出ません。
召喚師や妖術師のような派手な技は少ないです。

地味な職業です。まあ、僕自体が地味ですし、ちょうどいいです。老師が明日から居残り組決定なので、時間まで狩場をうつりながらなるべく多くの相手と戦っておきました。

南さんが指定したのはアルファのとある宿屋の二階です。時間単位で部屋を借りたそうです。

部屋に行くと二人の護衛を引き連れた南さんがいました。護衛の一人がマリーを見て嫌そうな顔をしました。

マリーが小さく手を振ると、怒ったような顔をしました。そむけた顔に悲哀が見えます。

なんか見覚えあります。もしかして、マリーをネカマと知らずに口説いて、真実を知り打ち砕かれたことのある某氏でしょうか？　男の純情を弄ぶとは、鬼ですマリー。

あ、名前知らないや。

南さんは長身で黒髪の凛とした美女です。

「久しぶりだな、帽子屋」

「御無沙汰しておりました。南さん。相変わらずお美しい」

「世事はいい。時間が惜しいからな。商談に入ってくれ」

席を勧められたので、南さんの前の席に座りました。さっそくカタログを取り出します。

「こちらが商品のカタログです。女性用の商品は二十種類、男性用はこのタイプのみです」

性差別だと思います。

「男性用はＳ４０、Ｍ６４６、Ｌ１１８、ＬＬ３８頼む。女子用は……」

南さんがカタログに眼を落としました。しばし無言。カタログをめくりました。眼を通してしばし無言。顔をあげておっしゃいました。

「すまんが、やたらと派手なデザインばかりのような気が……」

「実物をごらんいただいたほうがよろしいですか？　こちらに商品

見本がございます」
　テーブルの上に商品見本の入った箱を置きますと、南さんが仰け反りました。
　箱いっぱいの純白やらピンクのレースやフリルの愛らしい物体は意外に破壊力があるようです。
「こ、これは一段と派手な……」
　護衛が顔をそらします。その一瞬、顔がにやけたのを僕は見逃しませんでした。顔は背けていても目線だけがチラチラとテーブルの上のものと南さんを盗み見ております。
　いま、なにを想像した！
「おまえ達、部屋の外で待っていろ」
「しっ、しかし！」
「我々は護衛ですので」
「いいから出て行けー！」
『アイ・マム！』
　びしっと敬礼して護衛が部屋から出て行きました。南さん、相変わらず女王様のようです。
「こちらが一番大人しいデザインとなっております」
　リボン多寡のラブリーなものを示しました。
「うう、これもまた派手な」
「こちらのブラとセットになるデザインです。別売りになっておりますが」
「仕方あるまい。このデザインでセットで３６５頼む。サイズは——」
　それぞれのサイズと枚数をうかがいました。
「もしかして、ギルドでメンバーに支給なさるのですか？」
「うむ。必需品だ。一そろいは、な」
　メンバーに優しいギルドです。
「最初は三日後、女子優先で２００セット納品でよろしいですか？　その後はでき次第ご連絡して随時納品で」

「うむ、帽子屋のところは小さなギルドだからな、仕方あるまい。入金はどうする？　一括でもよいぞ」
太っ腹です。
「納品ごとの入金でいいです」
「わかった。それとは別で、注文した食料の代金は入金しておいた。都合がつき次第納品してくれ」
他所に売るなということですね。
「……一部商品は会館の貸し金庫に保管してありますが、お持ち帰りになりますか？」
「うむ。人を回してもらう。どれくらいある？」
「三分の一あります」
「引き取ろう。それとは別だが、帽子屋、おまえ達うちのギルドにこないか？　それなりの待遇を保障するぞ」
食料調達係りですか？
「申し訳ありませんが、零細ギルドとはいえプライドがございます。鯨に飲み込まれるのは遠慮させていただきます」
南さんの目が鋭く光ります。おっかないです。
「そうか。残念だな。わたしはおまえ達を高く評価しているのだがな」
「身に余る光栄でございます。ですが、僕達は『銀狼騎士団』には馴染まないでしょうから」
確かにソウセキ老師、ジュ姐、マリー、アマクサと腕が立つ人材がそろっていますが、自らを酔狂人と自負する我々は『銀狼騎士団』の規律には馴染めないでしょう。
「わかった。だが、それはそれとして、今後もよい関係を築いていきたいものだ」
「こちらこそ。天下の『銀狼騎士団』にご贔屓いただき光栄でございます」
僕は女王様(みなみさん)に一礼しました。

その日は会館で『銀狼騎士団』のメンバーに食料を引き渡し（ギルド口座の残金が凄い事になってました）、『お茶会』で情報交換をして、マーケットで素材を仕入れてから帰りました。

マーケットの商品は昨日にもまして品物がなくなりつつあります。ＮＰＣの職人がいますので最低限の品物は流れるでしょうが、プレイヤーからの品物はとまっているようです。

皆さんやる気ありませんね。

まあ、このような事態ですから、しかたありませんか。

問題は素材です。このままだと注文をこなせなくなりそうです。

なんとか入手しなければ。どうしますかね？

女王様と兵士（後書き）

ヴォルグを怒ったのはもちろん南さんです。なんか、ぱんつネタから離れられません。男ならいわずとも分かるものってなんなんでしょう（笑）

ＰＫ戦　奪略者達（前書き）

少々残酷なシーンがあります

商品の納品日になりました。老師が二日間領地に残って造り続けた商品と、陽だまり村印の商品を異次元バックに詰込んで『銀狼騎士団』のギルドキャッスルにうかがいます。
領民のつかないギルドキャッスルはタウンから数時間の近距離にあります。僕らはいったんアルファまで帰還呪文で飛び、そこから『銀狼騎士団』のキャッスルに向かいます。
この二日間、老師は商品作り、我々は戦闘訓練ののちアルファで『お茶会』のメンバーと情報交換を繰り返しておりました。
戦闘は相変わらず難しいのですが、なんとかある程度のレベルのモンスターは倒せるようになりました。前のレベルには少し及びませんが。エースアタッカーのソウセキ老師が戦闘に参加できないのは大きな痛手となっております。
うちの基本戦闘は、ジュ姐が壁となり後衛を守り、ハイスピードのマリー、ソウセキ老師が相手を攻撃します。老師は後方の魔法使いを守る遊撃手でもあります。アマクサは後方からの魔法攻撃。僕はみんなの補助という形になります。この二日で色々試してみました。ゲームのときはできたこと、この世界ではできなくなったこと。新しくできるようになったことがあります。
『お茶会』の情報によれば、相変わらずタウンは活気をなくしております。なにをするでもなく絶望してタウンのあちこちに座り込むもの、ふらふらと歩き回るもの、こういった人が圧倒的に多いそうです。『銀狼騎士団』や『お茶会』は比較的ましな方らしいです。
マーケットは冷え切っております。一部食料の素材が買い占められるようなことがありましたが、おおむねプレイヤーはやる気をなくして商品を流しません。ＮＰＣが品物を販売してくれるぐらいですが、ＮＰＣの生産量はひと月にどれだけと決められていていて増産はしません。故に品薄状態が続いております。

戦闘が恐ろしいということに気づいたプレイヤーが多く、少しは自分で何かをやる気になったプレイヤーはサブ職業を生産業に変更するそうです。生産業のギルドが人数を増やしているようです。

未所属のプレイヤーはギルドに入る傾向が見受けられます。一人で生きていくより、誰かを頼りたいのでしょう。小さなギルドは合併したり、大手のギルドに吸収されたりするそうです。

『銀狼騎士団』もメンバーが増えているそうです。追加注文を打診されましたが、今受けている注文が終わるまで待って欲しいといっておきました。

さて、ここで『クリエイト・ミレニアム』のフィールドゾーンの簡単な説明を。

初期の『クリエイト・ミレニアム』のタウンは三つでした。タウンとは別にNPC達の国や町があります。その中には重要な地点があります。数々の領主が集まって運営する同盟、眠れる女王リアーナを崇める封印されし都、天子が治める国アマイズル、そして数多のモンスター達の魔窟クリュウ。この四つとベータ、ガンマーが、アルファを囲む形で六角形を描いております。アルファと隣り合う都市で直線距離にすると正三角形を描きます。後に追加されたタウン、デルタ、イプシロンはそれぞれ魔窟ともうひとつの地点で正三角形になる位置にあります。よりクリュウに近いので、レベルの高い狩場があります。

とはいえ直線距離でもかなり長いです。三角形の一辺、馬で一週間ぐらいはかかるのではないでしょうか？　それに山あり谷あり海ありの地形ですので、それぞれを行き来するのはかなり大変です。迂回路などを使えば、その三倍はかかりそうです。

故に今現在別のタウンに行こうとする人は複数のキャッスルをお持ちのギルドくらいではないでしょうか？

『銀狼騎士団』の偵察によれば荒廃しつつある都市もあるようです。治安の悪化。ゲームであったころには考えられないことをする人もでてきたそうです。気をつけるようにいわれました。

タウンよりもフィールドゾーンが危ないそうです。なにを考えているのか安全なタウンをふらふらと出て行く人がいるそうですが、そういう人が狙われるとか。
ところで、NPCのことですが、普通の人間っぽくなっていると思っていましたが、その数がゲーム時代より変化しております。あきらかに増えていたり、ゲーム時代にはなかった職人の家族やら、領民の血統の関係があります。うちの領民でいえば、いつの間にか村長のところに孫娘が生まれていたり、G家の嫁がS家の生まれだったり、メイドのアリスがA家（村長の家）の血縁者だったり、まるで設定が辻褄の合うよう補則されたかのようです。
あ、うちの領民はABCD～です。すみません、二十軒もの家の名前を考えるの、面倒だったもので。名前はランダム指定してあります。
ぽくぽくとアルファから『銀狼騎士団』のキャッスル目指して歩いておりましたら、道に四人ばかりの男がたむろっておりました。道の両側が深い藪となっている人気のない場所です。
「よう、兄ちゃん、女二人連れていい身分だな」
またですか。
まあ、ジュ姐とマリーを連れていれば、二人を侍らせているように見えなくもないでしょうが、一人はネカマです。
ネカマなんです。
「黙って荷物と女、置いていけや。そしたら命だけは助けてやるぜ」
「仲良くしようぜ、姉ちゃん達」
「そっちのメイドの嬢ちゃん、可愛がってやるぜ」
「楽しませてやるからよぉ」
「怒った顔も可愛いぜ」
試したわけではありませんが、この世界でも性行為はたぶん可能です。ええ、たぶん。根拠の追求はしないでください。毎朝実感しているだけです。
それを実行しようと？

マリー（裕也くん）で？
チャレンジャーですね。
“贋物”マリーを知らないのでしょうか？
それとも、見た目が女ならいいとか？
そういえば、体は完全に女なんですよね。体は女なんですけど、心は男です。ネカマです。
ネカマなんです。
それでも女として可愛がれますか？
元の世界ではニューハーフもイケた口ですか。
チャレンジャーですね。
僕は少し下がりました。
「はんっ、いるとは聞いていたけど、あんたらＰＫだね」
ジュ姐が吐き捨てるようにおっしゃいました。ＰＫとは同じプレイヤーを攻撃して死に至らしめる困ったちゃんです。ときには罪もないＮＰＣに攻撃をしかけたり、重要なＮＰＣを遊びで暗殺しようとする事もあるようです。プレイヤーキラー、もしくはプレイヤーキル。
無差別に殺すことを楽しむプレイヤーというのは感心しませんが、ゲームでは遊びのひとつとして容認されていたようです。しかし現実となった今では強盗殺人以外のなにものでもないのでは？
殺されても復活しますけどね。
「恥ずかしくないのかい？　人様を食い物にしようなんてさ。いいかい、人がもっているものはなにもただで得たものじゃないよ。それぞれに苦労して戦闘やったり、採取したり、育てたり、造ったりしたもんだ。汗水たらして稼いだものを、楽して横から掻っ攫う？外道だね。恥を知りな」
ジュ姐、男前です。もっと言ってやって。
プレイヤーは死ぬと所持金ともっていたアイテムの半数を撒き散らして死にます。ＰＫはそれ目当てに仕掛けるのです。
今の僕が死ぬと、女性用下着ラブリーなミセブラ、ミセパンと陽

だまり村印の乳製品を撒き散らしながら死ぬでしょう。
……下着とヨーグルトの組み合わせって、なんか嫌！
そんな死に方は末代までの恥！
死ねません！　なにがなんでも死ねません！
「威勢がいいな、姉ちゃん。気の強い女は嫌いじゃねえぜ」
男が下種な笑いを浮かべます。
「嫌がるのを、無理矢理ってーのも、嫌いじゃないぜ」
「なあに、そこの優男が死ねば気も変わるさぁ」
ダガーを弄びながら盗賊風の男が言いました。
「せいぜいむごたらしくサバいてやろうぜ」
僕は虐殺決定なようです。まあ、見るからに非力ですからね、僕は。
実際非力ですし。
男達は鎧姿の戦士風一人――リーダーのようです。皮鎧――盗剣士か盗賊、暗殺者の可能性もありますが、装備からしてたぶん盗賊二人。和風の鎧――武士一人です。視認できるのは。
ウィンドゥで確認。守護者に盗賊×２に武士と――強盗の癖に守護者とは笑止。
「なにをぶつぶつ言ってやがる」
「怖いんなら、逃げてていいぜ。おまえだけな」
「女は置いていけよ」
「ヒイヒイ泣かしてやるぜ」
「やかましいよ！　三枚におろしてやるからかかってきな！　女相手に刃物向けるような外道は刻んで魚の餌にしてやるよ！」
だったら守護者なんか選ばないでくださいよ、ジュ姐。
守護者などの壁役は敵の注意をひきつけ攻撃を自分に集中させるスキルがあります。後ろに抜けられたら後衛が危ないですから。ジュ姐がコレを使った時点でみんな外道です。
男達が得物を抜きました。
ジュ姐も剣を抜きます。

「勝ち目あると思ってんのか？」
「こっちは四人。そっちは三人。女の守護者一人に、魔術師系の男一人にメイドさんだぜ」
「男は殺せ、女は捕まえろ！　多少傷つけてもかまわねえや」
リーダーの男が叫び、ＰＫが殺到した瞬間、今まで無言で怒っていたマリーがスカートを跳ね上げました。純白のミセパンが眩しいです。フリフリフリルです。
マリーがスカートを跳ね上げたのは、そのすらりとした脚線美を見せ付けるためでも、自慢のミセパンを披露するためでもありません――しかし、敵の眼はマリーのスカートの中に釘付けです。盗剣士には敵の注意をひきつけるスキルはありません。習得できないはずのスキルを使うとは、マリー恐ろしい子――ガーターベルトが武器庫をかねているからです。取り出したのはレイピアが二本。ツインレイピアがマリーの得物です。ダッシュをかけて皮鎧二人の足を狙います。
「どっからだした！」
異次元鞘からです。異次元バックの鞘版のこれは一種類の武器が９９個まで入ります。別名“こんなこともあろうかと鞘”特徴は抜くまで得物を特定できないことと、予備の武器をも装備したことになることです。ダガーなどの投げ武器の予備がたくさん入ります。丸腰に見えるのもメリットのうちでしょうか。
僕が作りました。
これを使われたときには「どっからだした」とツッコミを入れるのが礼儀ですが、相手のリーダーは本当にびっくりしたようです。知らないんですか？
マリーの攻撃が皮鎧二人の足に一撃ずつ入りました。移動にペナルティをつけて僕を守ろうとしているようです。
「なんだ、こいつ！」
「魔法職じゃねえのかよ！」
メイド服のうえに丸腰に見えたマリーを治療者かなにかと間違え

ていたようです。ウィンドゥの確認もしてなかったのか。
「てめえらの相手は俺がしてやるよ！」
「その声！」
「てめえ、オカマか！」
「誰がオカマだ！　ネカマだ！」
一文字違いでえらい違いです。
「つまんねえモン、見せやがって！」
つまらないモンですか？　ホンットーにつまらないモンですか？　ならなぜ、ひるがえるスカートの中とか、景気よく弾む胸とかをちらちら眼で追うのでしょう。〝贋物〟とわかっていても見てしまう。男の悲しい習性ですね。
マリーがラッシュをかけます。盗剣士のスキル『連打』。突武器を使う際に使用できるスキルで、連続攻撃を仕掛けるスキルです。その数は敏捷＋レベル÷20で決まります。凄まじい速さの突きの連打がきまりますが、相手は二人。集中しきれず逃げられました。
マリーから距離をとります。
守護者のリーダーと武士はジュ姐に突っかかっています。盾と剣で防いでいますが、このままでは危ないです。マリーもジュ姐も一対ニですので防ぎきれずに傷を負っています。
「『爆ぜる棘』」
雷撃のような輝く蔓が相手のリーダーに絡みつきました。バチバチと大きな音と火花を散らします。この魔法のエフェクトは派手です。
「なんだ、こりゃ？　この程度痛くも痒くもないぜ！」
一定期間中相手にダメージを与え続ける魔法なのですが、一度に与えるダメージは少ないです。魔法攻撃なので、防御点に関わりなくＨＰにダメージ入ります。魔法は一度使うと次に使うまで少し充電（？）が必要ですが、他の魔法なら使えます。
ちょっとした小細工の後、武士と盗賊の一人にも『爆ぜる棘』を仕掛けました。

治療魔法はもう少し待ってください。
「はんっ、うちのギルマスを甘く見ないでね！」
ジュ姐がシールドでリーダーをブッ叩きました。金属鎧は刃物を通しにくいので、シールドを打撃武器のように振り回します。金属の板で豪快にゴンゴン叩きます。確かにルール的には打撃武器扱いですが、ヴィジュアル的に怖いです、ジュ姐。
「たかが設置呪文じゃねえか。その前に叩っ殺してやるぜ！」
どちらも硬くてダメージが入りにくそうです。
「『魔法の刃』」
攻撃力アップの呪文をジュ姐に。
「『爆ぜる雷神の紋章』」
“棘”をつけていない盗賊に。
「ありがてぇ」
再度のマリーの『連打』その一撃一撃が爆弾が破裂したかのように入ります——仲間の攻撃ひとつにつき、敵に１０００ポイントのダメージが入る。魔法攻撃なので防御力に関わらずＨＰに。紋章の数はレベル÷２０——盗賊が一人瀕死になりました。
「てめえ！」
呪文が逆じゃないのかって？　これでいいんです。
僕をにらみつけたリーダーが次の瞬間にやっと笑いました。

ヴォォォオオン！

おや？
背後の爆音と風に僕がちらっと見やると、地面に暗殺者風の男が倒れていました。伏兵だったのでしょう。男達のおしゃべりはこいつが背後に回りこむまでの時間稼ぎだったようです。
引っかかっていただけたようです。僕の後は地雷原。
「か、からだが……うごか……」
「てめえ、なにしやがった！」

「『愚か者の罠』設置型の呪文で、敵が触れるとＨＰに１０００のダメージと麻痺の効果を与えます」
別名〝地雷〟。設置数は一度の呪文でレベル÷２０。仲間が触れても起動しないのが特徴でしょうか？　これにやられるとディスペルされないかぎり行動不能です。
「ちっ、畜生！　いつの間に！」
補助魔法使いのエフェクトは控えめですからねえ。『愚か者の罠』は発動するまでエフェクトありませんから。
「わざと隙を作りやがったな！」
「当然です。引っ掛けてこそ罠」
「こうなりゃ総力戦だ！　おい、おまえらも出て来い！　治療者は治療！　妖術師、ディスペルだ、こいつらをやっちまえ！」
リーダーが背後の藪に向かって怒鳴ります。まだ伏兵がいたようですが、予測済みです。
「それは無理ですにゃあ。彼らには先に逝ってもらいましたにゃ」
藪の中からタキシードを着たシルクハットの猫の獣人族が音もなく現れました。肩には小型の兎か耳の長い鼠のような真っ白の毛皮の小動物が乗っております。
「伏兵はおまえ達だけの特権ではないのですにゃあ」
サイレント・ウォーク。獣人族の種族的スキルです。
「きさま、何者だ！」
「通りすがりのちりめん○屋の御隠居ですにゃあ」
「無理があります、老師」
こんなこともあろうかと、ソウセキ老師は離れて後ろから藪の中を進んでいたのです。
「そんな、妖術師と治療者を一度に」
「眠りこけてた魔術師系など、『連打』ですぐに沈みますにゃあ」
くるくると仕込みステッキを回す老師。
「眠りこけ……」
「『眠りの霧』フィールドにかける魔法なので姿が見えなくてもか

かりますよ」
MP三倍がけで確実化。すぐに消えるしエフェクトも特にないので地味～な呪文です。姿を隠していたので味方にも気づかれなかったんですね。自業自得です。
魔術師系は当然真っ先に潰しますよ？　治療者がいると長引きますし、ディスペルされたくないので。変なことされたくありませんしね。
基本です。
僕の魔法発動体は指輪なので袖に隠してしまえばわかりません。そして、呪文なんですがショートカットに登録してあるのは当然として、実はこれ、囁くような声でも発動します。相手のリーダーが「なにをぶつぶつ言ってやがる」と脅したときには発動済みでした。
僕達補助魔法使いのエフェクトは控えめなので、これで魔法を使うときごまかせます。
え？　他の呪文ですか？　隠しておきたい魔法のための見せ金に派手に使いましたよ、当然。
「いつもどおりだね、ギルマス！」
ジュ姐の一撃が武士に入って、武士が崩れ落ちました。
「きさ……ぅ……な、なんだ？」
リーダーががくりと崩れ落ちました。残っていた盗賊も倒れました。HPが残っているはずの武士も起き上がってきません。
「効いてきたようですね」
「な、なにをしやがった……」
僕は男の足首を示しました。そこには黒い茨のようなものが巻きついています。
「『毒の棘』一定期間中ステータスを下げ続け、行動不能にします」
『爆ぜる棘』をくっつけたあと、くっつけました（ハート）。派手な『爆ぜる棘』に隠れて地味～な『毒の棘』は気づかれなかったようです。気づかせないため『爆ぜる棘』をくっつけたんですけどね。

「勝負あったな」
マリーが勝ち誇って言います。
「ち、畜生！　覚えてやがれ……『ルナティック・ハッター』か。忘れねえぞ。復活したら必ずぶっ殺してやる」
「怖いですねえ」
殺されても復活しますが。
「あなた達、初めてじゃありませんね。いったい何人ＰＫしましたか？　これはゲームだからやってもいいと思ってます？　どうせ復活するから殺してもいいと？　そんなふうに思っているのなら何度でもいらっしゃい。そのたび殺してさしあげます」
老師の肩に乗っていた兎もどきがしゃべります。
『襲ってくるのなら、好都合。降りかかる火の粉は払わせてもらうだけだ』
「てめえ、わかってねえな。うちのギルマスはな――足元すくって転ばせて、相手が立とうとするたび足払いをくわせ続け、ひれ伏させ続けるような戦い方をするんだぞ」
「そこまで陰湿じゃありません」
人聞きの悪いことを。
「今日見たのがすべてだと思わないでね。ギルマスの引き出しにはもーっと性質の悪いのがあるから」
人聞きの悪いことを。
「そんなことはありませんよ。ただ、眠らせたり行動不能にしてからタコ殴りにした方が効率いいだけです」
「充分黒いですにゃん」
人聞きの悪いことを。
脅しているだけですよね？　非力な僕をすごい人に仕立てないでください。
僕はダガーを抜きました。『魔法の刃』三倍がけで対象数増加。瀕死以外のＰＫに『爆ぜる雷神の紋章』プレゼント。
「では皆様、お手を拝借」

こうして僕らはＰＫを退けました。
黒くないですよ。

ＰＫ戦　奪略者達（後書き）

少し長くなりすぎたので話を分けました。黒い……ですか？本人自覚無しです。

女王様の怒り（前書き）

残虐な会話がなされております。

女王様の怒り

『僕の出る幕はなかったな。じゃあ、先に帰っているよ』
「ご苦労様、アマクサ」
アマクサの召喚した幻獣が解けるように消えていきました。ぜひアレにはチェックのベスト着て懐中時計を首にぶら下げ『遅れる、遅れる』と言ってほしいものです。『ルナティック・ハッター』だけに。
以前アマクサに拒否されました。
『銀狼騎士団』のギルドキャッスルは城というより砦のようです。堅牢な外見が迫力です。たのもー。
「遅かったな、なにかあったか？」
執務室には南さんがおられました。
「ＰＫと遭遇しました」
南さんの額に青筋が。
「すまなかった。うちのものをやり、一掃しよう」
極道の姐さんのようです、南さん。
「殺っておきましたから、御心配なく」
「そうか」
「今日、ヴォルグさんは？」
「総統は遠征中だ。留守はわたしが預かっている」
いつからギルドマスターが総統になったんですか？
「では、こちらが御注文の品物です。女性用下着２００セットと、陽だまり村印の特産品残りの三分の二、確かに納品いたしました」
僕らはそれぞれの異次元バック——老師だけはシルクハットの中から——商品を取り出しました。老師のシルクハットもマジック・シルクハットといって異次元バックと同じ機能があります。装備品ですので戦闘中でも脱げません。ソウセキ老師作。逸品。
「受け取りにサインを」

「うむ」
さらさらと南さんがサインしてくれました。
「次の納品日は三日後、残りの女子用１６５セットと『海水ぱんつ』七十枚です。後は材料の仕入れしだいになっちゃいます」
「仕方ないな。ところで食料品だけでも追加注文できないか？」
僕は領地の状態を思い浮かべました。
「野菜と果物なら多少は。乳製品はバターはともかく、他の品物は発酵に時間がかかりますので急には増産できません」
「発酵？　オブジェクトの前で加工するんじゃないのか？」
「いえ、うちは専門職がいないので、発酵工場は機械にいれて発酵をまつタイプのものです。時間はかかりますが専門職がいなくとも一度に大量に加工できるので重宝してます」
「錬金術師もスキルはあるだろう？」
「ありますけどね。ひとつひとつ造るのは面倒ですし、ジュ姐がメニューから作るのは邪道だと」
ジュ姐は牧場〇語のファンなので。
「バターなら増産が効くのか？」
「バターは発酵食品じゃないですよ。あれは攪拌して造るんです」
「では頼む、出せるだけでいい。人数が増えてな」
ギルドキャッスルの中庭では訓練が行われているようです。剣をふっている人達が見えました。
「本当に人数増えましたね」
「ＰＫのせいだ」
サイン済みの受取書を渡してくれました。
「はい？」
南さんが嫌そうに顔をしかめ、足を組み替えました。
「我々のように足場のある古参ならともかく、今回の“大転移”に巻き込まれたゲーム初心者とか、低レベルのものは酷く不安定だ。手持ちの資金が少ないものは仕方なく低レベルの狩場に向かうとか、発作的に当てもなくアルファから逃げ出そうとする。そういうのを

狙ってＰＫがでる。ＰＫされたものは喰うにも困るありさまだ。餓死しても復活できるだろうが、そういう問題ではない」
おっしゃるとおりです。女王様。
「なに、それ。酷い話！　どうにかできないの」
ジュ姐が憤慨しております。
「そういうものは見つけしだいギルドに誘って保護援助しているが、うちは戦闘系だろう。ＰＫされたものの中には戦闘を怖がって入隊を拒否する者もいる。どこか面倒を見てくれるギルドに入れればよいのだが。何とかしてやりたい気持ちはあるのだが、拒否されてはなにもできん」
それでメンバーが増えているんですね。戦闘を怖がる人も理解できます。
「その援助の手、ギルドメンバー以外にも差し出していただけませんか？」
「難しいな。うちとて無限に資金があるわけではない。メンバーだから援助する、いつかギルドの役に立つ、ということであれば名目が立つが、メンバー以外のものを援助するのでは不満が出るだろう」
ギルドという集団を危機に晒すわけにはいかないということですね。
「もし――アルファのすべての低レベルプレイヤーを救いたいというのなら、より大きな組織がいるだろうな。いくつものギルドを飲み込んだ――それこそ、アルファのプレイヤーすべてが参加するような大きな『なにか』だ」
「すべてのプレイヤーが『身内』になって初めて律することができる、ということでしょうか」
「そうだな。だが、夢物語だ」
無念そうに南(みなみ)さんがおっしゃいました。ジュ姐が頬を膨らめます。
「にしても、腹立つな。聞いてよ、今日のＰＫなんか、あたし達を犯すつもりだったのよ」
南さんの額に青筋が。

「婦女子を陵辱しようとするものなど、男の資格なし！　ちょん切ってしまえ！」
なにを？
「難しいですね。ゲームの戦闘ルールが微妙に混じっているので、切り落とせるものかどうか」
ゲームルールにはありませんから。
「ツッコむのはそこかよ！」
「むう、試すわけにもいかんしな」
護衛の兵士が特定部位を抑えて防御しました。
ナニカ危機を感じたようです。
「そうだ、南ちゃん。今度パーティ組んでＰＫ狩りしよー。悪人退治」
ジュ姐、なんですかその「バーゲンセール行こう」みたいな軽いノリは。
「……気晴らしくらいにはなるか」
ジュ姐と南さん……地獄絵図になりそうです。
「治療役にヒマちゃん誘ってさ～、ヒマちゃん暇かな？　女ばっかりだったら、相手も油断すると思うの。ステータスの確認もしてなかったのよ、あいつら」
「ふむ、北川も誘うか。あれの長距離砲（長距離の魔法攻撃のこと。妖術師）はたよりになる」
ちらりと南さんの視線がマリーに行きました。
「俺、パス」
チッと南さんが舌打ちしました。
「夕暮でも誘うか。あれも高レベル暗殺者だしな。帽子屋、戦闘プランを立てろ」
「僕ですか？」
いつの間にかパーティに組み込まれてました。
「きさまがやらずに誰がやる」
「……今の僕は男ですが」

「だーいじょうぶ！　ギルマスなら女装できるよ。すっごい美女になるから」
「女装することに抵抗はありませんけどね」
元女ですから。ジュ姐も南さんも長身ですので、背丈は楽にごまかせるでしょう。
「装備を一見貧弱なものにしてれば騙されるだろうな」
異次元鞘いりますか？　在庫はありますけど。
「あ、制服はだめだよ『銀狼騎士団』は有名だもん。魔法付与された私服ある？」
「任せろ。ＰＫを殲滅するためなら、多少のことはやるぞ。用心に伏兵として別パーティを控えさせておくか」
楽しそうに相談する女性陣に対して男性陣（マリー含む）は複雑そうな顔をしました。
「なあ……あのメンツに伏兵いるか？」
「地獄絵図ですにゃ」
「地獄だ、地獄をみるぞ。地獄の釜のふたが……」
「コワイコワイコワイ（ガタガタブルブル）」
すでに脅えておりました。
空耳ですね。僕にはなにも聞こえません。
「そうだ、帽子屋。一人行動不能にして残してくれ。ちょん切れるがどうか試そう」
ひぃぃいっという悲鳴と特定部位をかばう男達がいました。
「南さん、そりゃ復活したとき欠損した箇所は治りますけどね。元通りになるからって何やってもいいというわけじゃないと思いますよ」
「ひでぇ……さすがにそれは……ひでぇ」
「地獄絵図ですにゃ」
「地獄がっっ！　地獄の釜のふたがっっ！」
「コワイコワイコワイ（ガタガタブルブル）」
「いいじゃん、そのくらいのことやってもバチはあたんないよ」

本当ですか？　ジュ姐。
「そ、そういう問題じゃねえよ。さすがに鬼だ、それは」
「地獄絵図ですにゃ」
護衛二人はすでに声もない。
「二人とも、人権って知ってます？」
「先に人権を無視したのはＰＫどもだ」
南さんが胸を張ります。
「人権を無視した人に人権なんてあるわけないでしょ？　因果応報ってゆーのよ」
なぜそこまで爽やかに言い切れるのでしょうジュ姐。満面の笑みはやめてください。ある意味怖いです。
「いまやこの世界に法はない！　ならば、我々が秩序を教えてやらねば誰がやる！」
お二人の決意は固いようです。
「行動不能にはしてあげますけど、そこからあとは知りませんよ」
「やるのかよ！」
「地獄絵図ですにゃ。クワバラクワバラ」
僕は溜息をつきました。
「お仕置きしたってどうせすぐ復活しますよ。ちょん切られた程度で懲りるわけも、ＰＫもやめるわけもないじゃないですか」
「ならば、そのたびちょん切るべし」
どこを？
「……懲りないとおもうか？」
「……生き地獄をみるですにゃ」
「ど、同情していいっすか？」
「だめだろ。男として同情したいのは山々だが、同情するわけにはいかん！　鬼畜の所業をしたのはＰＫどもだ」
男達（マリー含む）が涙してました。
どっちがより鬼畜かは言及をさけます。
人聞きの悪いことを。

ジュ姐発案、南さん推進のＰＫ狩りパーティがこの後どのような活動をしたのかは言及を避けさせていただきます。
ＰＫ達がどのようなめにあったのかは当事者しか知りません……永遠の謎とさせていただきます。

女王様の怒り（後書き）

女王様はちょん切ってしまえなんですね。あな恐ろしや。

補足
四肢の欠損、負傷、臓器の破損による修正ペナルティはゲームルールに存在しますが、某特定部位のルールはさすがに特にありません。
ふつう考えないわな……ゲームでんなもん設定できるかぁああ！！

少女は逃げていた。長い黒髪の華奢な少女だ。装備もさほど高価なものではなく、冒険者ぽくない。初心者のようにも見える。
「まてよ、お嬢ちゃん」
「仲良くしようぜぇ」
盗賊風の男が二人ニヤニヤしながら追いかけている。
「いやーこないで！」
少女は泣きそうな顔で叫ぶ。今まで捕まえられなかったことが奇跡だ。むしろ男達はわざと捕まえず嬲っているのかもしれない。
走って走って、少女は袋小路に追い込まれた。
「こないで！　こないで！」
岩壁に張り付き必死にかぶりをふる少女に男達は舌なめずりをする。
「追いかけっこはおしまいだぜ」
「観念しな、お嬢ちゃん」
男達は少女を捕まえようと駆け寄り――

ヴォオォォオオン
ヴォオォォォォン

衝撃とともに吹っ飛ばされた。
「な、なんだ」
「か……からだ……が」
男達は動けないようだった。
脅えていた少女はすっと表情を消し―蔑むような冷たい眼で男達を見下ろした。
「こちら兎1。狼は罠に嵌った。戦果は2。繰り返す。狼は罠に嵌った。戦果は2」

『こちら兎2。狼を無力化。戦果は同じく2。繰り返す、こちら兎2。狼を無力化。戦果は2』

『クロにゃんいいですかにゃ？』

「老師、なにかありましたか？」

領地に居残っている老師から念話がありました。

『『キノクニ屋』のブンにゃんを覚えていますかにゃ？　念話がありましたのにゃ』

「ええ、覚えていますよ。あの、空飛ぶ商売人でしょう？　コロン・ブンくん。なんと？」

『商談があるそうですにゃ。ちょうどいいので素材が仕入れられないか相談してみますにゃあ』

「そうですね。本当にタイミングがいい。では、僕も戻りますよ」

『そっちはいいのですかにゃ』

「ええ、区切りのいいところでした」

『……（可哀相に）待っているのにゃあ』

僕は臨時にパーティを組んでいる方々に断りを入れることにしました。

「すみません、急用ができましたので、これで失礼してよろしいですか？」

「なら仕方あるまい。今日はこれでお開きとしよう」

「そやね、なーんか最近ＰＫ減ったし」

「いいことじゃん。あ、あたしヒマちゃんとこ寄ってからかえるわギルマス」

「警戒しているだけかも」

「今日は楽しかったわ、クロウさん」

「では、南さん、ヒマ姐、ジュ姐、夕暮さん、北川さん、お先に失礼します」

僕は血なまぐさい現場から領地まで帰還呪文を使いました。え？　なにをしていたのかって……聞かないでください。

晴れ渡った空の一点に見えた小さな影がみるみる大きくなっていきます。
「きましたにゃ」
輝くような純白の翼を持った馬――ペガサスの背に人影が見えます。ペガサスは優雅に地に降り立ちました。
「ちわー、『キノクニ屋』っす。まいど！」
輝く笑顔で挨拶するのはアルファの大手生産系ギルドの中のフレッシュ担当『キノクニ屋』の若きギルドマスターコロン・ブンくんです。
ひらりとペガサスの背から飛び降りました。
「どもども御無沙汰しております。仕入れに駆けずり回ってたもんで」
「久しぶりですにゃあ、ブンにゃん。もうかりまっか？」
「ぼちぼちでんな、ご隠居。見てくださいよ、このペガサス。ゲームのときより凄いっしょ。もう、迫力が違いますよ～」
興奮したようにペガサスの首筋を撫でます。
「そうですにゃ。一段と迫力と気品がありますにゃ。ところで商売の方はどうですかにゃん」
「ん～そうっすね、NPCの国はまあまあなんすけど、タウンがね、荒れてますから商売になんないところもありますよ。デルタなんか最悪っすね。あそこはひでえっすよ。アルファは別物っすね。あそこは『銀狼騎士団』とか『ワイルドカード』とか『東方記』なんかのギルドが睨みきかせてますから。最近、どっかのギルドが征伐隊作ったとか、PKを狩るパーティがいるとかでPKが極端に減ったって話っす」
老師がフリーズしました。なにか思い当たるものでもあったのでしょうか。
「まあ『コモン』のほうでも最近冒険者が来ないって困ってるところもあるみたいすね。ほら、小さなクエストはしょっちゅう発生す

るじゃないっすか。なんとかしてはいるみたいっすけど」
フィールドゾーンの説明の時にも申し上げましたが、『クリエイト・ミレニアム』にはタウンのほかにもＮＰＣの国があります。魔窟クリュウ、魔窟から人の領域をかばうようにある封印されし都は別として、多くの領主が運営する同盟、島国であるアマイズルは大小のイベントが起きるプレイヤーのお得意さまであります。他にも小さな村がいくつも自動生成プログラムによって配置され、小さなクエストを発生させてます。

クリュウは多くの魔物の住処です。そこから魔物が出てきて人里を襲いますが、同盟をかばうように間に封印されし都があります。そのため大規模な進攻はありません。

この都は封印されていて中に入ることができません。しかし何らかのときには高レベルのお助けキャラ“神人”がやってきます。女王リアーナがなぜ眠り続けているのかは諸説ありますが『大いなる災いを封印しているため』という説が有力視されております。過去にはこの封印されし都に侵入しリアーナを暗殺しようとしたＰＫもいるようです。

永遠の氷檻で眠っている（アカウント停止）ようですが。

アマイズルは島国で独特の文化が――というか、完全に日本の江戸文化をモデルにしてますね。そこで造られるものには“名工”による逸品があったりします。

新進気鋭の『キノクニ屋』はそうしたＮＰＣと積極的に商売をし、地方にしかないものを持ち込んだりしております。

召喚師の強みで翼を持つ召喚生物に乗り文字通り『クリエイト・ミレニアム』の世界を飛び回っているのです。通称“天かける商売人”神出鬼没のスピードが命です。

「なんかね、『コモン』がＮＰＣっていうより本物の人間ぽくなっているんすよ。ほら、うちは『コモン』相手の商売するもんで接する機会が多いっしょ？　受け答えは当然、雑談なんかも本当に人っすよ。古馴染みはこっちのこと覚えてるし、性格設定なんかは残っ

ているんすけどね」
「うちもですにゃ。館の使用人とか村人とか。ゲームが微妙に残ってるのですにゃ、でもあれはもう人格も記憶も備えた人間ですにゃ」
「まあ、挨拶はこのくらいにしておいて——今日は商談にきたんすよ」
　コロンくんは以前うっかりグリフィンの巣に近づきすぎたのを老師に助けられていらい老師と仲良しです。
「おや、『キノクニ屋』の商談というと仕入れですか？　なにをお望みで？」
「ども『ルナティック・ハッター』のギルマス。ぶっちゃけお聞きします。おたくの商品、チーズとかの加工品なんですが、味がするんじゃありませんか？」
　おや？
「唐突ですね、コロンくん」
「否定はしないんすね。うちで取り扱わせてくださいよ。いまや味のある商品は飛ぶように売れてるんすよ」
　味のない食料アイテムが主流の現在では、味のある果物やトマトやキュウリのように丸かじりのできる野菜などが高く売れます。素材は味がすることに気づく人は気づいたわけで——それでもコロンくんがうちの商品に味があることに気づいたのはどういうことでしょう？
「果物や野菜なら売れますけど」
「あ〜とぼけるんすか？　じゃあこれ、サービスっす。実はね、味のある加工品ってあるんすよ。ここみたいな領地システム使ってるプレイヤーのとことかＮＰＣの一部のところに」
「！　本当ですか？」
　うちの加工品以外にも味のあるところがあるんですね。
「マジっす。どこでもってわけじゃないんで、条件のあうところ手当たりしだい聞いて回ってんす」
「条件とは？」

「領地で自分のところで工場もってて専門職のいないところっす」
「で、うちにも話をもってきたんですね」
「はいな」
コロンくんが嬉しそうに笑いました。ごまかし続ける必要もありませんか。
「大口の注文がありまして、おろせる分がありませんよ」
「そりゃタイミングが悪かったっすね」
「ブンにゃん、それはそれとして、別の商談して欲しいにゃあ。仕入れたいものがあるのですにゃ〜。今のマーケットでは手にはいらにゃくてブンにゃんの伝でどうにかなるにゃあ？」
「あ、なんすか？」
コロンくんが老師から手渡されたリストに眼を通しました。
「なんか、衣料品の素材ばっかすね。なんかあったんすか？　ご隠居が縫製者ってことは知ってるんすけど」
「それは」
「それは？」
「我輩が」
「我輩が？」
「ちりめん問屋◯ご隠居だからですにゃあ！」
ネタでごまかせる相手ですか。
「黄◯様ネタはいいっすから。衣料はそんなに売れないっすよ。そうそう買い換えるもんじゃないっすから」
ふっと老師が笑われました。
「ブンにゃん、君には見えないようですにゃ」
「なにがですか？　ご隠居」
「キラキラと光るカネヅルという美しい鳥が！」
老師がびしっと天の一点を指差すと、コロンくんはぐっと拳を握りました。
「ご隠居！　かねづるは金の蔓っす！　植物っす」
金蔓　金銭を手に入れる手づる。金銭を出してくれる人。

ツッコむのはそこか！

「目に見える需要だけが需要ではないのですにゃあ！　我輩には未曾有の需要が見えるのですにゃあ！」

「ご隠居、それは！」

「それは秘密ですにゃあ！　ブンにゃんも商人なら、自分でその答えにたどり着くですにゃ！　それが商人道というものですにゃあ！」

「御教授ありがとうございました！　生涯の師と仰がせていただきます！」

……芸人ですか！　ネタ終わった？

「で、ブンにゃんでも無理ですかにゃ？」

「そんなことないですよ。けっこう大口ですね。いい商売させてもらいますよ。伝ありますから、近日中には用意できます」

「では頼みますにゃ」

「まいどあり〜」

こうして素材が確保できました。

そしてもうひとつの謎が。

味のある加工品とない加工品の違い。なにかの法則が見えそうで見えないです。

なんなのでしょう？

謎です。

天かける商売人　『キノクニ屋』（後書き）

老師の相方“天かける商売人”コロン登場です。金蔓〜それは銀色の狼。

傲慢（プライド）の罪

素材の当てができました。よってソウセキ老師は（そうでなくとも）領地に居残りです。しばらくある理由でギルド外のメンバーとパーティを組んでいたのですが戦闘系ギルド『東方記』がＰＫに対して討伐隊を結成したとの噂もありＰＫが減りました。

『東方記』ギルドマスター沖田氏によれば「え～と、実はボクらが始めたんじゃないですよ。なんでもＰＫ狩りするパーティがいたらしいんです。で、ボクらも人様のお役に立とうと思って。ねえ、トシ（副ギルマス）さん。でもねえ、ボクらがＰＫしたのってあんまり懲りないよね？　むしろ看板が怖いから廃業したみたいな～。そこへいくと件のパーティに懲らしめられたＰＫはね『ごめんなさい、ごめんなさい、もうしません。もうしないから許してください』って何度も謝り倒してひきこもるって聞きましたよ。すごいですね。なにされたんでしょうね？　ねえ、トシさん」

ある日のギルド『かわらばん屋』の記事より抜粋

「あれは今思えば魔がさしたんだよ……こんな変な世界に放り込まれてむしゃくしゃしてたし、人間相手のほうがモンスターよりおっかなくないし……色々いい考えのように思ったんだ。禁止されてたわけじゃないし、実入りもいいしよ。可愛い女の子がいたから……ち、ちょっと魔がさして……面白がって追いかけてたら、爆発があって……あれは『愚か者の罠』だよなぁ。追い詰めてたつもりが誘導されてたんだ……体が動かなくなったら……追いかけてた娘がおっそろしく冷たい目で見下ろしてて……ひぃいいい！　魔女が！！魔女達が！！ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、もうしません！！魔がさしたんです！！もう二度としません！！しないから許してください！！（この後錯乱しインタビュー不能）」元ＰＫ

Ａさんの証言。

ＰＫ狩りを始めたと思われるパーティに狩られた元ＰＫ、Ａさんの証言。これからＰＫ狩りを行ったのは複数の女性、それも美女ばかりと推測される。『愚か者の罠』が使われたことから補助魔法使いが含まれるパーティと思われる。

いったい彼らがナニをされたのかは大聖堂の復活の際完全修復されているのでうかがい知ることは出来なかった。だが、なんらかの精神的ダメージを与えるものであることは確かだ。（記者推測）

ええ、いったいナニをされたんでしょうね。よっぽど怖いオシオキだったのでしょう――というわけで手が空きましたので久々にギルドのメンバーで戦闘訓練に行くことにしました。

ちょっとばかり上等な狩場に行きたいと思います。

うちは僕が相手を眠らせたり行動不能にすることが少しばかり多いのですが、そんなことばかりをしていたら練習になりません。僕達が欲しいのは“経験値”ではなく“経験”です。どうせカンストしてますし。

麻痺、毒、眠り系は封印し、普通に能力値アップ攻撃力アップなどの補助に徹したいと思います。罠系も封印。誰ですか？　そんなギルマスはギルマスじゃない、なんていうのは。

僕をどんな眼でみているんですか？

練習ですよ、思いっきり戦ってください。能力のかぎり。危なくなったら封印解除しますから。

「おい、おまえ達！」

はい？

「誰の許しでここにいる」

三人の若い男が僕達を呼び止めました。ウィンドゥを呼び出して確認します。

実は狩場というのは購入できます。お金さえあれば狩場を買い取り専用の狩場にできるのです。

もっともかーなーり高額で個人はもちろん大手ギルドさんだって低レベルの小さな狩場さえ手が出ないはずです。
これはタウンの中でも一緒で、ゾーンごとに買える地域があります。もっともまだ自分で工房を用意できない職人のための無料貸し出し生産機器オブジェクトのあたりは別です。ここは購入できません。別に住居権工房や買える工場が存在します。
マーケットも買えません。回りの店舗は買えるところがあります。復活を司る大聖殿も買えません。宿屋は買えます。旅館経営もできますよ。誰か温泉宿オープンしてくれませんかね？　しかし高額すぎて誰も試みたことのないシステムです。
ＮＰＣの国や村でも住居をゾーンごと購入できます。こうした場合はギルドキャッスルと同じ扱いで帰還呪文の行き先指定にできます。たしか『キノクニ屋』がアマイズルと同盟に小さい住居をもっていたはずです。ルー○がわりに。
変わったところでは銀行が買えます。銀行経営も体験できるようにとのことなのでしょうが、高額すぎていまだかつて誰も試みたことのないシステムです。無駄システムです。
実は会館も買えますが、業務が買えるのではなく建物だけです。銀行ほどではないにしろ高額すぎていまだかつて誰も試したことのないシステムです。というか、使い道のないシステムです。なにか収入があるわけでもないので。ああ、入場料を取ろうと思えばできますか。
こうした無駄と思われるシステムが『クリエイト・ミレニアム』にはたくさんあります。
確認したところ、この狩場に持ち主はいません。
「許しもなにも、ここの狩場は持ち主がいませんよ？　持ち主のいない狩場は誰が使ってもかまわないはずですが」
「うるさい！　ここは我々の縄張りだ！　関係ないものは出て行け！」
ほほう。

「縄張り……ですか？　正式に購入したわけでもないのに、所有物のようにおっしゃる。そのようなルールは存在しなかったはずですが？」
「ちょっと、あんたら――」
　一言言おうとするジュ姐を身振りだけで止めました。マリーとアマクサも僕に任せてくれるようです。
「狩場が混雑しているならともかく、まだまだ余裕があるようですが、我々を排除するのにはどのような理由が？」
「他のギルドがここの狩場を使うなと言っている！」
「承服できませんね」
　言い争っているうちに、同じ装備の男が二人やってきました。
「侵入者か？」
「おい、出て行けというのがわからんのか！」
「我々をなんだと思っている！」
　知っていますよ。その制服は有名ですから。ウィンドゥで確認もしました。皆さん50前後の中堅ですね。
「『銀狼騎士団』の方とお見受けしますが、それがなにか？」
　僕の言葉に『銀狼騎士団』のメンバーが憤慨しました。
「我々を『銀狼騎士団』と知っていて逆らうか！」
「なんだきさまら……『ルナティック・ハッター』だと？　そんなギルドは知らないぞ！　げっ、カンスト組か！　人数少ないくせに100レベルだと」
「零細ギルドですから」
　五人しかメンバーいませんしね。
「我々の怖さを知らないのか！」
「きさまらのギルドを潰すなんてわけないんだぞ！」
「アルファから退場させてやろうか？　高レベルだからっていい気になるな！」
　『銀狼騎士団』メンバーの言葉にジュ姐の額に青筋が浮かびます。マリーも腕組をしたままますごんでいます。アマクサの視線は氷点下

です。
ふふふ、皆さん怒ってますね。僕も少し怒ってますよ？
「どのように？」
「おい、上官を呼べ。こいつら後悔させてやろうぜ！」
高レベルのメンバーを呼び出すつもりのようです。いいでしょう。狼狩りでも経験にはなるでしょう。僕は封印解除させてもらいますが。
居合わせた『銀狼騎士団』のメンバーが僕らを囲っているうちに高レベルのメンバーが二人ばかり現れました。助っ人のようです。
おや、あの人は――
「おい、なにがあった？」
「トラブルか？」
険しい顔をしたお二人に僕はにっこり笑って挨拶しました。
「これはこれは、御無沙汰……というほどでもありませんか。ごきげんよう」
「あ、これはご丁寧に」
「『ルナティック・ハッター』の皆さんじゃないですか。いつもお世話になっております」
南さんの護衛の方でした。ああ、お二人とも100レベルだったんですね。がっしりした方がパンツァさんでマリーに以下省略の方がボルックさんでしたか。お名前初めて知りました。
突然上司が僕達にぺこぺこし始めたので、メンバーの方が面食らっていました。
「なにかありましたか？」
「うちの若い者がなにか？」
「いえいえ、つまらないことですよ」
僕はめいいっぱい笑いかけました。
「「誰の許しでここにいる」とか「我々の縄張りだ！　関係ないものは出て行け！」とか「狩場を使うな」とか「ギルドを潰す」とか「アルファから退場させてやろうか」とか言われただけです」

ずざざ～と音をたてそうな勢いでお二人の血の気が引きました。
「申し訳ありませんでした！」
「部下の失態は上司の責任！　なにとぞ、なにとぞお許しを！　これこのとおり」
時代劇ですか？　突然お二人がその場に土下座しました。土ついちゃいますよ。
言った本人達はぽかんと口を開けて突っ立っておりますが。
「いえいえ、そこまで『銀狼騎士団』さんを怒らせてしまっては、お付き合いもこれまでですねえ」
ひいっとパンツァさんとボルックさんから悲鳴が上がりました。
「納品していない分の料金はお返しします、取引はこれまでということで。造ってしまった商品は――『キノクニ屋』さんに回すとか、マーケットに流しますので御心配なく。今、うちの商品みたいなのは天井知らずに値が上がっているようですから」
「そ、それればかりはお許しを！　お付き合いはどうぞこれまでと同じようにっっ！　てめえら、なに突っ立ってんだ！」
「頭下げろ！　てめえらも侘びいれねえか！　頭下げろってんだよ！」
上司に怒鳴られ、『銀狼騎士団』の若いもん一同もわけがわからないままに膝をつきます。う～ん、老師が喜びそうなシュチェですね。水戸のご隠居じゃないですよ。
「いいか！　こちらの『ルナティック・ハッター』さまはな――俺達の胃袋握ってんだよ！」
ストマット・クローですか？　人聞きの悪いことを。
「ぱんつもだ！　てめえらフル××で戦闘してえのか！　ズ〇〇〇んなるぞ！」
人聞きの悪いことを。ところでズ〇〇ってなんですか？　謎の言葉です。
「これが元で取引停止してみろ！　味のねえ食料アイテムだけで過ごすことんなるぞ！　うまい飯が食えなくなるんだ！　てめえら、

メンバー全員から恨まれるぞ！　ってか、殺されるわ！　むしろまず俺がぶち殺す！」
「つーか、こんなことがしれたら南将軍に殺されっぞ！」
「いや、殺されたほうがましなめに！」
南さん将軍様だったんですか。殺されたほうがましなめってなんですか？
若いもの一同の血の気も引きます。紙のような顔色です。怖がられてますね。
「おめえらも謝れ！　頭ァ地面にこすり付けてわびいれろ！」
『申し訳ありませんでした』
涙ながらに謝られました。何度も頭を下げられます。
「こいつら後でシメときますんで、なにとぞ取引は今までのように」
「これからもお付き合いください。お願いします。陽だまり村印の商品がはいらなくなったら――うちが崩壊します」
人聞きの悪いことを。
「シメなくていいですよ。崩壊っておおげさな」
「おおげさじゃないっす」
「食料アイテムだけの飯は嫌っす。せめてチーズ、バターかヨーグルトかけたいっす。味～飯に味をぉ」
「果物、野菜、いまなかなかマーケットに入らなくて～お願いです。今までどおり商売を～売ってください。お願いします」
泣いて縋られました。いつの間にか『銀狼騎士団』の胃袋握ってました。にぎにぎ。無味乾燥のお食事にうちの商品はオアシスだったようです。いいかげん許してあげましょうか。
「そこまでおっしゃられるのでしたら、取引はこれまでどおりに」
『ありがとうございます』
深々と頭を下げられました。
「それで狩場の方は」
「あ、どうぞどうぞ、お好きなようにお使いください」
「ささ、どうぞ」

「ありがとうございます。ところで」
少し釘を刺しておきましょうか。
「なんでしょう？」
「持ち主のない狩場は誰がいつ使おうと自由ですよね？　僕らだけではなく。縄張りなどというものはなかったはずですが？」
「おっしゃるとおりでございます」
「不法占拠はマナー違反でございます。このことは南将軍に必ずや伝えます」
「南ちゃんって将軍様なの？」
きゃらきゃらとジュ姐が笑いました。皆さん溜飲を下げたようです。
「ち、ちゃん……」
「あの将軍様をちゃんづけ？」
こちーんと若いもの一同が凍りつきました。
「おまえらは知らんかったな。こちらのジュネさんは将軍様とはちゃんづけで呼ぶほど親しい。北川さまや夕暮さままでちゃんづけだぞ」
「こちらのギルドは総統を初めとしてうちの上層部とは懇意にしてらっしゃる」
「お、俺たちはなんてことを……」
「し、知らなかったんです。知っていればあんな口は……」
真っ青になった若い者が必死に弁明を始めました。お二人のスイッチが入れ替わったようです。
「つーか、おまえら上が知らん間になにやっちゃってくれてんだぁ？」
極道モードですか？　いきなりガラが悪くなりました。
「ちと面かせや、加担してるやつら全部呼び出せ。ちょっと話し聞かせてもらおうか？」
「俺らはギルドのために！」
「だーかーら、話聞かせろっつってんだろ？　そいつは上が決めるこ

とだ。カタギさんに迷惑かけてんじゃねえ。マジシメんぞ？　てめえら」
「おや？　南さんは御存じない？　ヴォルグさんもですか？」
若いものの独断だったようです。びしっとパンツァさんとボルックさんが敬礼しました。
「存じませんでした。知っていれば許可を出しませんです」
「総統は遠征中であります。ぶっちゃけ出稼ぎ。留守を預かっているのは南将軍と北川将軍であります が、先日まで夕暮上官殿と作戦行動中でしたので、眼の行き届かないところで若い者が暴走したようであります」
「この件はギルド内できっちりかたをつけます。御迷惑をおかけしたこと、暴言の数々、お許しください」
ではっ、とお二人が若い者を引っ立てていきました。
これから『銀狼騎士団』でひともめありそうですが、僕らのせいじゃないですよ。聞いた話では多くの大手ギルドが狩場を不正占拠しているそうです。それに倣ったんですね。
自分たちもやらなければ他のギルドに後れを取ると思ったとか？よくないことです。自分達だけがよければいいという考え方はときに秩序を無視します。それは社会の崩壊を招きます。
この後僕らは予定通り戦闘訓練していきました。ジュ姐とマリーが暴れまわりました。アマクサもなにかの鬱憤をはらすかのように精霊を召喚し暴れさせます。
皆さん、この世界にきてからストレスためていたんですね。晴れ晴れとした笑顔が怖いです。

傲慢（プライド）の罪（後書き）

新ギルド『東方記』についての設定

新撰組フリークが始めたギルドだが、現在幕臣はもとより薩長土などカオスな状態、歴史物ファンの巣となっている。アマクサを誘ったこともあるのだが「歴史考証があわない」という理由で断られた。ギルドマスター沖田ソウと副ギルマストシゾウは実は現実世界ではカップルだった。トシゾウの方が現実世界では女。第二のネナベ。
「アン人らぁバカップルですきに（某側近の証言）」
男になってしまったトシゾウは身を引こうとしているが、沖田の方は変わらぬ愛をそそぎスキンシップを求める。トシゾウのためならあけてはならない禁断の扉を開く覚悟。ソドムの川も渡ります。

我ながらこの設定は鬼だと思う。

真実の欠片　法則

昨日危うく『銀狼騎士団』と些細な行き違いから喧嘩するところでした。回避できて何よりです。

色々ありましたが、このゲームの法則が現実に入り込む世界『クリエイト・ミレニアム』にきてから——あのゲームが現実化したか、ゲームそっくりの世界にきてしまったかの始まりの日をプレイヤーは“大転移”と仮称をつけました——長いようで短いような時間が流れました。

絶望し落ち込んだ時期、その直後のＰＫの大量発生とその収束。それでもまだ我々にはなにも見えていません。日々をどうにか生きている、というところでしょうか？

思ったより我々は『銀狼騎士団』に食い込んでいるようです。あんなふうに土下座されるとは思いませんでした。あとで南さんにチクるつもりだったのは確かですが。

あの『銀狼騎士団』までもが横暴に振舞うとは、皆さんずいぶん精神的にきていますね。無理もありませんが。

誰だって元の世界に帰りたいです。

家族、友人もいますし、元の暮らしが懐かしいです。どれほど恵まれた暮らしだったことか。失ってから初めてわかるものってあるのですね。

とくに——味。一部の恵まれた人（なぜか我々も入ります）以外はあの味のない食料アイテムを毎日三食いただいているのでしょうが、あの残念な食事は夢も希望も打ち砕きます。見た目がいいだけに口に入れたときの残念感ときたら——へこみます。地の底までもへこみます。穴掘って埋まりたいくらいです。皆さん食事のたびに絶望感を募らせているのでしょう。

人が暮らしていくのに必要なものを衣食住と現します。衣食住足りてなんとやら。住は足りています。特定のキャッスルやギルドホ

ームだけでなくタウンには格安の宿がいくつもあり寝床に困るということはありません。寝袋も冒険者の必需品として売っています。衣は下着以外なら充分間に合ってます。下着は壊滅的ですが。ゲームの世界にはありませんでしたからね～。食――これこそが問題です。お腹は膨れますが、あの残念な食事づくしは気力を根こそぎ奪います。人が一番幸せそうな顔をするときは美味しいものを食べたときだといいますが――その幸せを奪われているのです。なんとかできないでしょうか？　美味しいもの食べれば気力もわいてくると思います。

陽だまり村のものだけでは一部の人をほんの一時救うだけです。とても足りません。

なぜ味のあるものとないものがあるのか？

素材は味があるのに料理になると味がなくなるのはなぜか？

これがわかれば何とかできるかも知れないのですが。

喉が渇きました。

「セバスチャン、お湯ください」

「……はい。旦那様……」

セバスチャンが憂い顔で応えました。

そういえば心なしかここのところセバスチャンも元気がありません。

「どうしました？」

「……旦那様」

セバスチャンが悲壮な憂い顔で言いました。

「わたくしに至らぬところがあれば、どうぞおっしゃってください」

至らぬどころか眼の保養です～。ああ、ヒマ姐やヘレーネさんにも見せてあげたい！　その憂い顔！　色気がっっっ！　執事の色香がっっ！　至福！　これを独り占めしていいんでしょうか！

乙女心にクリティカルヒット喰らいました。腐女子心ではありませんよ。

「な、なにをいうのですか？　セバスチャンはよくやってくれてい

ますよ。不満などありません」

　ええ、あるわけないです。理性にダメージ与えてくれますが。クラクラします。

「でも、旦那様、このところソウセキさま以外の旦那様はお茶ではなく、白湯を求められます。わたくしの紅茶に不満があるとしかっ！　旦那様方に御満足いただけないのは、わたくしが至らないからでございましょう」

　くっとセバスチャンが顔をそらしました。その目には光るものが

——萌え殺すつもりかっっ！

はうう、のた打ち回りたいです。萌える〜。そんなことで苦悩していたんですか、セバスチャン！　主人を満足させられず苦悩する執事なんて——なんて——なんてツボなんだ（グッジョ）！

　ツボ突きまくりのセバスチャンの攻撃に萌え死にしそうです。この幸せを分けてあげたい（誰に？）。いりますか？

「そんなことはありませんよ。そういう気分だっただけです。セバスチャン、僕はあなたをかけがえのない（萌え要員）人だと思っていますよ。ああ、そうそう『キノクニ屋』のコロンくんのお土産に茶葉がありましたね。あれをお願いします」

「はい、旦那様。すぐ用意したします」

　気を取り直したセバスチャンがワゴンの茶器を用意しました。執事にも食料スキルがありますが、なぜか飲み物関係に限定されております。メイドも食料スキルをもっていますが、飲み物とスイーツに限定されます。ナニゆえの限定なのかはわかりません。ゲームデザイナーの好みでしょうか？

　この世界の調理は簡単です。オブジェクトの前で分量分の素材をそろえ、メニュー選択から選ぶだけでできます。

　他の製造業もほぼ同じです。造れるものを増やしたいときはどこかにあるレシピを探すか、賢者か錬金術師に依頼してスキルを持っている人から複製レシピを作ってもらい、新レシピとして登録します。

セバスチャンが紅茶の葉を分量分取り出し、水の入った容器を置きその両側を掌でかざすようにすると――水と茶葉が消えてカップに紅茶が満たされて――ああああぁ！

「！　それだ！」

思わず叫んで指差しました。

「は？」

セバスチャンが眼を見開いてぽかんとしてました。

「ゲーム世界の加工は――コマンドイベント――この世界の法則がそれに倣うものなら――イベントエディタは――喪失と増加――そういうことか！」

なんということでしょう。法則が見えました。そうです、ここはゲームの法則がそのまま使われているのです。だからこそ――システムが――

「確か料理アイテムのガイドは――ああ、そういうことですか！　こんな単純なことに」

つい机を叩きました。

「味設定とイベントコマンドだぁ！」

真実の欠片を捕まえました。

「オブジェクトの実物化――なら違いは、目的と結果――だからうちの商品には――セバスチャン！」

「はい、旦那様」

「ありがとう！」

感極まった僕はセバスチャンを抱きしめました。愛いやつ。

「君のおかげで光が見えました！　これで皆が救われるかもしれません。ありがとう、どんなにお礼を言っても足りません！　愛してます！」

本気で愛してしまいそうです。愛いやつ。

「だ、旦那様、なにかお役に立てたのなら、本望です」

仮説は仮説、さっそく試してみましょう。

一時間後、僕は厨房で自分の作品の前にいました。紅茶と簡単な野菜炒めです。
よし！　においあり。
「だ、旦那様、これはいったい！」
セバスチャンが驚愕の表情を浮かべました。普段はふくふくしい細い目の厨房の主ヤンさんは顎を落としてしまいそうなほど口を開けています。本職だけに、いま自分が目にしているものが信じられないのでしょう。
「試食してみましょう。セバスチャンとヤンも試食して感想を聞かせてください」
「で、では僭越ながら」
「いただきます」
セバスチャンは紅茶を、ヤンは野菜炒めを口に入れました。やはり自分の得意分野が気になるようです。
そしてカッと眼を見開き硬直しました。
「な、なんですか、この芳醇な香り、この口の中に広がるものは……これが紅茶なら、わたくしが造ってきたものはいったい……」
「な、なんですかー！　この口の中に広がるものは！　ああ、なんだ、この幸福感は！　嬉しい！　こ、これはなんなんだ！」
「それが“味”です！」
ようし！　紅茶は紅茶の味が、野菜炒めは野菜炒めの味がする！
僕の考えは正しかった！
「旦那様がお造りになられたのですか！　これは魔法ですか？　それとも金錬術の成果でございますか？　素晴らしい！　この世にこのようなものがあったとは！」
「旦那様！　ぜひ、ぜひ、この技術をお教えください！　そのためなら何でもいたします」
ヤンが縋ってきました。
「わ、わたくしにも！　このような素晴らしいものがあろうとは！旦那様方が御満足いただけないのもどおり、いままでわたくしの

作ってきたものはニセモノだったのでございますね。どうぞ、どうぞ、わたくしにも“味”を造る技術を伝えてくださいませ！」
　セバスチャンも取り乱しています。
「二人とも、これを教わりたいですか？」
『はい、旦那様』
「そのためなら、なんでもしますか？」
『はい。旦那様』
「よろしい、では僕についてきなさい」
『どこまでもついていきます、旦那様』

「こんにちは、南さん。僕です。クロウです」
『帽子屋か。この間はすまなかったな。うちの若い者が迷惑をかけた。きっちり叱っておいたので、許してやってくれ』
『銀狼騎士団』の南さんに念話をかけましたら、先日の謝罪をされました。
「ええ、もうそのことは御気になさらず」
　南さんが叱ってくれたのなら、彼らが同じことをすることは無いでしょう。
『『黒獅子騎士団』は知っているな？』
「もちろんです」
『黒獅子騎士団』とは『銀狼騎士団』と並ぶ大手戦闘系ギルドです。新米にも優しい銀狼と違い「足手まといはいらねえぜ」的なギルドなのです。高レベルメンバーを集め、難易度の高いクエストに挑戦することを喜びとしております。
　ギルドマスターのレオーネ氏はかつてヴォルグさんと意見が合わず、自らのギルドを立ち上げた方です。獅子の鬣のような跳ね回る黒髪の持ち主で豪快な性格と――おっぱい星人の性癖で知られる人です。巨乳好き――性癖はともかく、漢の中の漢として知られています。うん、漢です。いろんな意味で。
　そういえば『黒獅子騎士団』の幹部の中にボルック氏とマリーを

とりあって「ううん、二人の気持ちは嬉しいけれどぉ——あ・た・し、現実の世界ではお・と・こ・なのよ（ハート）」と、ごめんなさいされ、打ち砕かれ抱き合って泣いていたメイド萌えの凄腕暗殺者がいましたっけ。ぶりっ娘がキモイですマリー。

ああ、いえ、いろんな意味で漢の中の漢が多いギルドです。

『あそこや『グリーン・フラッグ』が狩場の占拠をやらかしている。こっちも人数が増えたもので稼がないといけない、ならばこっちもやらなければとられると、考えたのだそうだ。すまない』

大手ギルドさんの間で競争が激化しているようです。『銀狼騎士団』『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』と言えば、アルファの三大戦闘系ギルドではありませんか。

「『ワイルドカード』と『東方記』はいかがですか？」

『あそこはやらん。『ワイルドカード』のギルマスはマナーにうるさい男だ。『東方記』はＰＫ狩りの見回りに忙しいからな。どちらにしろ性格上やらない』

『グリーン・フラッグ』は自由人が多いですからね。人の迷惑顧みず、というところがあります。

『ワイルドカード』はギルドマスターが知的な方です。眼鏡です。細目の眼鏡。しかも、戦闘系ギルドのマスターにもかかわらず穏やかで物静かなかたです。ぐおう、ヴォルグさんとタメ張る僕のど真ん中です！　秩序を尊ぶギルドです。

『東方記』は新撰組を初めとして幕僚、薩長土の歴史もののファンが入り乱れているギルドです。ギルマスの沖田さんはちょっと子供っぽいところのある人ですが、善意の人です。それを支えるクールな副ギルマスのトシゾウさんは……僕のお仲間です。ネナベです。ネナベなんです。今頃どうしておられるでしょう？　色々と語り合いたいような気がします。特に沖田さんとの仲とか。

「その二つが参戦しないならまだマシですね」

それにしても、アルファはカオスになってきました。

『戦闘系だけではないぞ、生産系も色々ときな臭い。大手のメンバ

ーが中小のギルドに対してオブジェクトの使用に優先権を主張することがままあるそうだ。戦闘を怖がって職人系が増えたからな、工房を買えない下っ端がゴリ押しして生産数を確保しようとするらしい。マーケットの出品も先に並んでいるものを押しのけるとか、先に同じような品物を出品したものに取り下げるよう脅迫したりするらしい』

「…………カオスですね……」

アルファがむちゃくちゃになりそうです。

あれ？　『キノクニ屋』のコロンくんが「アルファは別格」と言っていませんでしたか？　他はこれより酷いか、アルファがこれから酷くなるんですか？

とめられませんかね？

「ヒマ姉さんから聞いてはいましたが……気がめいってくる現実ですね」

『そうだな』

「せっかくいいお話があるのに」

『なんだ？』

「もしかしたら、食生活を改善できるかもしれない、というお話です」

『なんだと！　本当か！』

南さんが怒鳴りました。声、大きいです。

「はい。仮説を立てました。この世界で味がしない理由を。そこから味のある食べ物を作る方法をみつけた、と思います。現在実験中ですが、たぶん、これで正解だと」

『教えてくれ、頼む！　金ですむならどれだけでも出すぞ！　ギルド口座を空っぽにしてもいい！　わたしの全財産差し出してもいい！　メンバーもわかってくれる』

そこまでしますか！　というか、そこまでの問題なんですね。

「お金なんていりませんよ。大恩ある南さんにそんな無茶を言うつもりはありませんせん――それほどの発見じゃありませんから。そうで

すね、ヒマ姐さんにもお知らせしたいので、『お茶会』のギルドホームを使わせていただけないか相談して、よければそこで発表したいと思います。できれば午後三時ごろ」
『そうだな……なぁ、帽子屋、最初は隠してびっくりさせてやらないか？』
「面白そうですね。じゃあ、南さんたちともお茶をしないかと約束取り付けて、その場でびっくりさせちゃいましょう」
いいですね。サンドイッチとかクッキーみたいな軽いもの作ってもっていってびっくりさせて実は――とばらす。ヒマ姐は最初びっくりして喜んでくれるでしょう。うん、楽しくなってきました。
「ヒマ姉には僕から連絡します」
『『お茶会』のギルドホーム、三時だな。楽しみにしている』
南さんとの念話を終わらせた僕はさっそく向日葵姐さんのところに念話をかけました。
「こんにちはヒマ姐さん。ヒマ姐さん今日暇ですか？」
『こんちわ。ヒマやけど、暇やないで～って、みんなこの語呂合わせするなぁ』
ヒマ姐の笑い声が聞こえました。
「実は三時ごろに『銀狼騎士団』の南さんとお茶することになりまして、ヒマ姐達とも久しぶりにお茶したいんですよ。そちらにうかがってもよろしいですか？」
『あん？　いいよ。みんなで茶ァしばこうやぁ。話したいしなぁ。おいで、おいで』
いつでもカモンなんですね、ヒマ姐さん。お言葉に甘えます。
「では後ほどうかがいます」
「お嬢様方、御無沙汰振りでございました。今日はわたくしごときを御招きいただきありがとうございます。わたくしごときがおこがましいとは思いますが、旦那様のお言いつけですので御容赦くださ い」

セバスチャンが一礼しました。
「クロちん！　セバスチャンがくるなんて、きぃとらんで！　びっくりして、心臓止まるやないか、嬉しすぎて～」
「ナイスですわ、クロウさま！」
きゃ～っとヒマ姐とヘレーネさんが手を握り合って喜びました。
ふふふ、小さな幸せのおすそ分けです。
「ほう、噂の執事か……悪くない。わたしまでびっくりさせたな、帽子屋」
南さんも御満悦のようです。
さて、ここで友好ギルド『お茶会』について説明させていただきます。
『お茶会』はアルファの癒し系ギルドです。
これは揶揄ではなく、本当に治療系の職業の人が多いのです。『クリエイト。ミレニアム』だけでなくいわゆるファンタジー系ＲＰＧにおいて治療役はパーティに一人は欲しい人間薬草です。
しかし、治療するだけよりも自分で戦えた方がいいと、同じ魔術師系でも召喚師や妖術師を選ぶ人が多いのです。魔術師系も治療魔法を使えることは使えますが、瀕死から脱出する程度の呪文しかありません。
需要は多いけれども供給は少ない。そんな職業です。『お茶会』はそんな治療役を貸し出ししてくれる戦闘系パーティの味方です。斡旋所がわりといったほうが正しいでしょうか？　ですので女性が多いのです。
最初は本当に治療系ばかりだったのですが、あの伝説のミリオン戦闘において、ギルドを率いてやってきたヒマ姐達は「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」をまとっていたのです！　ヒマ姐達は戦場を駆け回り仲間を治療して回りました。その笑顔は伝説のナース服とともに皆の眼に焼きついたことでしょう。その戦闘において『お茶会』は伝説となりました。
その戦闘のあと『危なすぎる』という理由で護衛代わりに戦闘系

ギルドからの移籍者がいたと申します。
そのような理由で中規模ギルドである『お茶会』はアルファでも超有名です。
なお、マジックアイテム「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」についてヒマ姐は「仲良くしとるギルドがな、危ないからゆうてくれたんよ（ある意味もっと危ないです、ヒマ姐）。ああみえても性能よくてなぁ、使わせてもろたん。え？　だめだめ、誰にもろたのか、いわん約束しとるもん」と頑なに口を閉ざしました。
件の「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」のレシピですが、その後一度だけ世にでたことがあります。イベントクリアするともらえるものなのですが、手にしたプレイヤーが「なんじゃこりゃあ！　こんな高レベルのもんが造れるかぁ！」と習得必要レベルが足りず、泣く泣くマーケットに出しましたが、造れる高レベルの縫製者は「こんなイロモン、造れるかぁあああ！」と拒否したそうです。
それ以来一度もでてきたことがありません。『お茶会』に提供したプレイヤーはよっぽど高レベルかつ酔狂人だったようです。
いったい誰なんでしょう、永遠の謎です。
「実験に付き合ってもらおうと思いまして」
「実験ってなんなん？　ただのお茶やないの？」
「これです！」
僕は用意したサンドイッチとピザ、クッキーとマドレーヌを取り出しました。
「さ、御賞味ください」
「……においがあるで……」
「……甘いにおい……」
ヒマ姐とヘレーネさんが呆然と呟きました。
「これか！　これがおまえが見つけたものか帽子屋！」
南さんが興奮して叫びました。
「そのとおり！　味のある食事です」
「どうやったんだ、帽子屋！」

「その種明かしを今からしましょう。セバスチャン、皆さんに紅茶を」

「はい。旦那様。皆さんお紅茶でよろしかったでしょうか？　『キノクニ屋』さんからいただいたよい葉がございます」

真実の欠片　法則（後書き）

執事、執事の回でした。
旦那様を満足させられず苦悩する憂い顔の執事の色香は皆さんにおすそ分けします。どうぞお持ち帰りください（どうやって？）
はい？　「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」の影に獣人族の縫製者の影が見える？
「んｗｗｗｗｗにゃんのことですかにゃｗｗｗ？（ｂｙソウセキ老師）」

強欲（グリード）の罪（前書き）

残虐なシーンがあります。お気をつけください。

目の前が何度も真っ赤にフラッシュする。ああ、これは瀕死だ。こうなると自然回復はしない。ポーションを飲むか治癒魔法をかけて瀕死状態を脱しないとＨＰが減り続けて死ぬ。もうどこが痛いのかもわからないくらい痛い。けど修もいるし、きっと誰かが助けてくれる。

なんで――こんなことになったんだろう。俺達はただゲームを楽しんでいただけなのに。オンラインゲームが面白そうで、修も一緒にやるというから、二人で戦闘役と回復役に分かれて職業を選んだ。自分は大きなダメージを与える戦闘役がやりたかったから、武士か暗殺者をやろうと思った。武士も捨てがたかったが、一撃のダメージの大きさと素早さから暗殺者を選んだ。のろいのは嫌いだ。本名の大（まさる）からダイとつけた。修（おさむ）は治療系の職業のなかから法師を選んだ。法師は回復役の中でも変わっていて、ダメージ操作の能力がある。普通の治療魔法も使えるが、本来受けるはずのダメージを軽減させたり他の対象へ移すこともできる。高レベルになるとダメージを反射させて敵にダメージを与えることもできる。治療系でも敵にダメージを与えられるという職業なのだ。本名からとってサムと名づけた。

やってみると難しく、一撃では敵を倒せなかったり、低レベルの魔法では傷を癒しきれなかったりした。それでもそれが面白く、夢中になった。あの日までは。

“大転移”と呼ばれるあの日――二人はそれを理解できなかった。呆然とし混乱し、数日間なにをしていたか覚えていない。もしかしたらどこかに元の世界に戻れる方法があるかもしれないと思いアルファを出て――ＰＫされてしまった。大聖殿で復活したときには所持金のすべてを失ってしまっていた。後で知ったのだがタウンにいればＰＫされることはない。のこのこと安全地帯から出て行ってし

まったのだ。
全財産を失った二人は途方にくれた。元の世界では考えもしなかった。自分達は法というものに守られていたのだと思い知った。だが、この世界にはそんなものはない。いくら悪いことをしても誰にも罰せられない。だから悪いことをしてもいいのだと。
そんな二人に手を差し出してくれた人もいた。ＰＫされてすぐ、自分達のギルドに来ないかと誘ってくれたのだ。けれどそのときはもう“他人”が怖くて二人で逃げた。後で知ったのだがそれは『銀狼騎士団』の人達だった。もともとゲームだったころから“戦士系をやりたければ『銀狼騎士団』で学べ”と言われているほどのところで“大転移”以降も新人を保護しているという。
後で自分達とおなじような新人が『銀狼騎士団』の人に連れられているのを見たことがある。『銀狼騎士団』の制服を着て、それが誇らしそうな張り切った表情をしていた。
逃げて――けっきょくどうにもならなくなって、飛びついたのが悪徳ギルドだったのはお笑いだ。『音楽隊』は新人救済を謳い、新人を集めて奴隷のように扱うギルドだった。無理難題を吹っかけてはできなければ体罰だ。殺されることも体罰のひとつだ。殺されて大聖殿で復活するたび連れ戻される。そうでなくとも気が向けば暴力をふるう。死さえ解放ではない。
――あのとき、素直に『銀狼騎士団』の差し出された手をとっていれば、こんなことにはならなかっただろうか？　見かけたあの新人と同じような顔をしていただろうか？　逃げるときにも、どうにもならなくなったら尋ねてきてくれと、いつでも歓迎すると言ってくれたのに。
「兄ちゃん、兄ちゃん、しっかりして。いま魔法をかけるから」
ああ、サムだ。助かった。
「よせ、かけるだけＭＰの無駄だ」
パーティリーダーの幹部がサムを押しのけやがった。なんだよ、なに言ってんだよ。死んじゃうじゃないか。

「兄ちゃんが死んじゃうじゃないか！　どいてよ！」
「ばかだなおまえ。ここまでやられたらおまえらのレベルじゃ、完全回復するまでそうとうＭＰを使っちまう。ポーションだってただじゃないんだ。おまえらのためになんか使えるかよ」
なに言ってる、こいつパーティリーダーのくせに。
「瀕死を回避したって回復しきれないんじゃ、次の戦いで死んじまう。それじゃあＭＰの無駄遣いだ。次の戦いのためにとっときな」
「兄ちゃんをどうするんだよ！　やめろ！　やめろ！」
パーティリーダーの盗賊がダガーを抜くのが見えた。まさか――
「先に逝ってな」
やだあぁぁあああ！　やめろ！　やめろ！　死にたくない！　死にたくない！　やだあぁあああ！

動けないダイの胸に盗賊の短剣が突き刺さるのが見えた。
「兄ちゃん！　兄ちゃん！」
サムはダイに縋った。ウィンドゥもひらいてみたが――死亡。ダイは死んだ。いや、殺されたのだ。
「この人殺し！　よくも兄ちゃんを！」
飛び掛ったサムを盗賊が殴り飛ばした。
「うるせえ！　どうせ復活するんだ、いくら殺したってかまやしねえ。この足手まといどもが！　てめえらなんぞ、カスだ、カス。食わせてもらってるだけでもありがたく思え！　何の役にも立たないクズどもがぁ！」
何度もサムを足蹴にしながら罵る。他のメンバーは脅えて抱き合って泣いている。散々サムをけりつけた盗賊は気がすんだのかやっと暴行をとめた。
「てめえが人間薬草じゃなきゃ、殺してるところだぞ！」
この世界の死は死ではない。多少の時間を置いて大聖殿で復活する。だから幹部たちは平然と新人達を手にかける。
「手間ぁかけさせやがって。まだノルマは残っているんだ！　足り

なきゃ俺が怒られるんだぞ！　さっさとそいつが落としたものを回収しろ、次いくぞ、次」
　他のパーティメンバーが泣きながらアイテムを回収していた。そもそも、幹部の盗賊一人が中堅レベルで、後のメンバーのレベルは地をはっているのだ。限度を越えたレベルの狩場を引き摺り回され、消耗している。
「兄ちゃん……」
　サムには殺されたダイの姿が自分の死体のように思えた。大と修は双子の兄弟だ。キャラクターを作るときにもダイは高い位置で髪を結い、サムは下のほうでゆるく縛るというふうに髪型は変えたが、顔立ちはそっくりにした。本人の容姿が反映しているこの姿でも自動的に顔はそっくりになった。
　自分を殺すときにも幹部たちは躊躇しまい。
　サムはダイが復活しないことを望んだ。あるいは、なにかの手違いで復活する際に『音楽隊』から逃れられるといい、と思う。
（いつまで続くんだよ、こんなの……もう終わりにして欲しい……死んでも開放されない……地獄だ……逃げて、兄ちゃん。兄ちゃんだけでも逃げて）
　地獄では獄卒たちが亡者を追い掛け回して叩き殺すが、風が吹けば亡者たちは甦り、また獄卒たちに苦しめられるという。
　ならば今の自分達はまさにそれではないか。もしかしたら現実の世界では自分達はとうに死んでいて、『クリエイト・ミレニアム』の姿を借りた地獄にいるのではないか。
　絶望がサムの心にのしかかった。

　久しぶりに死んだらしい。散らばっていた自分が集まり組みなおされる感覚とでもいえばいいのか、浮遊感があって、気がつけば聖棺の中に寝ていた。
　大聖殿の中にはいくつもの玄室があり、玄室にはひとつの聖棺がしつけられている。死んだものは登録してあるタウンの大聖殿の聖

棺のどれかで復活する。ステータスや身体は完全回復しているが、所持金は失いもっていたアイテムの半数を失っている。装備のダメージもそのままだ。さすがに鎧は直さないとだめだろう。

「不覚……」

死んでから復活するまで二時間ほどかかる。戦闘はもうけりがついているだろう。

僕は聖棺から出て念話した。

「イージャン、戦闘はどうなった？」

『総統、復活されて何よりです。被害甚大なれど、目標撃破！　すべて殲滅いたしました。被害は総統を始め１５人であります。負傷者はすでに回復。戦利品は確保。戦死者の遺品は回収しました。後ほど本人に返還します』

……落としたアイテムを遺品と称するのはどうかと思う。遺品を本人に返還というのも変。

「ご苦労。撤収してくれ。今回の遠征はここまでだ」

『は！　イプシロン砦に帰り次第荷物をまとめてアルファ城に帰還します。では、御無事の帰還を！』

……いつの間にかアルファのギルドキャッスル以外のギルドキャッスルは砦と称するようになってしまった。アルファのはアルファ城と呼ぶし……いっそリネーム申請して正式名称にしてしまおうか？

区別がついていいかもしれない。

そんなことを考えていたら聖棺が輝きだした。誰かが復活するようだ。もしかしたらメンバーかもしれない。僕が見守る中で人の姿がはっきりしだした。

背は高くはない。まだ子供っぽい顔をしている。もっとも『クリエイト・ミレニアム』のプレイヤーなら小さくても中学生くらいだろう。粗末な皮鎧で、着ているものもずいぶん痛んでいた。装備からしてまだレベルは低そうだ。なにをして死んだものか。

「無茶をしたのか？　少年」

「やだあぁぁぁあ！　殺さないで！　殺さないで！」

「落ち着け、少年！　ここはもう大聖殿だ！　安全だ」
少年は取り乱していた。無理もない。死の恐怖は大きな心の傷になる。暴れて怪我をしないよう少年を抱きすくめた。とにかく少年を落ち着かせなければ。
「もう終わった。復活したんだ、わかるな？」
「ちが……終わって……ない……終わらない……殺される……また……殺される……」
「少年？」
また殺される？　少年の様子は尋常ではなかった。なにがここまで脅えさせるのか。見開かれた眼からは絶望と恐怖しか読み取れない。そのとき外部と通じる扉が稼動した。とっさにマントをはずし少年にかぶせてかばったのは勘だ。
「おい、いねえのか？」
「なんだ、きさまは」
少年は背にかばい向こうをむかせてある。外部から玄室に侵入するという信じられない行為をした男からは見えないはずだ。
「その制服は銀狼の。いえ、うちのメンバーが復活していないかと」
「うちのメンバーがだいぶ死んだ。これから復活するなら後になるかも知れんぞ」
そのとき聖棺が発光しうちのメンバーを復活させた。
「ちしょー！　死んだ！」
跳ね起きて叫んだメンバーは僕を見て敬礼した。半泣きで悔しそうに言う。
「総統どの、無念であります」
「目標は撃破したそうだ」
「敵はとっていただけたのですね」
「どいてくれ、次が詰まってる」
「アイサー」
メンバーがどくとすぐに聖棺が輝いた。僕は男に向かっていった。
「出ていってくれないか？　十人以上死んでいるから混雑する」

「へい、お邪魔しました」
男が慌てて玄室から出て行った。少年には気づいていないようだ。
この場は切り抜けたが、これからどうするべきか。
なんとか少年を落ち着けて話をきかねば。どこかに落ち着ける場所は――癒し――癒しという言葉から知人の笑顔を連想した。あそこなら――さっそく僕は念話をかけた。
「向日葵か？　今から行ってもかまわないだろうか？」
『ヒマやで〜暇やないけどヒマや。ヴォルちんやん、ひさしぶりやな〜。ええよ。南ちんもおるでちょうどええわ』
「そうか、南もいるのか。すぐ向かう」
「総統どの、その少年は？」
「……わけありらしい」

少年に予備の制服を着せて中央にかばい、周りをメンバーで囲って男の前を突破した。とにかく、独立したゾーンに逃げ込むのが肝心だ。

「なるほど、そういうことか」
南さんが納得して紅茶を啜りました。
「南ちん、今の説明でわかったん？　うちようわからん」
ヒマ姐が泣きそうな顔をしました。
「……こまかい理屈を考えなくてもいい。とにかく帽子屋のいったやり方でやれば、味のある食料ができるというわけだ」
「そやね、プログラムわからんでもゲームはできるもんなぁ。ねえ、これ、すごい発明やない！　クロちん、すごいわ！」
「凄くないですよ。簡単な発想の転換です」
「いえ、それが難しいのですわ。コロンブスの卵ですわ」
ヘレーネさんが優雅にマドレーヌをかじります。
「ん〜美味しい。甘いものなんて、久しぶりですわ」
「これから美味しいもん、食べれるで〜。ああ、なんや、泣けてき

たわあ。ありがとな、クロちん。クロちんは恩人やわ」
美味しい紅茶と味のある食べ物で場は和み、ヒマ姐さんと南さんがこれから食べたいものを語り合い、僕とヘレーネさんが眼鏡萌えについて熱く語り合い（ヘレーネさんとは眼鏡萌え仲間なので）眼鏡は知的で落ち着いている大人の人と秀才のドジッ息子がイイという結論に（異論があれば受け付けます。）達したかけとき、ヒマ姐が唐突に顔をあげました。
「あ、ヴォルちん、着いたん。うん、眼鏡萌えについて熱く語り合いましょう）達したかけとき、ヒマ姐が唐突に顔をあげました。

おや、くると予告していたヴォルグさんが到着したようです。出迎えますか。
気軽に出迎えに行った僕は——予定外の訪問者とであうことにより、この後大きな騒動に巻き込まれることとなったのです。
はい？　むしろ僕が巻き起こした？
人聞きの悪いことを。

強欲（グリード）の罪（後書き）

おひさのヴォルグさんです。こうしてみると銀狼騎士団がいかに良心的かよく分かりますね。義憤を煽るためとはいえ、書いていてムカムカしました。

『音楽隊』はブレーメンの音楽隊からとってあります。気づいてくれるとは思いますが、あのお話の音楽隊のメンバーは年をとったり様々な理由で人の役に立たなくなって処分されるはずだった動物です。つまり新人達を「おまえらは役立たずだ」と言っているわけです。腹立つわー。

彼らには後に地獄を見てもらうつもりです。女王様、お願いします。

「おう、任せておけ（ｂｙ南）」

銀狼の憤怒（ラース）

「すまんな、向日葵。ここしか思いつかなかった」
「ええけど、その子誰？」
「見かけぬ顔ですな。うちの制服は着ておりますが、遠征隊の中にはいなかったと思いますが？」
ヴォルグさんはその腕の中に少年を抱きかかえていました。少年は大きすぎる制服を間に合わせに着せられているように見えました。薄汚れた顔に恐怖を滲ませておりますが、可愛い顔立ちをしております。恐怖にパニックを起こしそうなところをぎりぎりで押し止めている、そんな悲壮な表情です。そんな少年を痛ましげにみるヴォルグさん——ヴォルグさんが少年を抱きかかえる姿に「ちょっとイイかも（ハート）」と胸キュンしたのは内緒です。
不謹慎なので名誉のためにも口外しません。
「……わけありらしい」
「わけとは？」
「まだ聞いていない。取り乱していてな」
少年は腕の中で子ウサギのように震えております。
「ボン、もう大丈夫やで。なんも心配いらんよ。ここは安全や。なんか汚れとるなあ。顔拭く？　おしぼりもってきたるで。お腹すいとらん？　美味しいもん、あるで」
屈んで目線を合わせたヒマ姐が笑いかけました。笑顔がまぶしいです。ヒマ姐無自覚の必殺天然癒し光線です。治療魔法なんかより心を癒すという点では数段上ではないでしょうか。魔法を凌駕しますヒマ姐。
少年も目に見えて警戒を解きました。偉大ですヒマ姐。さすがアルファの癒しギルドの長です。
場所をヒマ姐の部屋に移しました。

少年とヴォルグさんにも飲食を進めました。
「ささ、お茶のみぃ。お菓子もあるで。サンドイッチのほうがいいか？」
少年がサンドイッチをかじり涙をこぼしました。
「お、おいしい。おいしい。おいしい」
「味がある……」
少年はサンドイッチを貪り少し落ち着いたようです。ヴォルグさんは味のある食べ物に控えめに驚いていました。
南さんが事情をききました。
「この少年とはどこで？」
「大聖殿でだ」
「おや、大聖殿になんのご用事が？」
僕が聞きますとヴォルグさんが口ごもりました。
「……ちょっと死んでな」
「ちょっとで死なないでください！」
“狂戦士”ともあろうものが。
「……言い方を間違えた。レベルを過信した」
「言い方変えても同じです！」
なんですか、そんな無表情の中にも心なしか寂しげな顔をされても。僕に萌え死ねと？
「っていうか“狂戦士”がなにやらかしたら死ぬんですか！　遠征隊組んでいたんでしょう？　アルファからいける狩場にそこまで難易度の高い狩場、ありましたっけ？」
ないと断言できます。アルファは『最初』の名前どおり『クリエイト・ミレニアム』の出発点のタウンです。ここで基本を学んでゆきやがて上級者向きのタウンに流れていきます。そのため初心者向きの狩場が多く、後に追加された上級者向きの狩場もデルタやイプシロンに比べれば脅威度は低いはずです。
きりきり白状しなさい！
「イプシロンに行っていた」

「イプシロンに？　“天界の門”は停止していませんでしたか？」
　ヘレーネさんが首を傾げます。
　停止しています。『クリエイト・ミレニアム』がゲームだったころけっこうタウン間を行き来しているプレイヤーは多くいましたが、おかげで現在は『キノクニ屋』のような一部のプレイヤーだけが遠征します。多くのプレイヤーはタウンに閉じこもってときおり比較的安全な狩場に向かうくらいです。
「帽子屋が帰還呪文を使えば“天界の門”の代わりになることに気づいてな、おかげでうちはアルファの狩場に執着しないですんでいる。他のタウンの狩場で取れるものはいい稼ぎになる」
　そういえば僕が助言したんでしたっけ。
「うちも人数増えたからな」
　そうですね、今現在の『銀狼騎士団』は１５００名を超える勢いです。戦闘系としては第二グループを完全に置き去りにしております。もっともあまり戦力にならない低レベルの新人さんも多く、食い扶持が増えて負担も大きくなっているでしょう。
　それで出稼ぎですか……僕達にも責任あります？
「いま、アルファは過密状態だが、他のタウンの狩場はすいているのだ。とくに上級者向けの狩場は開店休業状態でな、うちは遠征隊を出して荒稼ぎさせてもらっているのだよ」
　情報を有効に使っていますね。さすがミリタリーマニアの巣窟です。アルファには１５００ものプレイヤーがいますが、他のタウンはすいてるところでは２０００もいないそうです（情報提供『銀狼騎士団』）。ほぼ同規模の広さなのですけどね。
　ベータはアルファが混雑しているときのための代わりとして設定されています。アルファとはほぼ双子都市ですね。ただ若干アルファの狩場の方が実入りがいいです。所持金の少ない初心者のため処置です。ガンマーは中級者用のタウンです。アルファ、ベータより難しくてデルタ、イプシロンよりは簡単という中堅都市です。中途半端なので人気がないとか。それが原因で現在は２０００をきるプ

レイヤーしかいないそうです。
「あれ？　『黒獅子騎士団』や『グリーン・フラッグ』も他のタウンにキャッスルありませんでしたか？」
「思うに、気づいていないのではないか？　教えてないしな」
「……狩場の占拠問題、解決しそうですね」
高レベルの人は難易度の高い狩場いってくださ～い。あいてますよ～。
「僕が復活した後にすぐ復活して、様子がおかしかったからつれてきた」
「少年、名前とレベルは？」
「ダイ。十二レベル」
「少年も狩りでか？」
少年が頷きました。
「相手は？」
「サーベルタイガーの群れ」
南さんが眉をひそめました。
そりゃ、初心者には荷が重い相手です。とれる素材は毛皮、牙、爪などなかなかいい稼ぎにはなりますが。どちらかといえば中堅パーティ向きの狩場にしか出てこないモンスターです。ましてや群れともなれば――全員４０超えてから行きましょう。
「少年、言ってはなんだが、それは自殺行為だぞ。それとも、君一人がレベル低くてパーティの他のメンバーはもっとレベルが上なのか？」
「パーティリーダー一人が４０くらいで他は一〇前後」
君、それは無謀だよ。
初心者はドロップ型のポヨポヨしたモンスターとか、昆虫、植物、小動物を模したモンスターを相手にしてなさい。低レベルのうちは兎や鹿、鳥など野生動物相手の狩りなんかもお勧めです。食料が手に入りますし、とれる素材もまあまあ。練習になります。レベル上げにもってこい。

「無茶をする。死んでは元も子もないではないか。パーティバランスも悪すぎる。焦らずレベルを上げていきたまえ。パーティを組むか単独かで変わるが、君達のレベルならお勧めの狩場は――」
さすがプロです南さん。新人の指導はお手のものですね。
「無理矢理行かされてるんだよ！　あいつらが、無理矢理……」
「あいつら？　ギルドの幹部か？　それにしてもむちゃくちゃだ、死ねと言っているようなものではないか」
「あいつら、俺達のことなんて、死んでもかまわないんだ……それどころか……俺、サーベルタイガーに殺されたんじゃない……瀕死んなって、幹部に殺されたんだ……回復に使うＭＰがもったいないって……」
南さんの額に青筋が。
南さんの後に控えているヴォルグさんは静かに怒っています。空気が氷点下です。ブリザードです。ひぃぃぃ。
「メンバーを手にかけたのか！　外道が！　そのようなものにパーティを組む資格はない！　どこのギルドだそれは！」
「お、『音楽隊』」
南さんの勢いに押されて少年がギルドの名を口にしました。
「『音楽隊』やて！」
「知っているのか？　ヒマ」
「うちも聞いただけやけど、なんでも新人集めてむごいことしとるゆうで。ほんまやったんやなぁ」
ヒマ姐の笑顔がくもります。ヒマ姐さんにそんな顔は似合いません。おのれ、ヒマ姐の笑顔を曇らせるとは！　許すまじ『音楽隊』。
「ボン、そんなとこ戻ることないで。うちにおいで。かくまったげるわ。そんなとこに渡さへんで」
ヒマ姐さん、さすがです。
「しかし、そのような悪質なところでは、脱退したところつきまとわれるのではないか？　ギルドホームを使っているのなら、すぐ見つかるし。連れ戻されかねないぞ」

「……あの男、ギルドに連れ戻しにきたのか？」
少年は青ざめ頷きました。
自分達で殺して連れ戻す。悪質です！　悪質すぎます。
「うちにこい。少年に手出しはさせせん」
さすが『銀狼騎士団』です。
少年がボロボロ涙をこぼしました。
「だめだよ……だめ……俺一人助かるわけには……サムが……俺が逃げたらサムが……」
サムですと。
「ディーとダム……君たちには運命を感じますね」
「帽子屋。ダイとサムだ。気のせいだ。ならば、そのサムとやらも助けよう。二人ともうちに来るがいい」
「そやけど、南ちん、うちの聞いた話ではそういう新人喰いモンにしとるギルド、ひとつやふたつやないんよ。なんでもＰＫやめたやつらがな、商売換えしてそういうギルド作るんやて。これはうちらの落ち度やない？　じっとなんかしとれんわ」
南さんの額に青筋が。
「確かに！　おのれ、もっときっちりシメておくべきだったか……」
……あれ以上ナニをすると。
「……南、僕のいない間になにをした？」
「プライベートなことであります」
……謎のＰＫ狩りパーティは女性ばかりということで『夜叉姫（仮）』と呼ばれておりますが、『夜叉姫』にやられたＰＫが立ち直ったという話は聞きません。黙認されているのかも知れませんが。
『東方記』の見回りもありＰＫが激減したという話は聞きましたが、そっちに鞍替えしていたわけですね。全然懲りていないようですね。弱いものを喰いものにするとは、人の風上にも置けません。ＰＫ狩り程度では甘かったようです。
「帽子屋、なにかよい手はないか？」
御指名ですか？　女王様（みなみさん）。では。

「君はどうしたいですか？　君には選択肢がいくつかあるということです」
「え？」
「どうしたいですか？」
僕はダイくんに聞きました。
「君一人なら、いくらでも手はあります。ヒマ姐さんが言ったとおり、このままギルド脱退手続きをして『お茶会』にはいるのもひとつの手。『銀狼騎士団』にはいれば小さなギルドは手出ししません。これもひとつの選択肢。なんならうちに入って領地に閉じこもれば見つかることはないでしょう。これもひとつの選択肢。あなたが望めば、手段はいくらでもあります」
そう諦めなければ希望は無限です。
「そのうえで、君の希望はなんですか？　どうしたいですか？　さあ、願ってください。君の望みを。かなえてみせましょう。『ルナティック・ハッター』の名にかけて」
「た、助けて！　助けて！　俺だけじゃなくてサムも……俺とサムだけじゃなく、他のメンバーも……みんな、助けて！　そのためなら、なんでもするから！　皆を助けてよ！」
「わかりました。君がのぞみ、僕が請け負いました。このクエスト『ルナティック・ハッター』が請け負います」
「……メフィストか、お前は」

メフィスト　ファウストを誘惑し魂を売る契約をさせた悪魔。

人聞きの悪いことを。
僕はヒマ姐とヴォルグさんに向かって言いました。
「僕らだけでは力が足りません。『お茶会』と『銀狼騎士団』のお力を貸していただけますか？」
「もちろんやで！　総力上げて協力するで」
「当然だ」

即答ありがとうございます。ですが、まだ足りませんね。『キノクニ屋』さんにも協力を仰ぎますか」
『お茶会』『銀狼騎士団』『キノクニ屋』の全面協力があればなんとかなりそうです。
「……まて、帽子屋。『キノクニ屋』だと？　我々だけでは足りないというのか？」
「はい。ギルドから救出するだけなら、新人さん達と申し合わせればどうとでもなります。しかし、その後、きちんと生活していくには受け皿がいるでしょう？　それには『お茶会』『銀狼騎士団』だけでは力不足です」
ギルド脱退だけなら、『銀狼騎士団』が押さえててくれればどうとでもなります。僕が考えているのはそれ以上。
南さんが眉を寄せて考えているようです。
「……素直に考えれば、脱退後の受け皿として『キノクニ屋』を考えているととるべきなのだろうが……すまんが、それだけには思えないぞ、帽子屋」
「ええ、それだけじゃありません」
「ではなにをする？」
「天下をとります」
どごご。
おや？　皆さんこけてどうなさいました。
「……言い方を間違えたようです」
「そ、そうでしょうね」
「あーびっくりしたで」
皆さん気を取り直して椅子に座ります。
「アルファを掌握します」
どごん。
おや？
「言い方変えても同じだ！」

「気でも違ったか！　帽子屋！」
　南さんが取り乱しています。
「もとから気狂い帽子屋（ルナティック・ハッター）ですが？」
　それがなにか？
「それはそうだが――そういう問題じゃない――なぜ、そんな話になる！」
「南さんがおっしゃったじゃないですか」
「わたしが？　なにを」
「アルファのすべての低レベルプレイヤーを救いたいのなら、より大きな組織がいると。アルファのプレイヤーすべてが参加するような大きな『なにか』僕達が創りましょう」
「だから、なぜそうなる！」
「南さんらしくもない。いいですか？　ダイくんは『皆を助けて』と言いました。皆というのはアルファすべての低レベルプレイヤーでしょう？」
「………」
　皆さん真っ白な灰になりました。なにかショックなことでもありましたか？
「お、俺、そんなつもりじゃ……」
　おや、僕の思い違いだったようです。
「おや、僕の思い違いですか？　『皆』とは『クリエイト・ミレニアム』すべての低レベルプレイヤーのことですか？　すみません、まずは足場を固めますので、しばらくお時間いただけます？」
「ち、違います。そこまで大きなこと言ってません」
　ダイくんが半泣きになりました。
「ではとりあえずアルファで」
「待て待て待て、帽子屋！　掌握って、なにをするつもりだ！　まさか武力蜂起するつもりじゃあるまいな」
　南さんらしくもない。
「嫌ですね、南さん。武力って、『クリエイト・ミレニアム』の世

界では死んでも復活しますから、武力で制圧するのは意味ないですよ。この世界では切り札にはなりません」
「では、なにを武器とする？　勝算はなんだ？」
僕はテーブルの上を指差しました。
「それと、僕達のもつある技術です」

作戦の詳細を説明いたしましたら、皆さんテーブルに突っ伏しました。
「……く……黒い……さすが“黒の錬金術師”……」
クロウで錬金術師だから黒の錬金術師というその安易な二つ名やめてください。
「穏便やけど……ある意味穏便やけど……そんでも黒いわ」
「人の欲望を操りますか……黒いですわー。さすがクロウさまです」
眼をキラキラさせてヘレーネさんが呟きます。心外ですね。黒くないですよ。非力だから考えるだけです。
「それなら協力できる。『銀狼騎士団』はその話に乗る」
「はっ団員に通達します！」
びしっと南さんが敬礼しました。
「うちらも協力するわ。荒事にはむいとらんけど、そんならできるし」
「『キノクニ屋』さんには老師から手を回してもらうとして――『音楽隊』ですが、救出には中の新人達と連絡が取れないとどうにもなりません。ダイくんの念話リストに全員いるでしょうからダイくんは連絡係として――なんですか？」
ダイくんが果敢に顔をあげました。
「俺、連絡係になります。『音楽隊』に戻って皆に助けが来るって、教えます」
「なんやて。ギルドに戻ったら、なにされるかわからんのやで！」
「お、俺、いままでこんなに助けてくれようとしている人達がいるってわからなくて――誰も助けてくれないって勝手に思い込んで――

―俺達、力も技術もお金もないから、足手まといだとしか思われないって、誰も相手にしてくれないと思い込んで――間違ってた。なにかしたいんです。自分だけ安全なところになんかいられない！助かるなら、サムも、サムだけじゃない、皆で助かりたいんです！
なにかさせてください」
「よく言いました。では、念話リストに僕達全員を登録してください」
「よく決意した、少年。頼もしいぞ」
こうして僕達のミッションがスタートしました。

『銀狼騎士団』のアルファ城には隊員が集められていた。壇上には総統を初めとして幹部が並んでいる。
南が中央に進み出た。
「諸君！　ミッションである！　これより我らは『ルナティック・ハッター』の指揮下に入り『お茶会』『キノクニ屋』とともにある作戦に参加する！」
わずかにざわめいた。『銀狼騎士団』が他のギルドと共同で大規模戦闘に参加することは少なくない。だが『ルナティック・ハッター』の指揮下とはどういうことなのか？　『ルナティック・ハッター』を知るものはギルドマスターの“黒の錬金術師”を思い出し背中に汗をかいた。知らないものはそんなギルドがあったのかと驚いた。『お茶会』はいい。治療系の需要は予測できる。しかし――『キノクニ屋』は生産系のギルドではないか？　『キノクニ屋』がなにをするというのだろう？
「これは我がギルドの総力をあげた戦いとなるだろう！　失敗すれば我がギルドの損失は計り知れない！　だが、諸君。このミッションをやり遂げることができれば我々は――」
ぐっと南が拳を握り締め――天に向かって突き上げた。
「味のある食生活を取り戻すことができるのだ！」

うおおおおぉおぉぉおおお！

喉も裂けよとばかりに隊員が叫んだ。拳を天に向かって突き上げる。感極まって涙を流すものもいた。

この瞬間『銀狼騎士団』のモチベーションはかつてないほどにあがった。

「諸君、道は険しい！　だが我らはやり遂げなければならんのだ！　やってくれるか！」

再び雄叫びが上がった。テンションは上がりっぱなしだ。

「この作戦は機密を第一とする。知りえた情報は外にもらしてはならん。では、これから作戦内容を説明する」

かつてないほどの熱意をもって『銀狼騎士団』は耳を傾けた。

銀狼の憤怒（ラース）（後書き）

新人を集めて虐待するギルドの大半は元ＰＫです。弱者を食い物にするやつは懲りませんね～。

ＰＫされてしまった新人さんは食うにも困ってます。それを率先して受けいれているのは『銀狼騎士団』です。しかし、無一文の新人を大量に受け入れてしまったので資金が心もとなくなったので、上層部が出稼ぎに別のタウンに行ってました。受け入れた新人さんはパーティを組ませてレベルにあった狩場で引率つきでレベル上げしてます。アルファの狩場がこんでいるときはベータにまで遠征。いたせりつくせりです。

大手生産系ギルドも無一文の新人を受け入れ援助しています。その恩に報いようとするつもりがちょっと行き過ぎてトラブルを起こす原因になっていたり。個人で新人を弟子としてとり、自分の住居に寝泊りさせたり習得できるレシピをあげたり素材をあげて「出世払いでいい」という職人もいます。

これらの慈悲深いプレイヤーの手のひらからこぼれてしまったのが、悪徳ギルドに引っかかった人達です。

なんとかしてあげたい。そう思う人は実はいっぱいいたりします。

裏設定でした。

色欲（ラスト）と暴食（グラトニー）の罠

「よく逃げずに戻ってきたな」

「はい。大聖殿で誰にも会わなかったものですから」

ダイは俯いたままこたえる。うっかり逃がしたかと思っていたメンバーの帰還に『音楽隊』のギルドマスターである騎士は卑しい笑いを浮かべた。勝手にギルド脱会手続きをとられ、『B・スミス』か『銀狼騎士団』にでも逃げ込まれていたら手が出せなくなるところだった。

「調教が行き届いているとみえる。まあいい、部屋へ戻れ」

「はい」

ダイは俯いたまま自分達にあてがわれている部屋にもどった。『音楽隊』の低レベルプレイヤーは25人。男も女もひとつの部屋に押し込まれていた。

「兄ちゃん、なんで戻ってきたんだよ。逃げればよかったのに」

顔を涙でぐしゃぐしゃにしたサムが抱きついてきた。

「なんで……戻って……」

その弟の耳にダイは小さく囁いた。

「皆で助かるために」

そっと託されたものをサムの懐にしのばせた。死んだときに持っていたアイテムは撒き散らされる。そのため確認されなかったので持ち込むことができたのだ。

「え？」

「助けてくれる人、見つけた。皆で助かろう」

その日、長らく閉めていた店舗が新装開店した。“大転移”いらいプレイヤーの経営する店舗が休業していることはめずらしくない。むしろ、一部の職種――飲食店はまったく流行らなくなった。なにしろ何を食べても味がしない。そんなところに高い金を払っていく

ことはない。皆が値段だけで食料をどこで買うのか決めてしまっていらい、食料アイテムは値崩れを起こした。安売り合戦についていけずいくつもの店舗が休業した。そのうち『キノクニ屋』所属の店舗がいくつも新装オープンしたのである。
愛想よく笑う店員がビラを配布していた。
いくつかの店は冷たい視線を向けられたが――熱い視線を送られる店もあった。新装オープンした飲食店はいずれも『ルナ』の名を掲げた。後に伝説となる『ルナチェーン』の開店の日であった。

「……このような呼びかけは失礼に当たりませんか？」
執事は主人に訴えた。
「そうですわ。お客様が御不快になられるかも」
愛らしいメイドが眉を寄せる。
メイド服を着た彼らの主人の一人は豊かな胸を張ってこたえた。
「そんなことはない！　これこそがこのカフェのウリだ。いいか、教えたとおりにやるんだぞ」
執事とメイドが一礼した。
『かしこまりました。ご主人さま』
「なあ、マリちん、これでおかしくない？」
振り向いた先には向日葵、ヘレーネ、夕暮といった『お茶会』『銀狼騎士団』『キノクニ屋』から選びに選んだメンバーがいた――戦闘服ともいえるメイド服で（微妙にバージョン違います）。恥らう法師の女の子が短いスカートを抑えてもじもじしている。
いずれ菖蒲か杜若。豪華絢爛と咲き誇る花々だった。
「こういえばいいんやな。お帰りなさいませ、ご主人様」
にっこりと微笑んだ向日葵が頭を下げた。
「どないしたん、マリちん」
マリーは膝から崩れ落ちＯＴＬ状態だった。滂沱と涙を流す。
「が、眼福です！　ヒマ姐！」
所詮マリーもメイド萌えだった（メイド喫茶常連）

「ほら、女性客だ。わかってるな？」
「はい。お任せください」
カフェ「ルナ」はオープンカフェの形式で店内と道に面した庭に当たるところに丸テーブルと椅子がおいてある。カウンター席はなく厨房は外から見えない。
庭に置かれたテーブルのひとつになにかを期待したような女性客が三人座っていた。
黒髪黒瞳の端正な青年がテーブルにやってきた。青年は静かに頭を下げ――
「お帰りなさいませ、お嬢さま。メニューをお持ちいたしました。ご所望がございましたら何なりとお言い付けください」
黄色い悲鳴が響いた。
「執事よ、執事！」
「お、お嬢さまだって〜」
「ああ！　いま、ここに写メがあれば！」
「はい。執事でございますが」
頬を染めた女性客が尋ねた。
「執事さん、お名前は？」
「セバスチャンと申します。お嬢さま」
「セバスチャン！」
「ああ、執事はやっぱりセバスチャンなのねー」
「…………イイ！」
感動に打ち震える女性客にセバスチャンはどう反応を返していいのか迷った。
「あの、お嬢さま方。どうかされましたか？」
「あ、いえ、ええと、季節のフルーツタルトと紅茶をお願いします」
「あたしは、パンケーキとミルクティーを」
「わたし、タルトとカフェオレ。あの、この注文ってセバスチャンさんが運んできてくれるんですか？」

「もちろんでございます。僭越ながらわたくしが運ばせていただきます。お嬢さま方。お飲み物はご一緒にいたしますか？　それともお食事の後にお持ちいたしますか？」
　セバスチャンが厨房に戻り、女性客は悶えた。
「イイ、執事最高！」
「ねえ、追加注文したらまた来てくれるかな？　きてくれるんなら、散財しちゃう」
「あたし、全財産貢いでもイイかも」

　あるテーブルには四人の男性客が座っていた。その服装は名高き『黒獅子騎士団』のものだった。
「ここ、ここっすよ！　ここがいいらしいんす！」
　一人がはしゃいでいたが、他の三人は冷めた眼をしていた。事前に配られていたビラをながめて、ひときわ眼を引く獅子の鬣のような黒髪の男が舌打ちした。
「たっけえ、店。“大転移”前の飯に比べても三倍以上するじゃねーか」
　ギルドマスターレオーネがぼやいた。高いものなら八倍はする。
「いいじゃないっすか！　オレのおごりっすよ！」
　凄腕のはずの暗殺者がウキウキとはしゃぐ。
「……ばかは死ななきゃ治らないっていうけどよ、病気も死んだら治るのか？」
　治るんなら殺してやるぞ、とレオーネの眼は冷たい。
「ギルマス、こいつは何度か死んでますけど、治ってません。無駄です」
　冷静な軍師が指摘する。
「難儀なやつ」
　そんなテーブルにメイド服の金色の巻き毛の美少女がやってきた。にっこり笑ってお決まりの挨拶をする。
「お帰りなさいませ、ご主人様。メニューをお持ちいたしました。

ご所望がございましたら何なりとお言い付けください」

「…………イイ…………メイド最高」

ああ、なんと懐かしい言葉だろう。“大転移”いらい、聞くことができなかったあの言葉。バイトしてでも通い詰めたあの店――メイド喫茶。『クリエイト・ミレニアム』の世界にとうとうあのパラダイスが！

メイド最高！　ビバメイド！

「おれはチーズハンバーグセットな」

「躊躇なく一番高いもの頼むんすね」

「お前のおごりだろ。コーヒーな。おい、こいつ破産させたれ。ばんばん高いもん頼めや」

「じゃ、俺もチーズハンバーグセット。コーヒーつけて」

「私もチーズハンバーグセット。カフェオレで」

「んなモンじゃ破産しやせんぜ。オ、オレも、一番高いのね。コーヒーで。あ、お嬢さん名前は？」

「ありがとうございます。ご主人様。アリスと申します。お飲み物はご一緒でよろしかったでしょうか？　それとも食事の後になさいますか？」

アリスが厨房に戻った後も暗殺者は感動にむせび泣いていた。

ちっとレオーネが舌打ちする。

「たかが服がそんなにいいかね。そんなんだから“贋物”に引っかかるんだぜ」

かつて凄腕暗殺者神威（かむい）はネカマに引っかかった。“贋物”マリーは巨乳メイドを装う有名なネカマである。『銀狼騎士団』のボルックと取り合いしたのだが真実を知り打ち砕かれ泣いた。もちろん、面白がって本人が言うまで黙っていたのだが。

「そ、それは言わない約束でしょ！　いいじゃないすか！　メイド最高すよ！」

「てめえの嗜好が少数派だと自覚しろ、メイド萌え」

「少数派じゃないっすよ！　メイド萌えは全国標準っす！」

「その自信はどこからくる」
「そういうギルマスだっておっぱい星人じゃないっすか！」
「女は胸だろ！　巨乳萌えを否定する男は男と認めん！」
「メイドっす！」
「いや、脚、脚こそ神の産物」
騒ぐ三人に軍師は思わず他人のふりをした。
「なあ、グレイ、女は胸だよな、胸」
「脚、脚線美こそ神の産物」
「メイドっすよね、メイド」
問い詰められ、仕方なく自分の意見を言う。
「ならばあえて言いましょう。女は——尻であると——」
『このむっつり！』
所詮彼も同類だった。
『黒獅子騎士団』幹部連——漢の中の漢達だった。
会話を漏れ聞いてしまった女性客の彼らを眺める眼は果てしなく生ぬるい……

「男性客だけど、大丈夫？」
「大丈夫。バイトしたことあるから……」
それまで無表情だった少女がすっと表情をかえる。庭のテーブルまでいき、愛らしく微笑んで言う。
「お帰りなさいませ、ご主人様。メニューをお持ちいたしました。ご所望がございましたら何なりとお言い付けくださ い」
その可憐な姿に客は悶えていた。
それを見ていた店員が呟く。
「プロだ……」
夕暮——『銀狼騎士団』が誇る暗殺者にして天性の演技力を持つ美少女。

熱気が増す店内に、姿を隠しながら観察していたマリーはほくそ

えむ。
「よし、狙いどおり！」
衣装提供ソウセキ。接客指導マリー。
すべては“黒の錬金術師”の掌のうえ。

メイドと執事目当てに店にやってきた客は注文した料理が運ばれてきて驚いた。その外見にふさわしい匂いがある。そして——味があった。果物や丸かじりできる野菜以外は味がしないはずの『クリエイト・ミレニアム』で味がある。タルト生地、パンケーキは甘く、紅茶、コーヒーは薫り高い。肉は肉の味があり、加工されると味のなくなるはずのサラダは野菜の味とドレッシングの味がする。パンはパンの味がする。
久しぶりだった。
家庭料理の域を出ないものだが——“大転移”以降食べたものの中で最高に美味い。
思えば元の世界は恵まれていた。
腹がすけば味はどこにでもあった。町に出れば手軽にコンビニがあった。弁当屋、ファミレス、スーパー。手軽に食べられるスナック類。コンビニ弁当、カップ麺。菓子パンに惣菜。レトルト。当たり前にあったそれが奪い取られ、初めてそれが大切なものだと思い知った。
お帰りなさい。帰ってきてくれてありがとう。もうどこにも行かないで。
「うぐぐ、くそっ、涙がとまらん」
「ギ、ギルマス、これはいったい……」
「うまいっ！　うまっ、まうっううう」
「……うまい……メイドカフェ最高……メイドぉぉお」
……約一名はともかく、それを味わったものは夢中になった。涙を流しながら完食する。
「おい、うちの野朗ども呼び出せ！　あいつらにも食わせてやらに

ゃ」
「全員っすか！　に、２００人近くいるんすよ！　そこまで手持ちないっす！」
「っかやろ、誰がてめえにおごれと言った。ギルド口座から引き落として来い！　おれが許す！」
「だめです、ギルマス、店が込んできました！　満員ですってか、並んでるし！」
「あれ蹴散らしたら、さすがに無限の呪いをかけられます」
食い物の恨みは恐ろしい。
それを漏れ聞いた銀髪、眼鏡のメイドが声をかけた。
「お客、いえ、ご主人様、お食事だけでしたら、他のルナチェーンがすいておりますが」
「なんだと！」
「多少、サービス、品揃えは変わりますが、どこのお店もおいしいですよ」
「味があるってことか。どの店も」
「どのお店もお勧めできます」
にっこりとメイドが笑った。
「ありがとよ、姉ちゃん」
レオーネは配布されていたビラをもう一度みる。
ルナチェーンはカフェは一号店のここだけだが五号店まであった。
その内容はテイクアウト中心の店二つに――
「男は肉だろう、肉。ステーキハウスだ！　ルナ四号店に野朗どもならばしとけ」
「はい。おい、野朗ども――」
「勘定して会館行ってくるっす」
「急げ！　これが知れたらそこも満員になる！」
あわただしく『黒獅子騎士団』が店を出ていくと銀髪のメイド――ヘレーネは念話をおくった。
「四号店？　そちらに団体客が行くわ。『黒獅子騎士団』がほぼ全

員行くのではないかしら？　準備しておいて。一度に１９６人全員は無理？　半分五号店に流してちょうだい。それでもあまるようなら入れ替え制を導入するとか、三号店を勧めておいて」

ルナチェーン二号店はテイクアウト中心の店である。メニューはハンバーガー、チーズバーガー、フライバーカー（魚）、サンドイッチ。サイドメニューに鳥のから揚げにフライドポテト。コーヒー、紅茶となっている。ビラは配られたが、そのあまりの高額ゆえほとんど客が訪れない――が、一人の男が店頭にたたずんでいた。

眼鏡をかけた法師服の物静かな青年を知らぬものはなかった。公潤――「ワイルドカード」のギルドマスターである。回復職でありながら戦闘系ギルドの頂点に立つ異色の男。その物腰も〝ワイルド〟から程遠い。洗練され優雅でさえある。

本人に言わせれば、パーティを組んだときリーダーを押し付けられ、それがギルドにまでなってしまったということらしい。

やがて一人の男が公潤に駆け寄った。

「マスター、ギルド口座から金下ろしてきました。こんな大金マジック・アイテムでも買うんですか？」

「ご苦労様です。トーチくん。すみません、ハンバーガー２０８個ください。フライドチキンにフライドポテトも同じだけ。飲み物はコーヒーでいいですかね？　それも同じだけお願いします」

「マスターっ！　てなんですか！　この高い店は！」

お品書きを見てトーチは慌てた。標準の三倍から五倍のお値段なのだ。無駄遣いにしか思えなかった。

売り子の笑顔も引きつっていた。

「お、お客様、それだけの大量注文ですと、しばらくお時間かかりますが、よろしいでしょうか？」

「時間かかりますか？」

「はい。サイドメニューはともかく、メインのほうはそれだけ数を用意しておりませんので、これから作ることになります」

「他のメニューに散らせばすぐお持ち帰り出来ますか？」
「はい。四種類に分けていただければ、すぐに」
「ではハンバーガー５０、チーズバーガー５０、フライバーカー（魚）５０、サンドイッチ６０にして、フライドチキンにフライドポテト、コーヒー２０８でお願いします」
「はい。すぐに。１０３１４Ａg貨（クリエイト・ミレニアムの通貨）になります」
「トーチくん、お金を」
「……はい」
　ギルマスの決意が固いようなのでトーチはしぶしぶ支払いをした。店頭はもちろん店の奥にあった品物も大量に渡された。異次元バックにしまえば持ち運びに問題はないが。
「すみませんが、ここ、注文販売はしていますか？」
「はい。しております。前日までに注文してくだされば。店頭での引渡しはもちろん、指定時間帯にお宅までお届けするサービスもございます。ただし、全額前払いでキャンセルなさっても返金はできません」
「トーチくん、お金足りますか？」
「ますたぁぁぁぁ、皆の意見聞いてからにした方が」
　公潤は少し考えた。
「そうですね。食べたいものがあるかも知れないので意見を聞いてからにした方がよさそうですね。注文表、いただけます？」
「はい、こちらに。今日中に代金と注文表をもってきて頂ければ、明日の分が注文できます」
　公潤は注文表を受け取り店を後にした。

「マスター、無駄遣いですよ。あんなに高いところじゃなくても食料アイテムなら、安いのがどれだけでも売ってるじゃないですか？」
「無駄遣い……だと思いますか？」
「そうですよ！　１０４０もあれば全員一食食べられます。ボッタ

クリですよ！」
「とりあえず、ひとつ食べてみてください」
「マスターがそうおっしゃるなら……フライバーガーもらいます」
トーチは行儀が悪いと思いながらもフライバーガーを取り出し、包装を開けてかぶりついた。
その一口で雷にうたれたような衝撃を感じた！　ぶわっと涙が出る。
「マ、マスター、これは！」
「誰も取りませんからゆっくりお食べなさい。わたし、正直あのお店、高いと思いました。しかし、あまりに高額なのでもしやなにかの効力のある食料アイテムなのかと購入してみたのです」
公潤は人柱気質だった。
「そうしたらどうでしょう。おいしいじゃありませんか。わたしは涙が止まりませんでしたよ」
公潤は思い出し涙をそっとぬぐった。
「わかります！　わかります！　マスター」
「今日まで粗食に耐えてくれたうちの子（ギルドメンバー）にも食べさせてあげたいじゃないですか。それで思い切って購入しました」
「英断です！　マスター」
「さあ、はやくうちの子達に食べさせてあげましょう」
「はい、マスター」

そこは戦場さながらでした。肉を叩く音とか、揚げ物の音とか。パン生地を叩きつける音とか。大勢の『お茶会』『キノクニ屋』『銀狼騎士団』からある基準で選ばれたメンバーです。うちのヤンさんもきています。
『キノクニ屋』が用意してくれた大厨房。そこでルナチェーン各支店に送る料理の下ごしらえ、調理をしております。
僕はそこで北川さんを見かけました。手際よくジャガイモをむいておりました。ピーラーのない『クリエイト・ミレニアム』の世界

では小さなナイフか包丁でむくしかないのです。
「上手ですね」
「あら、あなたほどではなくってよ。トマトソースもマヨネーズも手作りしちゃうし、ブイヨンまで作っちゃうなんて意外だったわ」
「時間があれば誰でも作れます。難しいものじゃありませんよ」
「……今はインスタントよ。店で買っちゃうのがふつうよね」
北川さんが溜息をつきました。
「ここだから言うけど『料理アイテム』に味がない理由が――ガイドに味の説明がない――だなんてね」
「素材しか明記されていませんから」
『クリエイト・ミレニアム』の『料理アイテム』の説明文には必要素材しか並んでいません。それがどういう料理かは書いてありません。
「～～～ん～～ゲームでの加工が厳密には“加工”ではなく“すり替え”だっていうのはわかるけど、その味のない『料理アイテム』はいったいどこからきたわけ？　素材はどこへ行くの？　ゲームなら数値ってことで納得できるんだけど」
「0と1の世界ですからねえ。この世界は現実とゲームの法則がごっちゃになってて――まだ不明です」
北川さんが肩をすくめました。
「不思議議の世界だわ」
「まったくです」
それは僕も賛成です。所詮数値で0と1によって表現されるゲームならともかく、物質が消えたり現れたり、わかってはいましたがファンタジーの世界です。
「北川さんは一号店にいくかと思っていました」
美人ですから。
「（メイド服が）恥ずかしいから、嫌。こっちに志願したの。夕暮は一号店行っているけど」
「南さんは？」

「狩りに行っているわ。調理スキルないもの」
「調理スキルは関係ありませんよ。実際に素材を調理して結果として料理にすれば味があります」
「……本人にスキルがないの。卵割ったりお湯を注ぐのはできるらしいけど……」
「……カップ麺ですか」
日本ではお湯を注ぐだけで食べられるものがいっぱい。思えばいいところでした。
「一号店の在庫が切れます。追加お願いします」
「四号店、五号店、団体客入りました。食材の追加、お願いしまーす」
「二号店、大量注文入って品薄です。追加おねがいしまーす」
「三号店、在庫わずかです！」
おっとぼやぼやしていたら店の品物が切れてしまいます。僕は仕事に取り掛かりました。

「いいか！　野菜やその他の物は帽子屋の領地と『キノクニ屋』で用意できるが、狩りで用意する食材は別だ。『銀狼騎士団』の名にかけて、ルナチェーンで使う肉類はすべて我々が用意するのだ！　狩って狩って、狩りまくれ！　アルファの食事すべてを賄うつもりでやれ！」
「アイ・マム」
その頃残りの『銀狼騎士団』のメンバーは狩りをしていた。あるものは魚を狙い網を引き、あるものは野生動物を追いかけ、弓で鳥を狙った。低レベルのメンバーにとってはギルドへの恩返しとレベル上げのいい機会だった。
張り切って食材の確保にいそしむ一同だった。
キャッスルを使ってすべてのタウンを行き来できる『銀狼騎士団』の狩場は広かった。

だが、オープンしたのは飲食店だけではなかった。それまでタウンであまり（タウンにひとつだけ現在休業中）見ることのできなかった下着屋がオープンしたのだ。

色欲（ラスト）と暴食（グラトニー）の罠（後書き）

アルファの戦闘系ギルド「黒獅子騎士団」と「ワイルドカード」のギルマスおよび側近さん紹介。胃袋ゲット？

人柱　ひとばしらと読む。普通は大昔に橋や重要な建造物を作るときにささげられていた生贄。作品中の場合はパソコン関係で事前情報が怪しい製品を先んじて試しバグ情報などを流してくれる尊い犠牲。要ネタに殉じる覚悟。

「B・スミス」は大手生産系ギルドです。次回ぐらいに出せるかな？

職人の嫉妬（エンヴィー）

「ここですよ、ホラっ海パンー」
揃いの羽織袴の青年二人――いずれも髷のように高い位置で髪をくくっている――のうち一人が『海水パンツ』を嬉しそうに手にとった。
サポーター、下着代わりにどうぞ、と手書きのポスターが壁に貼ってある。
「これならトシさんもアレよりは抵抗無いと思います～。買いましょ」
にこにこと朗らかな顔は少女のように愛らしい。大きめの瞳が子供っぽくみせる。
対する青年は切れ長の瞳の落ち着いた怜悧な雰囲気だ。
「……高いな」
トシと呼ばれた青年がぼやくのも無理はない。マジックアイテム並のお値段なのだ。
「ボクが出しますよ！　お揃いしましょう！　トシさんとお揃い～」
「既製品だろう」
お揃いもなにも、同じものを買った人は皆お揃い。
「それはそうですけどね～、トシさんとお揃いだと思うと嬉しいです～」
臆面もなく言い切られ、トシは照れたようにそっぽを向く。
「あ、これいい。富士山ぱんつ」
そう言って朗らかな青年が手にとったのは――富士山と白波に日本男児とプリントされたトランクス。
「沖田、『日本男児トランクス』だ」
と商品名は書いてある。
「いいじゃないですか。富士山ぱんつで。こっち普段用にして、海パン戦闘用に買っておきますね～」

「…………」
トシは思わず沖田から眼をそらした。
「この絵柄からしてアマイズルのアイテムか？　『キノクニ屋』にしてやられたな」
日本男児トランクスを手にぶつぶつ呟いている恰幅のいい青年を見つけてしまった。
「あれ？　『B・スミス』のジョンさんじゃないですか」
「おう、こりゃ、『東方記』の沖田とトシゾウじゃねえか」
アルファ生産系の最大手『B・スミス』のギルドマスタージョンだった。
「この間直してもらった刀、いい具合ですよ」
「そりゃなにより」
「敵情視察ですかー。ここ『キノクニ屋』傘下でしょ？」
ジョンは「鍛冶屋」であり戦闘系の『東方記』とは馴染みである。
屈託のない言葉にジョンは苦笑する。
「まあ、そんなところだ」
「おたくのところではこういうの、扱ってないんですか？　ちょっと高くて」
「悪いがないな」
「下着アイテムのレシピなど、うちの者も知りませんでしたからね」
いつの間にかすぐ近くまで来ていたエルフの青年が会話に加わった。その手にはしっかり日本男児トランクス。
「ほう、『フェアリーリング』も知らねえか」
『B・スミス』に次ぐ生産系大手ギルド『フェアリーリング』のギルドマスタースリフだった。
「女性用ならタウンに店があるのは知っていましたよ。しかし“大転移”の日から品切れで休業中です」
「目端の利くやつもいたってことか」
ゲームが現実になってから様々な違いがでてくるようになった。
その中でも下着、肌着は問題だった。なにが違うかというと――汚

れるのだ。汗もかくし垢だって出る。大きな声ではいえないようなモノで汚れる。特に男の朝の事情とか。同じものをずっと何日もはけるわけがない。臭うし痒くなる。

洗濯しなければならないが――渇くまでの替えがない。大きな問題だった。現代人としてノーパンは心理的な抵抗がある。特に女性や戦闘をこなすものは。でりけえとな問題だった。デリケートなのである。傷つきやすいのだ、見かけによらず。なにがとは聞かないように。

そんななか下着屋がオープンしたのだ。これに飛びつかないものはいないだろう。マジックアイテム並の値段だが、買えるなら買うしかない。

「女性用下着のレシピなら存在するぞ」

新たな声が参加した。髭面のドワーフだ。

「これは『ドラッカー』の」

『ドラッカー』は生産系の中規模ギルドである。だが、職人気質のメンバーがそろっていてレシピの獲得には貪欲であり、高品質のアイテム生産で知られているギルドだった。そのギルドマスターオキナガ。手には日本男児トランクス。

「ああいうのか？」

ジョンが指差したのは女性用のコーナーだった。華やかなフリルやレース、リボン、柔らかい色彩が男性に対して禁断の領域となっている。

スリフが縁なし眼鏡を直した。

「では『ドラッカー』さんもこちらの経営に参加なさっているのでしょうか？」

「いんや。件（くだん）のレシピはイベントクリア品でな。手にしたやつはレベルが足りず、レベルが足りる縫製者は「んなイロモン造れるか！べらんめえ！」と怒り狂ってよ、けっきょく闇に葬られたというわくつきのシロモンだぁ」

「どっかで聞いた話ですね～」

沖田は伝説のナース服を思い出した。
職人として好奇心でスリフが尋ねた。
「高レベルというとどのくらいで？」
「８５だ」
あまりの高レベルに全員驚いた。
『マジックアイテムかっ！』
「いんや。通常品だ」
オキナガが遠くを見るような目をした。
「役に立たねえうえにべらぼうにレベルが高いんでよ、うちのモンはそれ以来かかわってねえ。水着も女のレシピはあるたあ知っているが、あれも８０だぜ。よっぽど酔狂な野郎じゃなきゃ習得なんざ、しねえだろうよ」
「じゃあ、これって適正価格ですか？　価格の基準ってレベル×できまるんですよね」
「さてなぁ。どっちにしろ、ここでしか売ってねえからな。うちでも男用のレシピなんざ噂にも聞いたことねえ。やられたな」
「まったくだ」
「まいりましたね『キノクニ屋』さんに出し抜かれましたよ」
ゲーム世界では下着の需要などよっぽど特殊なユーザーしかいなかった。それゆえにレシピが発見されても見向きもしないものが多かったのだ。しかし現実となったいま必需品である。とすればその需要は単純に考えればアルファのプレイヤーほぼすべて。一万五千人。手持ち金が心もとなく買えないプレイヤーがいるとしても、女性は上下買わねばならず、男だって一枚以上は必要だ。
未曾有の需要である。
『クリエイト・ミレニアム』でも名高い生産系ギルドの長が歯噛みする。
「じゃあこれ作った人って高レベルで酔狂な人なんですね」
無邪気に言う沖田に、生産系ギルドの長三人はとある酔狂な獣人の高レベル縫製者を連想した。そして眼を交し合い相手も同じ結論

に達したと確信する。
「トシさんはあっちの方が抵抗ないかもしれませんね。あっちのコーナー行きましょうか」
沖田がトシの手を引いてパステルカラーの禁断領域を目指す。ひらひらラブリー空間にトシがひるんだ。
「沖田、あれをはけと？」
「あれなら抵抗ないでしょ？　似合いそうな可愛いの買いましょう」
トシが赤面する。
「いまの、すっごい嫌なんでしょう」
「いまのって、なにはいてやがるんだ？」
オキナガが素朴な疑問を口にする。
「代用品ですよ〜。長い布をですね」
「沖田！」
「ああ、フンドシ代わりかよ」
トシが顔を覆ってうずくまる。
フンドシ。ああ、日本古来の下着。越中などの種類もあるが、この場合は
「説明しなくていい！」
首筋まで血の気を上らせてトシが叫んだ。
「ソウちゃん！　いまのあたしは男なの！　もうああいうのなんか、はけないわ！」
沖田がトシの手をとった。
「似合うと思いますけど」
いま、なにを想像した。
世間体のため極秘とさせていただきます。
「あたしはもう男なの。ソウちゃんにふさわしくないわ」
「なにを言うんですかトシさん。トシさんはどんな姿になったってトシさんです。男になったとしてもボクの気持ちが揺らぐわけないじゃないですか」
トシゾウは現実世界では女で利美といい、現実世界での沖田ソウ

こと沖田総一郎と恋人同士だった。同じく新撰組のファンである二人は『クリエイト・ミレニアム』の世界で幕末ファンを集めてギルドを作って遊んでいた。“大転移”のあの日以来トシゾウに――男になってしまったトシは身を引くべきだと思っている。だが、沖田は変わらぬ――むしろ以前より愛情を過剰に表す。ひとつ屋根の下に住んでいるせいかも知れない。

食事も一緒、見回りのローテーションも一緒。あまつさえ、一緒に風呂に入りたがる。一緒に寝たがる。トシが嫌がれば「男同士じゃないですかー」と断るほうがおかしいといわんばかりだ。

男同士なら当たり前のことなのだろうか？　なぜか身の危険を感じ――もとい――たんなる親愛とは思えない節がある。思い過ごしだと沖田はいうのだが――

「愛してます。トシさん」

「……ソウちゃん……TPOを考えて……世間の目が痛いわ……」

空気よんでください。公衆の面前です。

「なにか期待するような視線を感じますが」

「……腐界方面の空気はよまないでいいから。というか、それは無視して」

……複雑な事情を抱えた恋人同士？　を残して生産系ギルドの長三人はその場を離れた。イタイから。事情は知っているが、まともな成年男子にはイタ過ぎる。

「『ルナティック・ハッター』のご隠居は『キノクニ屋』の若造と懇意だったな」

「“ご隠居”でしょうね」

伝説のナース服の出所も『ルナティック・ハッター』だろうというのが生産系の古参の定説だった。『お茶会』と懇意で酔狂な高レベル縫製者といえばソウセキしかいない。

「まさか“黒の錬金術師”が絡んでんじゃねえだろうな」

「あの裏技のエキスパートですか……確実にでしょうね」

彼らの脳裏には“非力”を公言する丸眼鏡の補助魔法使いの姿が浮かんだ。
敵に直接大きなダメージを与えられるのが強さであるとすれば、クロウ・リーは確かに“非力”であるのかもしれないが、なにを使っても確実に敵を倒すという点では、有能な人間である。
「彼女が絡んでいるとすれば――なにか企んでいるのではないでしょうね？」
「考えすぎ――とは言い切れねえな。“黒の錬金術師”だからなぁ」
「『ルナティック・ハッター』の帽子の中身は計り知れませんからね」
彼らはレジに並んだ。
「姉ちゃん、これくれや」
「お買い上げありがとうございます」

男性用下着はここでしか売ってないのだった。

「売れないとは、どういうことだ！」
レジのひとつで銀髪のエルフが怒声を上げていた。
「ですからお客様、店頭の商品は限られておりますので、より多くのお客様に行き渡るよう、お一人さま女性用は上下で四枚、男性は二枚までとさせていただいております」
売り子の女の子がぺこぺこと頭を下げた。
確かにそういう張り紙があちこちに貼ってある。
「人数分、必要なんだよ」
銀髪のエルフ――『グリーン・フラッグ』のギルドマスターロビーがごねる。メンバーらしきエルフが口を挟んだ。
「ギルマス、いまから全員呼び出しますか？」
「あの、それでしたらご注文してはいかがでしょう？」
「注文」
「はい。注文販売も受け付けております。お時間はいただきますが、

商品は出来しだい必ずお届けします。ただ、全額前金でキャンセルなさった場合にも返金できません」
「仕方ねえな……２４６枚だが、キャッスルに届けてもらえるのか？」
「はい。大丈夫です。日にちの指定はできませんが、届けてもらいたい時間帯の指定がございましたらそちらもご記入ください」
ぶつぶつと文句を言いながらもロビーは注文表を受け取りサービスカウンターの方へ移った。
それを見ていた沖田は自分の持ってきたものに目を落とした。
「ボクとトシさんで、海パン二枚に普段用二枚で、買えますよね？」
「そうだが、みなの分も注文しておいたほうがいい。注文表だけもらって、明日注文できるかきいてみよう」
「いま注文しちゃだめですか？」
「……全員のサイズ分かるか？」
「ああ、それもそうですね、なるほど。さすがトシさんだ。お姉さん、これください。それから——」

『キノクニ屋』の下着屋は大変好評で、その値段にも関わらず飛ぶように売れていた。

「なんすかねー、このマジックアイテムですかって値段は。売れてるってーのが、驚きですよ」
「ブンにゃん、物の値段はつまるところ需要と供給できまりますにゃ。高くてもここにしかなく、どうしても欲しければ、それが価格となりますにゃ〜」
『キノクニ屋』の所有する工場のひとつはいま完全に海水パンツ製造専門となっていた。
下着を提供しているのはいまや『キノクニ屋』のみ。この値段だと言われれば、のむしかないのである。
「ご隠居がおっしゃっていた“目に見えない需要”とはこのことだ

ったんすね。いやあ、まいりました。完全に盲点でした」
にゃにゃにゃとソウセキが笑い声を上げた。
「ブンにゃんもまだまだですにゃ。それにしても――『キノクニ屋』でもミセパン、ミセブラが造れないとは誤算でしたにゃ」
「すんません。なんせ、縫製者ってあんまり出番なかったもんですから、中級程度しかいなくって」
コロンが頭を下げた。
『キノクニ屋』メンバーの縫製者に高レベルなものはいなかったのだ。おかげで未だに女性用はソウセキ一人でがんばっている。とはいえ、海水パンツはレベルが足りていたのでそちらの方を任せられたのは幸いだ。
「しかしなんすか、このレベル。85レベルっつったらマジックアイテム並じゃないですか」
「イロモノレシピは基本的に必要レベルが高いですにゃ。「こんなもの蔓延したら困る」という製作者側の意図が見え隠れしないでもないですにゃ～」
「なるほど」
そこまで言ってなにかに気づいたかのようにコロンは口を閉ざした。イロモノレシピが基本的に高レベルであると知っているということは、他にもたくさんイロモノレシピを知っているということであり、あまつさえ習得しているかもしれないということである。
「……」
何か言いたいようだった。
「にゃんですかにゃ？」
「……ご隠居、『お茶会』の伝説のナース服ってもしかして……」
「ｗｗｗｗんｗｗｗｗにゃんのことですかにゃｗｗｗｗ」
「大口注文が数件入っています。いずれも戦闘系のギルドっすね」
「すると海パンですにゃ。にゃにゃにゃにゃ我々の商品は各ギルドが欲しがっていますのにゃ。思うツボですにゃ」
「はい。それはもう。濡れ手に粟でございます」

「ふっ御主も悪よのう『キノクニ屋』」
「いえいえ、ご隠居さまほどではございません」
二人して高笑いをする時代劇ファンだった。
ご隠居さまで悪代官やるのはどうかと思います。

職人の嫉妬（エンヴィー）（後書き）

一部の人たちから熱いコールをいただいておりました『東方記』のお二人です。普段用にドレを購入したのかは内緒です。ご希望がございましたらイケナイ小話を書き下ろしてメッセージにて配布いたします。ご希望の方はメッセージで作者宛にご連絡をって、冗談です（笑）

腐界からの視線。投げかけていたのはもちろん……うふふふふ。

あとは残りの有名戦闘系ギルドと生産系ギルドのマスターたちでした。

ルナチェーン、および下着屋がオープンしていらいアルファの様子が変わった。
それはプレイヤーが食事がおいしいということを思い出したことであり、一度おいしい食事を取り戻せば、もう手放したくないと思うことであった。
大手ギルドは食事の調達をほぼルナチェーンの注文で行い、そうでないものは店舗に並んだ。ルナチェーンは『キノクニ屋』の店である。そして休業中の飲食店は先に新装開店した店舗だけでなくまだいくつか存在し、そこが体裁を整え次第ルナチェーンとして新装開店した。
ルナの名を掲げる店は品揃えもサービスもまちまちだったが“味がある”という点では同じだった。どこも大いに繁盛した。
下着屋も大いに繁盛し、生産が間に合わないほどであった。
しかし、ルナチェーンはどこも高額であり、下着はさらに高額だった。それらを必要とする大金を持っていた裕福なプレイヤーをのぞいたプレイヤーは金を稼ぐ必要がでてきたのだ。そして『クリエイト・ミレニアム』の世界で稼ぎたいとなれば手っ取り早いのは狩りである。マーケットに品物を流してもそれが買ってもらえるかどうかわからない、もしくは換金できるものが乏しいプレイヤーは仲間とともに狩場に向かうようになった。
おいしい狩場は大手のギルドに占領されていたが、日銭を稼ぐ程度ならどうにかなるものだ。プレイヤーが見向きもしない品物でも会館は買い取ってくれる。大手ギルドも頻繁に狩りを行うようになった。
ドロップ品が会館に持ち込まれれば、会館の直営店であるマーケットに品物が流れ出す。狩りに必要な品物、あるいは傷んだ武器防具の補修と経済活動が活発になった。

ルナチェーンで消費される品物を提供して利益を得ようとするものもいたが、残念ながら肉類は『銀狼騎士団』が、そのほかの品物は『ルナティック・ハッター』の領地か『キノクニ屋』のタウン外の伝を総動員して賄っていたため、せいぜい適正価格でしか売れなかった。

異世界にきてしまったという絶望に囚われ沈み込んでいた街は活気を取り戻しつつあった。

『おーい、そろそろ昼飯にするぞー！』

ギルド専用の回線を使って指令が飛んだ。元気のいい答えがいくつもかえる。

『銀狼騎士団』食材調達班。彼らの狩場は“狩場”モンスターの出現率の高いゾーンではなく、フィールドマップの野生動物の出現率の高い場所であった。

思い思いの場所で事前に配給された食糧——弁当やサンドイッチ、水筒のお茶かコーヒーを取り出し労働に疲れすいた腹を満たす。彼らは泣いていた。

「ばか、泣くなよ」

「だって先輩、うまいですー。銀狼入ったときに食事で出されたチーズやバター、なんて旨いんだって、思ったんすけど、これは、もう、なんていったらいいか」

「分かる、わかるぞ」

異世界に放り出され、なにが一番こたえたかというと、味のない食料アイテムだった。喰えないほどではないが、食の喜びを奪い取る残念な食事。最初から『銀狼騎士団』にいたものは『陽だまり村』印の食料品がわずかな救いであった。“大転移”の後参入したものの多くは残念な食事を我慢して食べていた後だっただけに『陽だまり村』最高と崇め奉っていた。

いま、南将軍の言ったとおり、食の喜びを取り戻したのだ。ああ、この味わい。豊かな食の喜び。

ご飯がおいしいって素晴らしい！
感動が涙となって零れ落ちる。
当分食事ごとに泣きそうだ。というか、泣いている。よそから見れば異様な集団かもしれないが、プレイヤーならば分かってくれる感覚だろう。
「『ルナティック・ハッター』には感謝しないとな」
「神っすよ、もう神です」
はぐはぐと弁当を貪りながら生きる喜びを噛み締める一同であった。がんばって働いて、おいしいご飯を食べる。ああ、人生って素晴らしい。
「飯食って一休みしたら、もうひとがんばりすっぞ。なにせ、アルファの飯すべてを賄わなきゃならん」
「アイサー。自分、低レベルすっけど、『銀狼騎士団』のため、アルファの胃袋を満たすため、誠心誠意がんばらせていただきます」
張り切るメンバーを見て先輩はふと悲しくなった。
「……いいことなんだよなぁ。いちおう正しいことやってんのに……なぜだろう、悪事に加担しているような気がする……」

「これが最後です」
陽だまり村の村長が最後の品物をジュネに渡した。それはすぐに異次元バックにしまわれる。異次元バックにしまわれれば大量の野菜も陰も形もない。
「ありがとう。急で悪かったわね。これは代金よ」
「いえいえ、徴発ではなく商いですので、かまいません。御代もいただけましたし。これで孫娘になにか買ってやれます」
村長もホクホク顔だった。
作戦にあたり『ルナティック・ハッター』は自分達が栽培している野菜の数を増やすのと同時に陽だまり村に食材を求めた。もともと領主である『ルナティック・ハッター』には税という形や非常時の徴発が認められているが、それをよしとはせず買い取りという形

にしている。
　余剰の食材を残らず換金できて村人もホクホクしている。
「それはよかったわ。なんなら『キノクニ屋』あたりに欲しいものもってきてもらう？　いまけっこう融通利くわよ。これからもなにかあったらよろしくね」

「ポーションの不足はないね？　予備はおいていくからなにかあったら使ってくれたまえよ。襲撃はこの前起きたばかりだから後二ヶ月近く猶予はあるはずだけどね」
「はい、領主様。猶予って、まるで襲撃があることが確実みたいにおっしゃりますね」
　なにも知らないマリスがポーションの箱を受け取り笑った。なにか後ろめたいものを感じてアマクサは視線をそらした。
　ＮＰＣたるマリスは知らない、三ヶ月に一度その定期イベントがあることを。
　ゲームの仕様と言ってしまえばそれまでだが、未然に防ぐことはできない。三ヶ月に一度必ず村は脅威に晒されるのだ。なぜそのイベントがあるのかといえばプレイヤーを飽きさせないためだ。
　そもそもゲームをやる人間は冒険を求めている。それを満足させるため経営側はあの手この手で各種イベントを『クリエイト・ミレニアム』の世界にちりばめた。プレイヤーにとっては遊びだが、そこに生きる『コモン』にとっては苦難以外のなにものでもない。
　以前のＮＰＣ相手ならともかく、今現在自分達とほとんど変わらない彼らを相手にすれば、罪悪感がぬぐえない。
「す――すまないね、村を任せっぱなしで」
　現在、屋敷の人間まで借り出しての大仕事の真っ最中だった。領地は五人しかいない兵士に丸投げである。館の維持は下女のランと下男のハリスにさせている。
「いえ、なんか難しいお仕事をなさっているんでしょう？　館勤めの執事さんやメイドさん、料理人まで動員しておられるとか。そん

な大事なお仕事をやられている領主様達にご心配はかけられません。村のことは我々がしっかり守ります。どうぞ心置きなくがんばってください」

しゃきっと返答するマリスにアマクサの心はさらに痛んだ。

とにかくイロイロと心苦しいのだ。

『キノクニ屋』の下着工場は急ピッチで海パンを作り続けていた。

「いやあ、嬉しい悲鳴ですね、旦那。注文は来るし、店は繁盛してますし。造るのが間に合いませんよぉ」

くいっと丸眼鏡を直しながら副ギルドマスターの柴が状況報告をする。

「で、どお？　間に合う？」

「間に合うどころか、予想以上のご贔屓をいただき、とうに目標達成してます」

「んじゃ、もう計画実行しても大丈夫だね？」

柴が苦笑した。

「いやいや、もったいないですねー、このほどの儲け口を失うのは」

「失くすわけじゃあないさ。値を下げる必要はあるだろうけど、商売は続けられるっす」

「競争相手がごまんと出てきますけどね」

独占販売でなければ当然価格競争が起きる。食料も下着も値下げしなければならなくなるだろう。

「まあいいさ、正直下着と食料ばっかかりに追われるのもどうかと思うよ。『キノクニ屋』は貿易が一番の売りなんだからさ」

『ルナティック・ハッター』の作戦にのってから『キノクニ屋』の全精力はルナグループと下着屋に注ぎ込んでいた。食材確保と衣服の素材の確保、加工、販売だけで手一杯だ。それが悪いというわけではないが、アルファ全体の需要を満たすのは『ルナティック・ハッター』『お茶会』『銀狼騎士団』『キノクニ屋』だけでは難しいのも事実だ。

「猫のご隠居はいつまで協力してくれるんで？」
「とりあえずうちの縫製者が造れるようになるまでは品物を納入してくれるって。レシピは好きに使ってくれってさ。あとなんレベル？」
「一番高いもので、あとニレベルですねー。でもなんですね、ご隠居、なんだってこんなイロモノレシピ習得してたんですかね？」
コロンの脳裏にメイド姿の某ネカマが浮かんだ。たぶん、イロイロあったのだろう。ああ、いや、ご隠居ならばどのようなイロモノレシピを習得していても不思議ではない。レシピを入手しても習得するかどうかは本人に任される。酔狂なご隠居なら片っ端からイロモノレシピを習得してそうだ。いや、しているだろう（断言）
「酔狂だからね、ご隠居」
柴は何かを考えるようにしばらく口を閉ざした。
「…………もしかして『お茶会』の伝説のナース服の出所って……」
「「ｗｗｗｗｗんｗｗｗｗｗにゃんのことですかにゃｗｗｗｗ」って言われたよ」

一部のギルドに『キノクニ屋』経由で招待状が送られた。差出人は『ルナティック・ハッター』と『お茶会』の連名だった。いずれも零細ギルドといっていい規模のギルドではあった。しかし古参のプレイヤーにとって『ルナティック・ハッター』は軽く見ていいギルドではなく、『お茶会』は治療役の斡旋場所としてかけがえのないギルドだった。『銀狼騎士団』と懇意であることは知る人は知っていたし『キノクニ屋』を経由したということは確実に『キノクニ屋』も噛んでいるということだ。
ルナチェーンは『キノクニ屋』傘下でありそこで『お茶会』と『銀狼騎士団』のメンバーが働いていたということは知られていた。そして“ルナ”の名はあきらかに『ルナティック・ハッター』がその主導的役割を担っているというメッセージだった。

「最初に気づくべきでしたね」
『ワイルドカード』の公潤は手の中で招待状を弄んだ。
「どうします、マスター？」
「行かないわけにはいかないでしょう。おそらく――」
なにかが動こうとしている。“黒の錬金術師”がここまでの大仕掛けをしているからには、降りれば後悔するようなことだ。
「なにを企んでいるんでしょうね、あの人は」

その日会館の滅多に使われない一番大きい会議場にはいくつものギルドが招かれていた。代表とその護衛で室内はにぎわっていた。半円を描くように設置された机に席が用意されている。その向かいには講壇のように席がひとつ。
招いたのは『ルナティック・ハッター』と『お茶会』。
招かれたのは
『銀狼騎士団』
『ワイルドカード』
『黒獅子騎士団』
『東方記』
『グリーン・フラッグ』
『B・スミス』
『フェアリーリング』
『キノクニ屋』
『高雅楼』
『ドラッカー』
それに招いた側の『お茶会』が半円を描くように設置された席についていた。
その各ギルドマスターが二、三人の護衛をつれてきている。いずれも大手または小中規模のギルドであっても影響力のあるギルドだった。
友好的な関係にあるものもいれば、敵対とまではいかないものの

競争関係にあるギルドもある。ギスギスした空気が流れた。
「失礼します」
執事とメイドの格好をした男女が茶器と軽食や菓子をのせたワゴンとともに現れた。
男性にはメイド姿の女の子が、女性には執事が話しかけた。
「いらっしゃいませ、お客様。主人よりおもてなしするよう申し付けられました。お飲み物は紅茶、コーヒー、カフェオレがございますが、なにがよろしいでしょう。お茶請けにはケーキとマドレーヌがございます。甘いものが苦手でしたらサンドイッチもございます」
にこやかに給仕して回る二人に見覚えのあるものもいた。
「あんた、『ルナ』の」
「はい。アリスでございます。いつもごひいきいただき、ありがとうございます」
アリスがまぶしい笑顔で答えた。
「あ、ひいきしてんのは神威だから。おれじゃないから」
レオーネは慌てて補足する。今日レオーネがつれてきたのはグレイと護衛のガイ（脚フェチ）だけだ。あとで神威が知ったら地団駄踏んで悔しがるだろう。
飲み物と食べ物が行き渡りいくらか空気が和んだ。
「『ルナティック・ハッター』の『お茶会』にアリスたあ符牒がありすぎじゃねえか」
レオーネが皮肉に微笑めば、『グリーン・フラッグ』のロビーがいらついたように言う。
「なんなんだよ、この集まりは」
席についている『お茶会』の向日葵とヘレーネに刺々しい視線を送る。
「おや、気づいてないのかいボーヤ」
ハスキーな笑い声が響いた。『高雅楼』のギルマス胡蝶蘭が優雅に脚を組みかえる。その脚線美に『黒獅子騎士団』のガイはむしろ目をそらす。蘭花のごとき美貌に妖艶かつ豊満な女性美の極致の肢

体。露出度の多い衣装は知らなければ目の保養だが――
「なんだよ、ネカマ」
「お黙り！　今のあたしをネカマと言うんじゃないよ！」
“贋物”マリーと張る有名ネカマだった。見えそうで見えない魅惑の胸元も、しっとりとした眩しい脚線美も、中身がネカマだと悪夢以外のナニモノでもなくなるのはナゼだろう？
半ばロールプレイを放棄しているマリーと違いそれで通すつもりらしい。
「こんな明々白々な招待状もらっといてわからないんじゃ、困ったもんだね。ボーヤもう少し頭を使うことを覚えな」
「てめえ……」
「とはいえ、ちょっとは教えてほしいもんだねえ」
胡蝶蘭が妖艶な流し目を向日葵におくる。
「やめとけよ、『高雅楼』の。脅えてんぜってゆーか、お嬢、おいらを盾にすんなよ」
「せやかて、なんか怖いねん」
オキナガの背に隠れる向日葵だった。さらにその背にヘレーネが隠れている。
その危機感は正しい。胡蝶蘭は女好きだった。

マジックシルクハットに燕尾服。いつもの魔法発動体の指輪は手袋の中。丸眼鏡をやめて気合をいれて片眼鏡（モノクル）にしてみました。
「どうでしょう、老師。気合を入れてみました」
「………どこら辺が気合なのかよくわからにゃいのですにゃ。皆様お待ちかねですにゃ」
今日この日のために僕達『ルナティック・ハッター』はもちろん領民の皆さん、『銀狼騎士団』に『お茶会』『キノクニ屋』と大勢の人に死力をつくしてもらいました。あとは僕の持てる力を尽くすしかありません。
「ではいきましょう」

僕は顔をあげあいている講壇に向かいました。
さあ、幕開けです。僕はうまく演じきることができるでしょうか。

戯曲の開幕（後書き）

各ギルドの情報は後ほど。
『高雅楼』の胡蝶蘭さんはネカマですぇ。

「皆さん、今日はよくぞおいでくださいました。僕は『ルナティック・ハッター』のクロウ・リーと申します。お見知りおきを」
僕は一礼しました。
「今日お時間をいただきましたのは、皆さんにお願いがあるからです」
招いたギルドの皆さんは全員参加のようです。僕がひいた伏線に気づいた人もいれば、そうでなさそうな人もいます。
ギルドマスター十二人のうち男が十人に女が二人というのは『クリエイト・ミレニアム』の男女比率にしても男性に偏っているような気がします。やはり女性がギルドマスターを務めるのは難しいのでしょうか？
さて僕がするべきことはただひとつ。
「助けてください」
「あ？」
レオーネさんが訝しげな声をあげました。
公潤さんが尋ねました。
「助けを求めているのは誰ですか？　君ではないでしょう？」
「さっしがよいので助かります。助けて欲しいのはアルファ全てです」
「それは……大きくでましたね」
「はい。大きいです。ですので、僕達だけでは力が足りませんので、皆さんのご助力をお願いいたします」
事前に知っている『銀狼騎士団』『お茶会』『キノクニ屋』以外のギルドがざわめきました。
『フェアリーリング』のスリフさんが発言します。
「それはなにかのクエストですか？　クリアしなければアルファ全体が危機にさらされるような」

「クエストといえば言えるでしょうね。ただし、運営側が作ったものではありません。あえて言えば“大転移”で自然発生したものということになるでしょう。僕達プレイヤーは“大転移”によってこの『クリエイト・ミレニアム』によく似た異世界に取り残されました。いやおうなく僕達はこの世界でサバイバルすることを余儀なくされています。ここまではどなたにも理解していただけると思います」

一部の参加者が無意識にでしょうが頷いていました。

「ですが、これだけの人数が暮らすとなると様々な問題が浮上いたします。そこでプレイヤーが自らを律するための機関、自治組織を作るべきだと思い皆さんに呼びかけさせていただきました」

「くだらん」

吐き捨てるような声とともに『グリーン・フラッグ』のロビーさんが席を立ちました。

「俺達はタウンがどうなろうと知ったことじゃない。アイテムが換金できればいいんだ。だいたい、自治だといったところでどこまでできるものか。時間の無駄だぜ。抜けさせてもらう」

「権利を放棄しますか？」

「あ？」

「ですから、これからどのような話し合いがなされ、どのようなことが決められてもかまいませんか？　それがあなた方にとって不利になることでも」

「……おま、それは」

「ここで席を立たれるということはそういうことです。話し合いに参加する権利を放棄しますか？」

「……気になる言い方を……」

顔をしかめるロビーさんの袖を隣の席の沖田さんが引きました。

「なんだよ」

「ちゃんと聞いておいたほうがいいですよ」

協力してくださるようです。無邪気な笑顔がやたらと愛らしいで

す。中身も男の方のはずなんですが。
「〝黒の錬金術師〟って知ってます？」
僕の二つ名ですが、なにか？
「………………噂だけは……」
ロビーさん、どうしてそこで青ざめるんですか？
「あの人のことです。話だけでも聞いておいたほうがいいと思いますよ」
血相を変えてロビーさんが席に着きました。
沖田さんが満足そうにイイ笑顔を見せました。
………………どのような噂をお聞きなのでしょう？　無駄に興味あります。
「そうだな、そうしよう」
僕のようなか弱い補助魔法使いに対して大手戦闘系ギルド『グリーン・フラッグ』のギルドマスターたるロビーさんが青ざめるとか、血相かえるとかありえませんからっっ！
よほど根も葉もない悪い噂がささやかれているものと思われます。
風評ですね。
とはいえ離脱する人がいないのは幸いです。
「問題たあ、なんだ？」
レオーネさんが不機嫌そうに発言します。
「たとえば極端な例をあげるとすればＰＫです。元の世界からいえばこれは強盗殺人に値します。このようなことがまかり通っていいはずがありません」
公潤さん、沖田さんなど一部の方が無意識に頷いています。
「そのほかにも細かい事例を挙げるなら、一部のギルドのメンバーが工場関係の優先権を主張してゴリ押しするとか、マーケットに自分と同じような品物を流している中小ギルドのメンバーに対して品物を引き下げるよう脅すとか、そういったものです」
『ドラッカー』のオキナガさんと『高雅楼』の胡蝶蘭さんが顔をしかめました。

「たしかにそういった話は聞くねえ。困ったもんさ。あたしんとこのモンだけじゃない。小さいギルドはあっちもこっちも迷惑してるさあ」

『高雅楼』はアルファの中にある一階が店舗、上階が住居になっている建物を拠点にしておられます。ギルドキャッスルとは違いタウンの中にあるこうしたギルドの本拠地はギルドハウスと呼ばれております。昼はカフェ、夜はバーになるような感じのお店です。そこは『高雅楼』経営の店で、サブ職業に〝歌手〟をとっておられる胡蝶蘭さんはそこで歌っています。おかげでギルドの規模は小さい(四十人ほど)ながらも、中小のギルドに対してかなり顔の広い方です。

ネカマですけど。

マリーはエロカワ系ですけど胡蝶蘭さんは妖艶系です。『クリエイト・ミレニアム』三大ネカマのうち一人でございます。もう一人はうちのマリーですが。

メイン職業は暗殺者をとっておられます。容姿と職業のチョイスからなにをやりたかったかわかりますね。

大きく開いた胸元とか深いスリットから見える脚線美とか結われた黒髪から見えるうなじとか妖艶です。

妖艶ではありますが、無駄な妖艶さです。

胡蝶蘭さんは女性が好きなのです。男らしく。

ネカマですから。

男性はだめです。だって中身男性だし。

ちなみに僕やトシゾウさんのようなネナベは守備範囲外だそうです。体男だし。

その妖艶さは男性には武器になる(ならないか？　ネカマはだめって人多いし)かもしれませんが、女性にはまったく戦力になりません。

むしろ逃げられると思います。

女の武器は女には効きませんからっっ。

マリーのようなネカマさんには通用するかもしれませんが……ネカマは守備範囲内でしょうか？　中身は漢かもしれませんが、体は完全に女性ですし。

……肉体的に百合で精神的に薔薇ですね。そこはかとなく背徳のにおいが……。

「あ～、言っておくが、脅迫やゴリ押しはうちの本意じゃねえ。新入りが勝手やらかしてすまんな。こっちも禁じてはいるんだが」

「うちもです」

ジョンさんとクリフさんが弁明しました。

「上からの指令を徹底させなよ。もっとも、戦闘系よりはマシさね」

胡蝶蘭さんが戦闘系ギルドの方へ視線を流しました。

妖艶な流し目なのですが、皆さん嫌そうな顔をしてます。うえっと、舌をだしたかたも。そこまで嫌いますか。

というか、胡蝶蘭さん、そのロールプレイで押し通すおつもりですか？　うちのマリーは服装以外のロールプレイを放棄しておりますが。

「ギルド全体で狩場を占拠してんだからね。確信犯で悪さしてんじゃないよ」

「うるせえ、ネカマ」

ロビーさんが吐き捨てるようにおっしゃいました。激昂した胡蝶蘭さんが机を叩きます。

「お黙り！　今のあたしをネカマと言うんじゃないよ！　蘭姐さんとおよび！」

分かりました。そのようにいたします。

「このように様々な軋轢がございます。これを放置するのは後々大きな問題となると思われます」

うんうんと頷く人は増えました。ご賛同ありがとうございます。

「とはいえ、一番の問題はそこではなくこの『クリエイト・ミレニアム』の世界に“法”が存在しないことが一番の問題だと思われます。そこで――」

「待った」
ロビーさんが発言を求めました。
「なんでしょう？」
「“法”ならあるだろう。戦闘禁止区域で戦闘をやらかせば牢屋いきだ」
おや、気づいておられない。
「それは仕様です。戦闘禁止区域内で戦闘をやれば牢屋にテレポートさせられ一定期間拘束されるというだけです。法律とは言いかねます。また逆に言えば戦闘禁止区域外には法がないということでありまして、ゾーンを購入し設定を弄れば無法地帯になります」
かつて『クリエイト・ミレニアム』がゲームであったころ、秩序を保つのは運営会社の責任でした。ＰＫを容認しつつもゲームが崩壊しない程度に悪質なプレイヤーに対して警告を行ったりペナルティを科したり、場合によってはアカウント停止などの処分を下してきました。
しかし、今現在『運営会社』などないのです。
「繰り返しますが、この世界――アルファの街に現在“法”はありません。戦闘を行えば――戦闘禁止区域で戦闘行為を行えば牢屋にテレポートさせられるという仕様があるだけです。そのなかで曲がりなりにも治安が維持されているのは法治国家で生まれ育った僕らプレイヤー自身の良識、道徳観念が大きく作用していると考えます。日本では『して悪いこと』と『していいこと』が物心つく前から教え込まれています。僕らはそれに従って行動しています。“大転移”以降、各ギルドでメンバーをまとめ秩序を保とうとしてくださったことは大きいです。それについては感謝しております」
僕はいったん深々と頭を下げました。
「しかしながら、ゲームであった時代なら警告ものの特定ギルドによる狩場の占拠が可能であることから分かるように、僕達プレイヤーは運営側という“神の手”を失いました。それまで『して悪いこと』をやってもどこからも罰せられないと気づいた人がさらに悪質

な行為を行っています。法律はすでになく、自身の良識をなくしたプレイヤーによって秩序が崩壊するのも間近でしょう」

「おおげさだな」

鼻を鳴らすロビーさんに僕は反論しました。

「おおげさではありません。ここアルファは『始まりの街』です。それゆえに新人さんが気持ちよく遊べるようにと、面倒見がよくマナーのよい大手ギルドが教育用に多数存在しておりました。それゆえ“大転移”後もある程度秩序が保たれておりましたが――そうでなかったタウンがいまどうなっているかご存じないのですか？」

ぐっとロビーさんが息を飲みました。

このアルファのタウンは初心者が最初に訪れるところです。その初心者に気持ちよく遊んでもらえるようにとゲームの楽しみ方やマナーをレクチャーするため古参の面倒見のよいプレイヤーやギルドが集まります。

戦闘系でいえば言うまでもなく『銀狼騎士団』、『ワイルドカード』『高雅楼』など。生産系なら『B・スミス』に『ドラッカー』。

もっとも、他のタウンの狩場でのドロップ品の買い取り価格が一番高いため、換金のためアルファをホームタウンにしているギルドもあります。その素材目当てに大手の生産系がホームタウンに指定してたりもしますが。ここら辺は名前を挙げるまでもないでしょう。

あとはゲームに慣れていない新人狙いのPKから新人を守るためアルファにいるギルドもいます。見回りいつもご苦労様です。

これらのギルドが無言のストッパーになっていることは言うまでもありません。

“大転移”直後のアルファは約一万五千のプレイヤーが在籍していましたが、『銀狼騎士団』が他のタウンにいた団員をアルファに引き上げさせたため７００人から８００人は増えたはずです。もっとも他のタウンにあるギルドキャッスルに駐在員として一団を常駐させ、出稼ぎに出張したりしているので実際にいる人数は流動しております。

実は他のタウンにいらした一部の人はそこのタウンから脱出するため『銀狼騎士団』に一時所属して別のタウンへ移動し所属を離れるということをしている人もいます。いまアルファをホームタウンにしている人は一万六千を越えていると思います。

「……多少は知っている」

実は『グリーン・フラッグ』はデルタの方にもギルドキャッスルをお持ちです。“大転移”のさいいくつかのパーティでメンバーの一部がそちらに遠征なさっていたそうです。ホームタウンをデルタにしていたため、本隊と合流できなくなったとか――帰還呪文のギルドキャッスル指定を活用できていないようです。気づいていませんね――そちらのメンバーと念話で連絡を取ってはいるようです。

ちなみに『黒獅子騎士団』もイプシロンにギルドキャッスルをお持ちですが、全員アルファをホームタウン登録していたため全員アルファにおられるとか。イプシロンのギルドキャッスルは現在無人です。

他のタウンにいる念話登録している人とお話できます。そこから他のタウンの事情が流れくるのです。

「コロンくん」

「御氏名すか？　ども『キノクニ屋』のコメン・ブンっす。まいどー」

コロンくん達『キノクニ屋』は“大転移”にもめげず『クリエイト・ミレニアム』を飛び回っています。

「え〜ご指摘どおり、一部大手の横暴はあるんすけど、それ含めてもアルファの治安は全タウン随一っす。特にデルタと人数の少ないガンマーはいま酷いっすよ。ＰＫはもちろんのこと脅して所持金やアイテムを巻き上げたり、タウン外の戦闘禁止区域外では本当に好き勝手やってるんす。うちの若いもんも被害にあいかけて帰還呪文で逃げ帰ってきました。犯罪集団が幅利かせてるんすよ。うちみたいなまっとうな商人は怖くて商売になんないっすね。これは最近のことなんすけど、ガンマーでは人身売買にまで手を染めたやつらも

いるそうなんで」
『人身売買！』
予め情報を知っていた僕ら以外の皆さんが悲鳴を上げました。蘭姐さんが煙管の口を噛みました。
「そこまで腐ってんのかい？」
「そうなんす。犠牲になってんのはがんばってガンマーあたりに進出した低レベルプレイヤーとかＮＰＣなんすよ。さらって拘束して脅して言いなりにして金銭で取引してんす。こういうことは言いたくないんすけど、若い女の子が狙われてるみたいで」
それが意味するものに皆さん顔をしかめました。試していませんが、たぶん性行為は可能でしょう——そういうことです。
“天界の門”が停止しているいま低レベルのプレイヤーが徒歩、または馬などで他のタウンに移動するのは大変困難です。タウンから出ればＰＫに狙われ、タウンでは脅され——どこにも逃げ場がありません。プレイヤーとＮＰＣの実力差は言うまでもなく——プレイヤーがその気になりさえすれば、どんなことでもできます。
「人事ではありませんよ。このアルファでもそういったことはおきる可能性があります。すでにタウンの外でＰＫ達の中に女性に性的暴行を働こうとしていた人達がいます」
「本当ですか！」
沖田さん達『東方記』のメンバーが血相を変えました。頻発するＰＫに対して見回りを行っていた彼らですがその情報はつかんでいなかったようです。
愛らしい沖田さんの顔が怖いです。トシゾウさんはもとより後方に控えておられる表情の分かりにくい狼頭の獣人である斉藤さん（壬生狼と呼んであげましょう）からも怒りの波動がっっ！！
『ワイルドカード』の穏やかな公潤さんさえ眉を吊り上げています。
「ある方のお言葉を借りるのなら「婦女子を陵辱しようとするものなど、男の資格なし！　ちょん切ってしまえ！」ということになる

のですが――」
『どこを！』
いっていることは疑問形ですが、皆さん某特定部位をとっさにかばっておられます。
なんだ、分かっているじゃないですか。
蘭姐さん、いまのあなたに特定部位はありませんから。一緒になってかばわなくてもいいと思います。
トシゾウさんがかばわないのは僕と同類だからですね。
ああ、ここに天然ものとネカマとネナベの違いが。深遠な性の溝が。
ゴクッとどこかで喉を鳴らす音が。複数だったかもしれません。
「ですが、大聖殿で復活するさいに欠損部分は完全に元にもどるので意味がありません」
「試したのか！　試したんだな！　どこで試した！」
レオーネさんが椅子を蹴倒して吼えました。
僕は思わず口を開きかけて横を向きました。
「というわけで、ゲーム時代にできないから想定外だったことに対してのペナルティなど存在しません。無法状態なのですよ」
「あからさまに無視するな！」
むうっ、こだわりますねレオーネさん。どうでもいいことじゃないですか。
人には隠しておきたい黒歴史があるんですよ。
「確認したとなれば〝大転移〟以降ですね。ゲーム時代には不可能な行為ですよ。確認したとなれば、一度死んでますよね、そのプレイヤー……」
冷静に推理しないでください、公潤さん。切れる頭をお持ちで。
詳しい事情には黙秘権を発動します。
何かを考えていた沖田さんが口を開きました。
「『夜叉姫』って……もしかして……」
「噂は聞いています。女性ばかりＰＫ狩りパーティだとか。それが

なにか？」

いまの僕は男ですよ？　そういうパーティがいたとしても、僕には関係ないですね。

「……北川、僕のいない間になにをした？」

「総統にご報告しなければならないことはなにも」

ヴォルグさんには心当たりがあるようです。

でもあまり部下のプライベートに干渉するのはどうかと。

正義の天秤（後書き）

黒歴史ですませていい問題ですか？

ある日のギルド『かわらばん屋』の記事より抜粋

「あれは今思えば魔がさしたんだよ……こんな変な世界に放り込まれてむしゃくしゃしてたし、人間相手のほうがモンスターよりおっかなくないし……色々いい考えのように思ったんだ。禁止されてたわけじゃないし、実入りもいいしよ。可愛い女の子がいたから……ち、ちょっと魔がさして……面白がって追いかけてたら、爆発があって……あれは『愚か者の罠』だよなぁ。追い詰めてたつもりが誘導されてたんだ……体が動かなくなったら……追いかけてた娘がおっそろしく冷たい目で見下ろしてて……ひぃいいい！　魔女が！！魔女達が！！ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、もうしません！！魔がさしたんです！！もう二度としません！！しないから許してください！！（この後錯乱しインタビュー不能）」元ＰＫ Ａさんの証言。

ＰＫ狩りを始めたと思われるパーティに狩られた元ＰＫ、Ａさんの証言。これからＰＫ狩りを行ったのは複数の女性、それも美女ばかりと推測される。『愚か者の罠』が使われたことから補助魔法使いが含まれるパーティと思われる。

いったい彼らがナニをされたのかは大聖堂の復活の際完全修復されているのでうかがい知ることは出来なかった。だが、なんらかの精神的ダメージを与えるものであることは確かだ。（記者推測）

「仕様の抜け道などいくらでもあります。それらを踏まえたうえで、自治のための組織作りは急務だと思っております」

レオーネさんが椅子を直して座りました。

「たとえば“大転移”以降一番泥をかぶっているのは新人プレイヤー、低レベルの人達です。僕達古参のように財産を持たず、狩れるモンスターも多くありません。ＰＫにあえばあっけなく財産を奪われ、食べていくのにも困る人が多くいます。多くの古参の方はそれが分かっているからギルドで保護なさったり、個人の方で弟子として住居に住まわせたり、習得可能なレシピを譲って、やっていけるように支援してくださっております。しかしながらこのような救いの手から零れ落ちた新人プレイヤーさんも多くいます」

戦闘系なら『銀狼騎士団』生産系なら『Ｂ・スミス』を筆頭に多くの新人を引き受けてくれるギルドは多いです。助けられた新人さんが恩を返そうとして暴走することも多いようですが。

「先ほど他のタウンのことを言いましたが、すでにこのアルファでも似たようなことがおきております。一部のギルドが新人、低レベルのプレイヤーに対して虐待もしくは奴隷として扱っている事例があります」

「ＰＫ崩れのギルドのことだね。あたしも噂は聞いてるよ」

さすが蘭姐さんです。耳が早い。

「ＰＫ崩れ？」

「ＰＫやってたギルドが鞍替えしてんのさ。『東方記』や『ワイルドカード』怖さにＰＫはやめたけど、新人を餌食にすんのはやめなかったようだね。新人を甘い言葉で集めといて虐待しているらしいよ」

「おう、そういう話ならおいらも聞いたぜ。おいらが聞いたのは三つ四つだがよ、もっとありそうだぜ」

さすがオキナガさんも顔が広いですね。

「僕は『銀狼騎士団』経由で実際の被害者に話を聞く機会がありました。その実体は非常に惨いものです。彼らは会館にギルドホームがあるのですが、ゾーンの設定を弄り戦闘可能にしております。またシステムに不慣れな新人を一部監禁しております。そのなかで新人に対して暴力を振るっております。殴る蹴るの暴行を加え、瀕死になれば回復させ、再び瀕死になるまで暴行を加える。これを治療系魔法使いのＭＰが尽きるまで繰り返すとか、体罰のなかには『殺す』というものまであります。死亡した者は大聖殿で復活しますのでそこで待ち構えてギルドに連れ戻すことが常習化しております」

「なっ……」

「そこまで……」

ジョンさんやスリフさんも顔色を変えました。

「僕があった被害者は狩りで重症を負い、瀕死になったところを「回復させるＭＰがもったいない」という理由で幹部の一人であるところのパーティリーダーに止めを刺されたそうです」

「仲間を手にかけたのか！」

がんっとレオーネさんが机を叩きました。

「なんだ、そいつ！　そんなやつ、パーティ組む資格も、ギルドに入る資格もないぞ！」

ロビーさんが憤懣やるかたないといった様子で叫びました。

戦闘系のギルドさんはパーティの大事さはよくわかっておられます。パーティ内の信用と信頼、それなくしては機能しません。その信頼すべきメンバーがそのようなことをするというのが許せないのでしょう。

「だから――助けてください――ですか。クロウさん、あなたが助けたいのは彼らですか？」

公潤さんが尋ねました。僕の中にその答えがあります。

「彼らを含めた全員です。僕はある方に「もし――アルファのすべての低レベルプレイヤーを救いたいというのなら、より大きな組織

がいる。いくつものギルドを飲み込んだ――それこそ、アルファのプレイヤーすべてが参加するような大きな『なにか』」と言われました。ですので、それを造りたいのです。アルファ全てのプレイヤーが参加する大きななにか――自治組織です。全てのプレイヤーが参加し運営される組織。いままで誰もそれを言い出さなかったのは「誰かがなんとかしてくれる」という根拠のない思い込みがあったからではないのですか？　ならばあえて言いましょう。それは怠惰であると。自分達が動かねばなにも始まりません。ですので今回僕達が声をあげさせていただきました」

レオーネさんが手を上げました。

「ちょっといいか？」

「なんでしょう？」

「おれらが組織なんざ気にいらねえ、決められたことになんぞ従う義務はねえっつったらどうすんだ？」

にやりとレオーネさんが人の悪い笑いを浮かべました。

「そのときは我々が相手をすることになる」

ヴォルグさんが静かに言いました。無表情ですが――目がっっ！！　目が怖いです。吹雪です。ブリザードの幻影が！！

「おもしれぇ。おめえとはいっぺんやりあいたかったんだ。決めようじゃねえか、どっちが強いかをよ」

僕の気のせいでしょうか？

炎を背負った黒い獅子と吹雪を背負った銀の狼がにらみ合っている幻影がっっ！！

「おやめなさい。人を挟んでなにをやっているんですか」

間に挟まれた公潤さんが止めてくれました。この席順、ナイスですね。

「『黒獅子騎士団』のレオーネ対『銀狼騎士団』のヴォルグですか？　すごいですね、最強守護者決定戦ですね」

沖田さんが興味を隠さない様子で呟きました。

ええ、まあ、興味深いカードではあります。自分に害が及ばない

範囲内なら――ですが。
とりあえず手でサインを出してヴォルグさんを止めました。
変な方向に行きましたが、レオーネさんが言いたいのは、ある程度の規模の戦闘系ギルドが正面きって敵対して来た場合どうするかということでしょう。
実質的な戦力として『銀狼騎士団』が動いてくれるでしょうが、それは最後の手段だと思います。
「怖いですねえ。そうなると『ルナ』チェーンも下着屋もすべて営業停止し、戦いに備えないといけないと思います。お客さんには「『黒獅子騎士団』が戦いを仕掛けてきています。『黒獅子騎士団』が負けを認めるか、消滅、またはアルファから撤退しないと営業再開できません。それまでお待ちください」とおことわりするしかありませんね」
「ちょっと待てっっ!!」
レオーネさんが血相を変えました。
「なんでしょう?」
「なんで『ルナ』チェーンや下着屋の営業が止まる! あそこは『キノクニ屋』傘下のって――ああ!」
コロンくんがちょっと困った顔でさわやかに言いました。
「すいません、確かに店舗、人員、素材なんかは提供してますが、この件に関してうちは『ルナティック・ハッター』の支配下です~。いいなりです。営業停止しろと言われればやります」
「うちら『お茶会』もやで~」
ヒマ姐さんが付け加えました。
あ、レオーネさんがフリーズしました。ロビーさんもです。公潤さんは顔色ひとつ変えませんが。
生産系のギルドマスターさん一同もびくともしません。
予測済みですか? さすがですね。
沖田さんがさわやかに言いました。
「いやあ、衣食住っていいますけど、衣と食を押さえられましたか。

急所を押さえられちゃいましたね――下着だけに」
「うまいこと言ってんじゃねえ！　『東方記』の！」
レオーネさんが再起動しました。
いいえ、下着のなかに急所があるのは男性だけです。
「『ルナ』チェーンと下着屋が開店する前に戻るだけでしょう？
大手さんにとっては痛くも痒くもないでしょう」
大手さんほどの人数がいれば、ギルド内の生産業だけで自給自足できるはずです。
「痛いわ！　アルファ全部を敵に回すじゃないか！　というか、真っ先に身内に暗殺されるわ！」
「なにもそこまで……というか、もう少しメンバーを信用なさった方が――これまでの友情とか忠誠心とか」
ともに死線をさまよったもの同士の信頼とか。
「分かっているから、言ってんだ！　あいつなら――ギルドへの忠誠心よりメイドへの愛を取る！」
誰ですか、それ。
護衛としてついてきたグレイさんがそっと目頭を押さえました。
その目には光るものが――確実なものですか？　それ。
誰ですか？　それ。
蘭姐さんが煙管を弄びながら言いました。
「ボーヤたち、本当になにも気づいてなかったのかい？　手紙は『キノクニ屋』経由で着たろう。その時点で『キノクニ屋』が噛んでるのは確実じゃないか。『ルナ』って名前も自分達が黒幕ですって言ってんだよ？　一号店やそのほかの店にも『お茶会』や『銀狼騎士団』の有名メンバーが混じってたじゃないか。『ルナティック・ハッター』の手札は戦闘系最大大手の『銀狼騎士団』癒し系『お茶会』生産系『キノクニ屋』。潜在的に『ルナ』チェーンと下着屋の利用者ってことだね」
解説ありがとうございます。
『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』の皆さんが目に見えて

動揺しています。
「『ルナ』チェーンの味に慣れちまったもんが、もとの味なし食料アイテムに戻れるわけないじゃないか？　はっきり敵を目の前にぶら下げられたら、向かってくだろうねぇ。あたしんとこもたぶん参戦するよぉ。下のモンが騒いだら無視できないからねぇ」
『高雅楼』は別名生産系の皮をかぶった戦闘系ギルドと言われております。生産系の中小ギルドの代表として『ドラッカー』をお呼びし、それとバランスをとるため戦闘系中小ギルドの代表としてお呼びしました。
ですので戦闘を忌避するところではありません。
はっきり言って食べ物の恨みは怖いです。中小のギルドやらギルドに加入してない個人やら、戦争になったら味方してくれそうです。
大手ギルドさんはどうか分かりませんが。
とりあえずアルファの胃袋握らせてもらいました。にぎにぎ。
「冗談はこれくらいにして――」
「冗談か！　本当にいまのは冗談か！」
「いまのところは冗談にしておこうって話だろう？　いつでも実行可能みてぇだがな」
喚くレオーネさんをオキナガさんがなだめました。
「なぜ自治組織を作ることに反対なのか理解に苦しみます。これは聞いた話なんですが――トアル初心者が喰うにも困り僅かながらの金銭を得るため採取に出かけた帰り、運悪く五人のＰＫのパーティに見つかってしまったそうです。そのＰＫ達は瞬殺することもできたでしょうに、その運の悪い初心者を嬲るように痛めつけていたそうです。そして嬲るのにも飽きたＰＫがとうとう息の根をとめようとしたとき、偶然通りかかったプレイヤーがＰＫ達を『弱いものいじめしてんじゃねえよ、このカスども！　大聖殿で懺悔しやがれ！』との雄叫びとともにたった一人で瞬殺したそうです」
ほおお～と皆さんが感心したような声を出されました。とあるギルドをのぞいて。

「ということはそのプレイヤーは上級者ですね」
『ワイルドカード』の公潤さんが助けたプレイヤーを推理してました。もっとも心当たりがあるようで、唯一挙動不審なギルドの某マスターをチラっと見ました。
「でしょうね。六人ほどのパーティだったそうです。その初心者は動転していたのはそのうちの一人だけだったそうですが、手を下したてウィンドゥをひらくことも思いつかず、そのプレイヤーに礼をいい名前を聞いたそうなんですが『礼を言われるほどのことじゃねえ、ゴミ掃除しただけだ』とかっこいい台詞を残して名乗らず立ち去ったそうです」
「カッケー、ヒーローっぽい。ボクもやってみたいなー」
と『東方記』の沖田くんがおっしゃいました。散々やってるでしょう？　ＰＫ狩りの見回りやってるギルドなんですから。
「漢やね〜、義侠心のかたまりやわ」
パチパチとヒマ姐が拍手します。
天然ですね、ヒマ姐。正体に気づいてないでしょう。
「おうおう、漢だ」
オキナガさんが意味ありげな視線を某ギルドマスターに向けてニヤニヤしています。
「もっともかなり特徴のある人なので、探そうと思えばすぐにみつか——」
「ちょっ、待て、おまっ、それは、その、なんだ、その場の流れっていうか——ここにいる奴なら、おんなじことしただろうが！」
椅子を蹴倒して立ち上がったレオーネさんが首筋まで真っ赤になって叫びました。
語るにおちましたねー。というか、揃いの黒い鎧に黒獅子のエンブレム。鬣のような黒髪の大柄な重装甲の戦士で、そんな台詞を繰り出す人といえば——ぴんとくる人は多いです。
漢ですねー。
「ほー」

「へー」
「そうですね。あなたと同じことをする人は多いと思いますよ。名乗るかどうかは別として。このように慈悲深く義侠心に溢れた方々が人助けのための組織を否定するとは――」
レオーネさん撃沈。机に突っ伏してます。
人道的なことしたんですから、恥ずかしがらなくてもいいと思いますケド？　僕の情報網を舐めないでください。
「あたしらはとっくにこの子達に首根っこつかまってんだ。あたしはあんた達が建国宣言でもするんじゃないかとひやひやしてたんだよ。自治組織を作ろうってのは、真っ当だねぇ。検討の余地はあるよぉ」
「ですけど、実際自治組織を作ったとして、どれだけの人が参加してくれるでしょうか？　また作ったルールに違反したとして、どんなペナルティを科すつもりですか？　牢屋はいちおう存在しますが、この世界ではそんなものは無意味です」
そのとおりです。この世界において牢屋はいくらでも出るための裏業があります。ルールを決めても罰がないのでは抑止力にはなりえないと公潤さんは言いたいのでしょう。
「それに関しては――ああ、ちょっと待ってください。念話がきました」
同時に『銀狼騎士団』『お茶会』『キノクニ屋』にも念話がきているはずです。

怠惰（スロウス）の告発（後書き）

仲間に断言されてしまうあの人って……信頼と友情よりメイドへの（一方的な）愛をとるか！！本当にそうなのかっっ！！

レオーネさんは悪い人じゃあないようです。さあ、みんなで褒め殺し！！

その日の朝は『音楽隊』に所属させられている低レベルのプレイヤー達にとって運命の日だった。朝早く目を覚ましたもの、眠れず朝を迎えてしまったものもいる。
眠れなかった吟遊詩人の少女は枕を抱えていた。少女は怖かった――自身はそうではないが、仲間のうち何人かは幹部に見せしめとして殺されたことがある。自分でなくとも身近な人間が目の前で殺されれば――たとえ生き返るとしても――恐怖する。心の中に刷り込まれた「幹部は人を殺すことをなんとも思っていない」という恐怖が心を縛る。実際自分を殺すときも眉ひとつ動かさないだろう。
虫けらを殺すときのように。
失敗したら間違いなく殺される。殺されても大聖殿で復活し連れ戻される。
怖い。ただただ恐ろしい。
「決行日だ。みんな、用意はいいか？」
何度も死んだことがあるはずのダイが皆に言う。彼は勇気がある。彼一人なら『音楽隊』を抜ける機会があった。他のギルドに駆け込めば一人だけならなんとでもなった。なのにダイはこの地獄に戻ってきた。
皆で助かるために。
外で助けてくれる人達をみつけ、皆を説得し、連絡を取って少しずつ準備を整えた。
自分はそれほど強くない。
「………大丈夫かな……助かるかな？　あたし達……」
弱気が言葉となって零れ落ちた。
「大丈夫だよ。鈴鈴（りんれい）、何度も話したろう『銀狼騎士団』がついてるし、『ルナティック・ハッター』のクロウさんは頭いいんだ」
『銀狼騎士団』といえば『クリエイト・ミレニアム』がゲームだ

ったころから駆け出しでも一度は聞いたことのある有名な大きいギルドだ。その名を聞いたとき男の子達はずいぶん勇気付けられたようだった。そんなところに助けてもらえるなんてすごいと思う。『ルナティック・ハッター』なんて聞いたこともないギルドだったけど、ダイ経由で話をきいてもらったり、作戦を聞いたりしてみたら、ずいぶんと頭のいい人のようだった。初心者一人一人にレベルとできることを聞き、それぞれの役目をふっていた。

「俺たちがやらなきゃならないのは、ここから出ることだけだ。あとはあの人達がなんとかしてくれる。がんばろう」

「……うん……うん……」

『音楽隊』に所属させられている初心者や低レベルのプレイヤーは三十四名。粗末な朝食が終われば自分達のレベルでは無理な狩場に連れて行かれるものも多いが、一部の女子や一桁のレベルのプレイヤーはさすがに連れていけない。ギルドホームの設定で出て行くことを禁じておいてホームの中で生産職としてこき使われる。

ダイやその双子の弟サムが遠征のため別室へ出て行ったとほぼ同時に、それは部屋に残された初心者プレイヤー達の前に現れた――"幻卯"というモンスターだということはあとで知る。

それは一言で言えば小型の兎か、耳の長い鼠のように見えた――元の世界だったら『可愛いっ！』と抱きしめてしまいたくなる真っ白なもふもふが人の言葉を発した。

『やあ、お嬢さん方。話は聞いているだろう。僕はアマクサ。こっちのグループの案内人だ』

「…………うさぎがしゃべった……」

部屋に残された十一人の初心者は呆然とした。

『たんなる憑依術だよ。僕は召喚師だ。召喚師の高レベルの術のなかに自分の召喚したものの意識に憑依する術がある。これは"幻卯"といってどこにでも忍び込める特性のある幻獣なんだ。幻術も使えるしね』

ぴょんっと真っ白なうさぎがはねた。

『さあ、急ぎたまえ。時間がないぞ。僕が幻術で通路を作るから――』
「待って、あたし達は設定で出るのを禁止されているの」
『――失礼。君達はシステムに疎かったな。全員ウィンドゥを呼び出したまえ』
言われるままに脳内にウィンドゥを呼び出した。
『“ギルド”の項目をクリック』
ギルドという項目を“クリック”したと意識したとたん新たなウィンドゥがひらいた。
『ホームの項目クリック。後に禁止リストクリック』
確かにホームという文字があり、そこをひらくと禁止リストという項目があり、そこにはいくつもの名前が並んでいた。
『自分の名前をクリックして、出た項目から解除を選択』
確かに自分の名前があり、出の文字が赤く点っていた。クリックするといくつもの文字が出てその中の解除をクリックするとリストから名前自体が消えた。
『はい。それで出られるよ』
『えっっ！！』
初心者達が絶句した。
「こ、これだけ？　これだけでもう出られるの！」
『そうだよ。ギルドホームの設定はギルドのメンバーであれば誰でも変更が可能なんだよ。君達もれっきとした『音楽隊』のメンバーだろう？』
がっくりと鈴鈴は膝をついた。
「あ、あたし達はいままで……たったそんなことで……」
「ばかだ……おれ達ばかだ……」
打ちひしがれるのも仕方ない。自分達を縛る強固な鎖だと思い込んでいたものが、実はちょっと引っ張るだけで千切れる紙縒り程度のものでしかなかったのだから。
とはいえ、ゲームを始めたばかりでギルド未加入だった彼らを責

めることはできない。購入時くらいしか丁寧に仕様を教えてくれるところはない。誰かに教えられなければ気づき難いものだ。
『音楽隊』はそこにつけこんだのだろう。
『さあ、時間がないよ。急いで、急いで。遅れるよ』
「……なんだかついていったら不思議の国に連れて行かれそうだわ」
遅れると急かすアマクサ兎に変なものを想像してしまった。チョッキも懐中時計もないが、某有名なお話を思い出させる。
「もうここは〝不思議の世界〟よ。いきましょう。ここから出るの」
鈴鈴は立ち上がった。自分達を縛っていると思い込んでいたものが、簡単に取り除ける幻だったことから恐怖自体を振り切れたらしい。
『両側に壁とそっくりの幻を立ててある細い一人分の幅しかない通路だけど、そこを通れば見咎められないはずだ。扉までいって触ればいい。さあ、行こう』
鈴鈴は頷き、勇気を振り絞った。
さあ、行こう。自分達にできることをやらなければ明日はない。たかが扉に触るだけだ。たとえ殺されても大聖殿に行くだけ。ギルドホームから出られれば自分達の勝ちだ。
鈴鈴は勇気ある先陣を切った。

別室で遠征の準備をしていたダイの脳裏に南からの念話が入った。声も立てず通話状態にする。
『南だ。少年、監禁されていた十一人が無事脱出した。次は君たちだ。なんとしてもギルドホームから脱出したまえ。アマクサが戻って君たちを援護する。万が一死んでも大聖殿には〝鉄壁〟の二つ名を持つジュネという守護者をはじめ数人の仲間が待機している。安心して行動を起こしてくれたまえ』
ダイはこっそり返事をした。
幸いパーティリーダーの盗賊は席をはずしている。ご丁寧に会館前に整列しておけと言って。

「みんな、俺達の番だ。さあ、行こう」

なんと言うこともない号令だったが、その言葉の意味を残りの仲間は知っていた。青い——それでも覚悟を決めた顔で頷いた。

先頭にスピードのある盗剣士と盗賊。両側に戦士系、真ん中に魔術師系とレベルの低い仲間。しんがりはサムとダイがつとめた。悟られないよう気持ちを抑え、それでも心持ち早足に扉を目指す。

扉が見えた——と思ったところで怒声が響いた。

「大変だ！　監禁していたやつらがいない！　消えた！」

ばれた！　そう思ったときには全員走っていた。

「なんだ、お前ら！」

「“炎の壁”」

「“煙幕”」

「“闇の領域”」

「“幻影”」

仲間の魔術師が次々に廊下に続く扉に魔法をかける。これは足止めに過ぎない。魔術師が魔法をかけるために必要な目視をさせないためだ。ディスペルされれば消えるし、幹部たちが力ずくで突破することも可能だ。だがその時間が必要なのだ。

スピードのある軽戦士系が扉にたどり着くが、そのまま外に出るのではなく仲間のため扉を確保する。弓などの武器で幹部を牽制する。ＨＰの多い重戦士が周りを固め低レベル、魔術師などのＨＰの少ない仲間を優先して逃がす。

「ふざけたことしやがって！　殺されてえのか！」

「ウォークライ」

軽戦士系の幹部——たぶん盗賊が仲間に飛びかかろうとしたのを、守護者の仲間が自分に攻撃を集中させるスキルを使いひきつけた。

小刀に近いサバイバルナイフの攻撃を盾で受け止める。

「逃げろ！　いまのうちに早く！」

「この！」

横合いからの初心者の騎士の攻撃をかわして盗賊が後に飛びのい

た。それを弓が追う。
魔術師系が逃げ切れば装備で劣る軽戦士が逃げる。仲間は少なくなっていくのに、敵は増えていく。だが、いつの間にかそっくりな幻影が現れ幹部にそれを悟らせない。
（早く、早く！　ここから出さえすれば）
仲間が傷つき始めた。やはりレベルが違いすぎる。それでもいつの間にか戻ってきたアマクサの幻惑により魔法攻撃を受けないですんでいるのはありがたい。何よりもギルドに戻るときこっそり持たせてくれた異次元バックのなかの装備――彼らにしたら間に合わせでかき集めたもの（『お茶会』の倉庫に眠っていたり、個人が昔使っていた低レベル用の装備）らしいが――がかなり役に立っている。弓やら鎧、盾、それまでの装備と比べれば天と地の差だ。
なかには魔術師の術の指南書や戦士系の技のレシピ（レシピ）まであった。その場にいた人から提供してもらったものをクロウがレシピにしてくれたのだ。脱出にあたり初心者の実力の底上げをして成功率を増やすためだ。そのため初心者たちはいままでとは比べ物にならないほど充実している。
たった一人残った治療系であるサムが必死に治療魔法やダメージ軽減魔法を使っていた。
重戦士系の撤退も始まり、なんとか切り抜けられそうだと思ったのが隙になったらしい。盗賊の一人に捕まった。
「てめえが首謀者か！」
「兄ちゃん、危ない！」
サムはとっさにこっそりダイが渡してくれた異次元鞘から「身代わりの人形」を取り出した――
「身代わり！」
身代わりの人形　法師の術「身代わり」に必要なアイテム。指定された人物のダメージを耐久力分引き受ける。人形のランクによって引き受けられるダメージの量がかわる。ダメージが耐久力を超えると壊れる。指定できるのはパーティメンバーかギルドメンバー。

ダガーでぐさりと「身代わりの人形」をさす。
ただし術を施した「身代わり人形」が攻撃されると指定された人物にダメージがいくので取り扱い注意。

「ぐあああ」
盗賊が突然胸を押さえて苦しみ、サムが「身代わりの人形」を滅多刺しにした。
「て、てめえ！」
「身代わりの人形」ダガーでぐさり。とうとう人形は壊れた。しめて３０００ダメージ。防御点では軽減できません。
「ぐあ！」
「やあ！」
大ダメージを負った盗賊をダイの一撃が沈めた（瀕死）。
「まさか防御技がこんな使い方できると思わなかったね～」
使用方法クロウ指導。特殊な場合により応用はききません。
「サ、サムが染まっていく……」
ナゼだろう、窮地を救われたのに涙が出てくる。
「兄ちゃん、ぼく達で最後だよ」
「よし！　いくぞ、サム」
「うん！」
二人は扉に向かって飛び込んだ。

ギルドホームからでるにはゲームの仕様では扉の形をしたオブジェクトに触れれば場所移動のイベントが起きる。ギルドホームというゾーンから会館の決められた扉の前の位置へ移動している。現実世界となった『クリエイト・ミレニアム』でもそれはかわらない。扉に触れれば会館内の決められた位置にテレポートしているわけだ。
ダイとサムはもつれるように所定の廊下に出現した。勢いあまっ

て転がるように廊下に倒れた。
「うわ！」
「痛っ！」
二人が出現してすぐ出現地点に人影が現れた。パーティリーダーを任されていた盗賊だ、新人を追いかけてきたのだろう。盗賊は二人に掴みかかろうとして――黒髪の奇麗な女性が飛び込んできて思いっきりメイス――鋭い棘つき――でそれを殴り飛ばした。殴り飛ばされた盗賊は扉に触れて『音楽隊』のギルドホームに転送された。
ダイの強化された動体視力は見た――メイスは見事に顔面をジャストミートし――盗賊の顔面は棘つきメイスの一撃でモノスゴイことになった。

未成年の視聴には配慮が要ります。モザイクかけてください。

「よくやった少年」
黒髪を邪魔にならぬようきっちりと結い上げた背の高い鎧姿の女性はイイ笑顔で少年たちをねぎらった。見とれそうなほど晴れやかな笑顔だった――その手にある血塗れのメイスさえ見なければ。
少年たちは芯から凍りついた。
美人なのにおっかない。
幻卯に憑依したアマクサがしゃべった。
『この二人で最後だ。大した度胸だよ、しんがりを守ってくれたんだ』
「あとは任せろ。必ず後悔させてやる」
女性――南は爽やかな笑顔で言い切った。その間も後ではガツン、ガツンと轟音が響く。よく見れば『音楽隊』の扉をはさんで揃いの鎧の男達が二列に並び出現する『音楽隊』幹部を叩きのめしている。棘つきメイスで――殴っては次に交替して列の後に並ぶ。
「さあ、こっちに。あんまり見ないほうがいいよ。立てる？　ぼくは『お茶会』のリュウタ。ギルド脱退手続き――の前に怪我治して

おこうか」

　二人よりも少し背の高い少年がそばにいた回復職らしい少女に声をかけようとした。サムは慌てていった。

「あ、ぼく治せます。法師ですから」

「じゃあ、治したら脱退手続きしちゃおう。そのあとは風呂と食べ物の用意がしてあるよ。『お茶会』のギルドホームにおいで」

　こうして『音楽隊』の新人は全員保護されたのだった。

「いいか、打撃武器の場合『手加減』の項目がある！　これを選んでおけば瀕死でもＨＰが残る。遠慮はいらん、選択後、叩いて叩いて叩きまくれ！」

　それ、手加減になってません。と保護された少年達とリュウタは思った。

『アイ・マム』

　『銀狼騎士団』メンバーが奇麗に声をそろえた。

　ゴツン。ガツン。

「相手が魔術師であってもゾーン移動直後ならば魔法に必須である目視ができず魔法を使われる恐れはない。躊躇すればこちらがやられる、相手の体制が整う前に叩け！」

『アイ・マム』

　一撃でギルドホームに叩き返されるものはまだましだった。下手に残るとタコ殴りにされてからホームへ続く扉（オブジェクト）へ投げ返される。

　ゴガッ！　ドゴン！

「相手には回復職がいる。瀕死でも生きてさえいれば治る。『手加減』さえすればいくら叩いてもいいぞ」

『アイ・マム』

　それはそれで、酷いと少年達は思った。瀕死になっても回復させられ、出ようとするたびまた瀕死にされるのだ。ある意味生き地獄ではないだろうか？

　ドカッ！　バキ！

「外道にかける情け無し！」

『外道にかける情け無し！』
本当にない。欠片さえもない。あるべき理由が見当たらない。
戦術指導クロウ・リーというのは極秘にするべきことだろう。
「あれ？　なんで戦闘できるんだ？」
ふとダイは疑問に思った。タウンは戦闘できないはずである。掴みかかる、押すといった行動はギリギリセーフだが、殴るなどの行為は完全にアウトのはずなのだ。
「こちらウサギ1。羊はすべて救出。このまま保護します。狼はもぐら叩き中。このまま足止めのもぐら叩きを続けます」

ギルド『かわらばん屋』の記事より抜粋。近隣のギルド某Aさんの証言。

「いやあ、あそこは前々から悪い噂がありましたから。ときたまメンバーとすれ違うこともあったんだけど新人らしい子が死んだような目してて。心配はしていたんですよ。虐待してんじゃないかと。え？　あの日のこと？　それはもう、因果応報ってゆーんですか？
悪人は地獄で金棒持った鬼に追い掛け回されるっていうじゃないですか、あんな感じで、ガンガンとね（笑）」

その日地域限定で地獄の釜のふたが開いた。

因果応報　正義の鉄槌（後書き）

出会ってもいないのに黒感染したサムくん。大丈夫なんでしょうか？
アマクサ活躍。ウサギだけど。

「はい。全員保護？　それは何より。死者は？　いませんか。では大聖殿のジュ姐の別働隊に連絡をお願いします」
「ご苦労。引き続きもぐらの足止めを頼む。以上だ」
「全員無事やったん？　よかったわぁ〜。手続き終わった？　うん、それやったらあとの世話は頼んだで。うん、ほな」
「あーそれはなにより。そんじゃあとはおいしいもの食べさせてゆっくり休ませてあげられるようにね、じゃあこっちはまだ会議中だから」
　僕らは念話を打ち切って皆さんに向かいました。
「申し訳ありません。さる作戦を同時進行中だったもので」
「…………………なにをした“黒の錬金術師”」
　その安易な二つ名嫌いなんですけど。
「聞き捨てできない単語があったような」
「先ほどご報告したＰＫ崩れの悪徳ギルドより初心者プレイヤーを救出いたしました」
「は？」
　蘭姐さんが煙管を落としました。
「なんだって？」
　オキナガさんが尋ねましたので正直にお答えしましょう。
「件の被害者プレイヤーから助けを求められましたので、示し合わせて三十四名の被害者がギルドホームより脱走、『銀狼騎士団』が足止めをしている間に件のギルドからの脱退手続きをし『お茶会』のギルドホームへ保護しました。『ルナティック・ハッター』『銀狼騎士団』『お茶会』『キノクニ屋』四つのギルドによる合同作戦です。実力行使も多少させていただきましたが無事目的は達成されました」
　感心するような声があちこちで漏れました。しかし、公潤さんが

顔色を変えました。
「ちょっと待ってください！　実力行使とおっしゃいましたね！　あなたはなにをしたんですか！」
会館内で戦闘行為はできないはずです！　あなたはなにをしたんですか！」
むっ、さすが『ワイルドカード』の公潤さん、そこを突いてきますか。
「会館を買い取りました。作戦に必要だったもので。戦闘禁止設定を解除しましたので、現在会館では戦闘可能です」

空気が凍りついたかのようです。誰もなにも言いません。身じろぎひとつせず皆さん僕を凝視しております。
どうしました、皆さん？
「買った？」
呆けたような表情のままジョンさんがおっしゃいました。
「はい」
「会館を？」
スリフさんが魂が抜けたような――以下略。
「はい」
「どっからそんな金出した！」
ロビーさんがレオーネさんばりに叫びました。
僕は満面の笑みでお答えします。
「『ルナ』チェーンならびに『キノクニ屋』傘下下着屋の従業員一同に成り代わりご挨拶させていただきます。日ごろの御愛顧ありがとうございます。皆様からの収益金は社会福祉のため使わせていただいております」
「それかっっ！！」
レオーネさんが叫びました。沖田くんが苦笑いしました。
「あ〜それは買えますね。いやあ、衣食に続いて住まで抑えられましたね。まいったなぁ」
老師がくっと目頭を押さえました。

「まさか本当に下着で天下をとることににゃろうとは思いませにゃんだ」
老師の目に光るものがっ！
老師、『ルナ』チェーンの収益金も使っております。決して下着で天下をとったわけではございません。

そのころ『銀狼騎士団』の南率いる一団は社会福祉に励んでいた。
「ゴラァ！　どうした！　もう打ち止めかぁ！」
「どうした、どうした！　弱いものにしか威張れねえのか！　チョーシこいてんじゃねぇぞ！　弱虫どもめ！」
「出てこーい！　こんなもんじゃすまねぇぞ、ゴラァ！　てめえらが初心者にした分、返してやんぜ！」
「天にかわって成敗してやるぜ！」
「オラオラオラオラオラオラオラオラ！」
何事かと遠まわしに囲む野次馬の中で『音楽隊』のギルドホームの前で挑発的な罵声を浴びせかける。
「でてきませんね」
「うむ。さすがに出て行けば殴られることを学習したか」
少し前からギルドホームから『音楽隊』の幹部が出てこなくなった。
無理もない。新人を追いかけていったものがボコボコになって帰ってくるのだから。さすがに何かが待ち構えていることに気づいたのだろう。
「今頃ギルドホームのなかで脅えているだろうよ」
くっくっくっくっと南が笑った。
もともと『音楽隊』は十二人、二パーティほどの元ＰＫギルドが名前を変えたものだ。それが三十余名の初心者を救済を装って拾い、暴力と恐怖で押さえつけていたのだ。レベルにしても１００までいっているものは四人ほど。あとは五十、四十の中堅レベルだ。カンスト組でそろえたもぐら叩き隊に敵うはずがない。

自分達になにが起きているのかどこまで理解できているかわからないが、暴力と恐怖、罪もない初心者にしてきたことを味わうがいい。
「どうします？　ここで騒いでもどうせ中にはきこえないでしょう」
「かまわん。このままもぐら叩きを続けろ。これは見せしめでもある」
　ＰＫ崩れの悪徳ギルドはひとつではないと聞く。それらには横の繋がりがあるという。ならば『音楽隊』のこのざまを見れば“次は自分達かもしれない”と恐れ戦くだろう。
　人ごみにまぎれてこれを見ている元ＰＫが念話で『音楽隊』の幹部に状況を教えれば――さぞや絶望に沈むであろう。
「大聖殿やタウン入り口はどうなっている？」
「は、大聖殿のジュネ組からはなにも。入り口の帰還呪文出現場所を見張っているキノクニ屋組からもまだ『音楽隊』幹部出現はないと聞きました」
「うむ。まだウラ技に気づいていないだけかも知れん。警戒を怠るな」
　ギルドホームから脱出の手段はある。牢屋からの脱出と同じで帰還呪文を使うか、死んで大聖殿に行けばいいのだ。大聖殿に一隊を配置したのも、万が一の新人組み保護と、うっかり死亡させてしまったりウラ技で脱出した幹部連を警戒してのことだ。
　ギルドを抜けた初心者たちが大手を振って生活していくためにも自治組織の成立が必要だった。南の役目はそれまでの足止めと、思い知らせることだった。
「くくくくく、骨の髄まで恐怖するがいい。付回しなど起こす気もなくなるまで心をへし折ってくれるわ」
　その笑顔は仲間が引くほど恐ろしかった。ボルックは心の中で呟いた。
（さすが“恐怖の女王”の二つ名は伊達じゃねえ）

「んな生易しいもんじゃねえぜ、『東方記』の。生命線握られちまったようなもんさ」

オキナガさん、そんなおおげさな。

「といいますと？」

「設定の決定権握ってるってのはなぁ、出入り禁止にもできるってこった。ああ、これが『ワイルドカード』のの質問の答えか」

「そういうことになります」

察しのよろしい方が多いので助かります。

「出入り禁止……ギルドホームが使えなくなりますね」

沖田くんが首を傾げて少し考えてから言いました。なんでそんなに愛らしいんですか？

ギルドホーム自体は使えますが、外と繋がる会館に入れないのでは出られなくなります。何らかの手段で出た場合、今度は入れなくなります。

「やだね、もっと深刻さぁ。会館の機能を考えな。貸し金庫に銀行、各種手続きの窓口が全部会館にあるんだよ？　なんにもできなくなるってことさね」

蘭姐さんが頭をかきました。

「マーケットも使用できなくなるな。出品窓口は会館だ。買い取り窓口も会館だから、アイテムの換金さえできなくなる」

ジョンさんは商人だけにそっちの方が気になるようです。

基本的に冒険者の生活はモンスターを狩ったり各種クエストで得たアイテムを換金、または加工してマーケットに流すことで成り立っております。クエストの場合現金の報酬もありますが。狩りに赴く場合は余分な現金、アイテムなどを会館の貸し金庫に預けることがスタンダードとなっております。持ち歩けるアイテムの量はある程度きまっておりますので、ドロップ品を入れる場所の確保と万が一の死亡に備えてのことです。

こうしてみると会館がずいぶん生活の基本に関わっています。

「住居は買えない。銀行、貸し金庫は使えなくなる。アイテムの換

金も不可。これでやっていけるわけがない！　ルナチェーンと下着屋は人心掌握と資金調達をかねていたわけだな」
正解です。弱みとはつくためにあるのです。
「……これが〝黒の錬金術師〟か……礼を言うぞ沖田……確かに聞いておかなければ後悔する……黒い……」
ロビーさんが呻きました。
人聞きの悪いことを。
黒くないです。風評被害です。
「なにもできなくなるって、そこまで酷くないですよ。ギルドハウス、ギルドキャッスルをお持ちのギルドなら住むところはあるじゃないですか。店舗をお持ちならマーケットに出品できなくともかまいませんでしょう？　あと、マーケットの出品はできませんけど、マーケットでの買い物はできますよ」
ギルドホームを使うのは構成員が10人から100人までの中小のギルドが一番多いです。ギルドに所属していない個人のプレイヤー、または10人に満たないギルドは宿屋を拠点にする場合が多いです。
工房、または店舗（両方ある場合もあり）に住居が付いているギルドハウスは個人から80人まで対応できるものがあります。
ギルドキャッスル、領地などは200人から1000人までのランクがあったりします。
ギルドホームが使えなくて困るのは中小のギルドさんぐらいです。
「銀行が使えないだろう？　月々の家賃は引き落としになってるけど、口座残金がつきれば追い出されるじゃないか。買い取りの手続きもできなくなるし」
「宿屋という手段もあります。宿屋の金庫にアイテムとかお金とか預けれるじゃないですか」
宿屋の部屋には会館とは別口の金庫があります。ここにアイテムや現金をしまっておけます。会館のないタウン以外の場所と同じ仕様なので。

「限度があるし、アイテムの換金ができなきゃ手持ちがつきるよ」
「プレイヤーに買い取ってもらえばいいじゃないですか」
「買い叩かれるわっっ！！」
「え〜でも、出入り禁止になっても、やっていけることはやっていけるでしょう？」
「そこまで根性ある人、滅多にいません」
沖田くんが満面の笑みでこたえました。
そうですか？　それほど困難とは思えませんけど。まあ、そこまで重く見てくれるのなら交渉はできるでしょう。
「僕が言うのもなんですが、これほどの強権を個人、または一ギルドに持たせるのは大変危険だと思いませんか？」
皆さん力の限り頷きました。なぜ『銀狼騎士団』『キノクニ屋』『お茶会』の方々まで頷くのでしょうか？
………………釈然としないものを感じますが、まあいいでしょう。
「たまたま必要なので買い取りましたが――」
「たまたまで買うな！」
ごもっともです。
「民主主義に従って、法と秩序をもたらし人権を保障してくださる自治組織があれば、この権利を譲渡いたします」
「――組織を創らざるを得ない状況を作り出したというわけですか……」
「理ずくめ、情ずくめ、最後は力ずくかよ、恐ろしいやつだぜ」
人聞きの悪いことを。
状況を作ったのは確かですけど、僕のような非力で無力な一補助魔法使いを恐れる必要はどこにもありません。
恐ろしくないですよ。
「そうそう、もうひとつ。この人権は『コモン』にも適用するべきです」
「『コモン』ですか？」
「ありゃあ、ＮＰＣだろうが」

異論があちこちで囁かれております。

「僕達『ルナティック・ハッター』は領地システムを使っております。そのため領地で『コモン』と接する機会がおおいのですが――会議を始める前に飲み物を配らさせていただきましたが、給仕をした男女を覚えておられますか？」

僕が聞くとレオーネさん達『黒獅子騎士団』がこたえました。

「ああ、ありゃあルナ一号店の店員だろう？」

「アリスちゃん」

「ああ、あれもルナチェーンが関わっているというアピールですか」

「彼らは僕らの領地で執事とメイドをしてくれている『コモン』です」

その瞬間、今までで一番その場がどよめきました。

「本物のメイドかっっ！！」

ツッコむのはそこですか？

「どうでした？　彼らには『ルナ』で働いてもらいました。ご贔屓にしてくださる方もいたようです（おれ達じゃねえ！　神威のやろうだ！　という声が聞こえたような気がしますが、空耳ですね）が、区別がつきましたか？　我々とどこが違います？　職務に忠実ではありますが、泣き笑う、感情も思考もある。我々とどこも代わりません。“大転移”以降もはや彼らは“人形”ではありません。人として扱うべきです」

「その点は『キノクニ屋』からも主張させてもらいますよぉ。うちも『コモン』との付き合い多いんで。『コモン』との付き合いは本気で人と人の付き合いだと思って欲しいっす。もうクエストのためのフラグでもプレイヤーを助けるためのお助けアイテムでもないっすよ。ちゃんと人格があるんす。彼らを蔑ろにはして欲しくないっす」

コロンくんが堂々と主張しました。

「彼らがいないとアルファはタウンとしての機能を失うといってもいいんすよ。人権認めましょうよ」

「機能を失うとは？」
「まず、会館の機能全てですね。それと流通です。思い出してください。我々プレイヤーが〝大転移〟で絶望しやる気をなくしても最低限の食料、物資は流れていたでしょう？　あれは『コモン』の方々あってのことです。ここまで世話になっておいて、人権を認めないとはいいませんよね？」
アルファは消費型の都市です。領地システムができてから多少は自分達で食料を生産するようになりましたが、微々たる物です。ルナチェーンの仕入れも『コモン』の村々を『キノクニ屋』が回ってくれたから間に合ったようなものです。
そのためにも『コモン』との付き合いをちゃんとする必要があります。
ざわめきが小さくなってきました。
「ではスリフさんの質問に答えさせていただきます」
「え？」
スリフさんがきょとんとした顔をなさいました。お忘れですか？
「それはなにかのクエストですか？」と聞いたのはあなたですが。
「クエストです。内容は自治組織を作りアルファに法による治安をもたらし、この世界での生活を助け合うこと。報酬は住み心地。さあ、このクエスト受けますか？」
しばらく皆さん無言でした。
口火を切ったのは公潤さんでした。
「法と秩序をもたらすためであれば、我々『ワイルドカード』は尽力を惜しみません。同意いたします。そのクエスト受けましょう」
「『東方記』も同意します！　市中見回り名乗ってもいいですか？」
マニアですね。
「見回りの中心は戦闘可能区域のタウン外になるのではないでしょうか？　それに新撰組系列はともかく幕臣および薩長土組はあまりいい顔はしないのでは？」

皆さんいろいろこだわりがあると思います。

「そうか〜。残念。あ、でも受けます。参加します」

………………もとから秩序を尊ぶ二つのギルドの参加が決定しました。

「うちが参加しないわけにはいかんだろう？　なんせ人数だけなら一番あるからな。『B・スミス』も受けるぜ」

「時流に乗り遅れるわけにはいきませんね。『フェアリーリング』も参加します」

レオーネさんが出方を探るようにヴォルグさんを見ました。

「我々『銀狼騎士団』と『キノクニ屋』『お茶会』はもとから同意している。『銀狼騎士団』と『キノクニ屋』の名前が主催者にないのはギルド間のパワーバランスを慮ってのことだ」

「そや、『お茶会』も主催しとるんやで」

「下準備では『キノクニ屋(うち)』が主役やらせてもらってました。いやークエストの主戦力っていいですねー」

「……ここで断りゃあうちが悪役じゃねえか。『黒獅子騎士団』参加だ」

「自由ってのがうちのポリシーだがよ、自由とわがままは違うってのはわかるぜ。『グリーン・フラッグ』参加だ、参加」

「ここまでしといて選択の余地なんてあると思うかい？　あたしらを呼んだのは、小さいギルドにも参加を促すためだろう？　いいよ、その役目引き受けようじゃないか。『高雅楼』自治組織に参加するよ。他んとこを口説いてやろうじゃないか」

「おめえに口説かれたら入るもんも逃げるぜ。その役目、おいらんとこが引き受けるよ。『ドラッカー』そのクエスト引き受けた」

「ありがとうございます。これにて自治組織結成ですね。では、それを記念して僕からいくつかのプレゼントがございます」

自治組織成立（後書き）

“恐怖の女王”様・降・臨・コワイコワイコワイコワイ

グリーン・フラッグ島流し事情

グリーン・フラッグで運悪くデルタに遠征中だった部隊は仕方なくデルタのギルドキャッスルで生活。日々悪化するデルタの治安と強力なモンスターに対して自衛中。まとまって動いて危険を避けています。

比較的レベルの低い（アルファならばかなり高レベルに当たる）狩場で狩をして会館の貸し金庫に預け本隊に換金してもらってます。貸し金庫経由で差し入れられるルナチェーンの食事が心の支えです。海パンも貸し金庫経由で差し入れられてます。

グリーン・フラッグのキャッスルは二つとも200～400人対応。

「ギルマス～、アルファで暮らしたいです～。飯がうまいし」

「もう少しがんばれ、なんとか方法を考えるからな」

「プレゼント――ですか？」
皆さん（『銀狼騎士団』『お茶会』『キノクニ屋』のぞく）がなにかと身構えたようでした。
警戒しなくてもいいのに。皆さんにも損のないお話ですよ？
「生活改善のための情報をいくつか――まずは味のある食事の作り方を公開しましょう」
おおおーとあたりがどよめきました。
「いいのかい？　あんたらのアドバンテージのひとつだろう？」
「かまいません。今回のことがなければとうに公開しておりました。それに――アルファ全てに供給するのはさすがにしんどいです」
うんうんと『銀狼騎士団』『キノクニ屋』『お茶会』のメンバーが頷きました。ハードでしたものね。
「下着屋で扱っていた下着――ミセブラ、ミセパン、海パンのレシピも希望者に提供しようじゃありませんか」
『いいのか！』
生産系ギルドの方々の目の色が変わりました。商売人ですねー。
「はい。お祝いですから」
というか、老師からの希望です。他でも作ってください。老師がグレます。
これを期に『ルナティック・ハッター』『お茶会』『銀狼騎士団』はルナチェーン、下着屋から手を引きます。収益金の残りは山分けしますが。
生産量というか、作れる量が激減します。他のギルドさん達にも作ってもらわないとアルファの人々が黙っていないでしょう。
店自体は名前を変え『キノクニ屋』で継続して運営しますが、値段は適正価格まで下がるでしょう。
もう暴利を貪る必要はないので。

「さて、最初はなぜこの世界の食べ物は“味のないもの”と“味のあるもの”があるのか――という疑問からでした。ご存知のように“大転移”以降、食事に味がなく泣かされていたプレイヤーさんは多いと思います」
うんうんと頷く人はかなりいました。
「しかしながら、実は一部の食品――加工品には味があったのです。この事実は『キノクニ屋』のコロンくんが確認しております。我が領地『陽だまり村』の乳製品、果実酒などもそうでした。我々の製品とそうでない製品との違いはなんなのか。考えたどり着いた答えは製法でした。思い出してください。自分でゲームを作ったことのある人ならばお分かりでしょうが、ゲームでの加工は本来の意味の加工ではありません」
「そうか！　加工のイベントエディタは喪失と入手！　すり替えか！」
さすがに公潤さんには分かったようです。
「え、なに？　分かったん？　うち、説明されてもよう分からんかったんよ。どういうことなん？　教えて」
ヒマ姐に乞われて少し照れたような顔をした公潤さんが説明しました。
「つまりですね、ゲームでの行動はイベントなのですよ。予めプログラムされたイベント。そのなかで“加工”というイベントは素材――Aとしましょう。出来上がった商品をBとします。Aを失うというイベントとBを得るというイベントが起きるものです。Aに手を加えてBにするのではなく、AとBを取り替えるわけです」
公潤さんは右手と左手の位置を入れ替えることでそれを現しました。分かりやすい解説ありがとうございました。
「はぁぁ？　なんだそりゃ！　素材と味のねえくそまずい食料アイテムを“交換”してたってことか？」
レオーネさんが叫びました。
「加工ってほんまの加工やないわけ？　あれ？　そやったら、なん

で高レベルの人の作ったもんは質がようなるん？」
「それはですね、アイテムを設定するときに同じ名前、同じグラフィックでステータスだけ違うアイテムを作っておくんです。そしてレベルとか素材とかを出現条件にしたそちらを渡すイベントを作ればいいんです」
ここら辺は生産系の方々も知っています。とはいえ、素材はどこへ消えるのか、完成品たるアイテムはどこからわいてくるのか、そこら辺はまだわかっていません。
「うわー、頭いいんやねー。ゲームのプログラムとか分かるんや」
ヒマ姐が尊敬を込めたキラキラした瞳で公潤さんを見ます。
「いえ、大したことでは……」
あ、公潤さん、照れてます、照れてます。ほほう。ヒマ姐が好みですか？
「解説ありがとうございます。アイテム解説を見ますと、食料アイテムには必要素材があるだけでどんな料理か、どういう味かいっさい明記されていません。食料アイテムに味がないのはこのためだと思われます」
納得したような呟きがあちらこちらでありました。
「そこで“味のある”加工品の生産方法ですが、必要素材をオブジェクトでもある機械に入れて発酵を待つといったタイプのものであることが分かりました。そこで仮説です。“大転移”以降オブジェクトはオブジェクトではなくなりました。それは風呂、トイレなどが単なる飾りではなく“大転移”以降実際の使用にたえるものであることから分かります。そうした場合、加工機器も実用できるものである――イベントの“すり替え”を行ったものではなく、素材に実際に手を加えられ結果としてできたものには味があるのです。ならば料理も同じではないかと実験し――結果は皆さん知ってのとおりです」
「……普通に料理すればいいいってことかい？　たったそれだけ？」
「そうです。なまじゲームとの共通点がありすぎて、メニューから

しか料理できないとの思い込みが盲点でした」
皆さん――特に生産系ギルドの方が肩を落としてました。
「そんなことか……」
「うわぁ……気づけよな、おれ……」
「いいのかい？　うちの“料理人”はリアルでも調理師免許もってんだよ。味ならどこにも負けない自信あるよ？」
蘭姐さんが自信たっぷりにおっしゃいました。まあ、16000人以上いれば本物の料理人ぐらいいるでしょうね。探せばもっとイロイロな職種の方がいらっしゃるでしょう。
「現実で料理人なんですか？」
「……本業はミュージシャンだよ」
本業で売れないので副業で生活を支えているという、どっちが本業だかわからないというやつですね。
「アルファの食生活が豊かになりますね。大変よろしいかと存じます」
おいしいものが街中に溢れれば活気も出てくると思います。本職の人の活躍を期待させていただきます。おいしかったら食べに行きます。当然です。
「さて、老師お願いします」
「任されましたにゃ」
老師があるものを手に進み出ました。
「そっ、それわ！」
「あっ、富士山ぱんつ」
「沖田、『日本男児トランクス』だ」
「我輩は『ルナティック・ハッター』のソウセキと申しますにゃ。お見知りおきを。さて、日ごろの御愛顧ありがとうございますにゃん。これは海パンと並んでヒット商品の『日本男児トランクス』ですにゃ」
老師が広げたそれには白波に富士山、それに日本男児のプリントが。下着屋が誇るヒット商品男性用下着『日本男児トランクス』で

す。プリントと名前の由来は知りませんが。
どうやら何人かはご愛用しておられるようです。不自然に視線が泳いでいます。まぁ、女子より男子の方が多いので当然かも知れませんが。海パンじゃなければ『日本男児トランクス』しか履くものがありませんし。
三択ですか？
老師がぐっと商品を前に突き出します。
「実は——この商品にはレシピが存在しにゃいのですにゃあぁぁぁああ！」
「なんだと！」
「んじゃ、どうやって作ってんだ！？」
レシピは存在しません。数多のレシピをコンプリートしている老師にも男性用下着は代用品しか思い浮かばなかったのです。
ではなぜ『日本男児トランクス』というものがあるのかといえば——
「プリントまではスキルを使いますが、裁断と縫製は手作りですにゃあ！」
どや？　とばかりに老師が商品を突き出します。
「て、手作り？」
「手縫いですにゃ」
リアルでの老師は手芸男子です。ですので手縫いはマジにお手の物です。実は『東方記』の暗殺者猫の獣人（黒猫）のイゾウさんとは現実で手芸男子仲間なのです（イゾウさんのサブ職業も縫製者です）。ゲームの中ではライバルということにしてあります（その方が面白いとのことです）が。
「食事と同じように実際に手を加えれば何かが作れるということですにゃあ」
「はい、ありがとうございました。もう気がついた方いると思いますが、これがなにを意味しているのかといえば『この世界でも制作メニューを使わずとも物が作れる』ということであり『クリエイト・

ミレニアム』の世界でなかったものでも造れるということです」
『B・スミス』『フェアリーリング』『ドラッカー』の生産系ギルドの方が目をむいています。
「……つまり、発電機とか蒸気機関が作れるかも……知れねえってわけか」
ジョンさんはさすがに物づくりに対して積極的です。
「可能性は充分あります。製鉄とか、細かい部品は『鍛冶屋』や『からくり師』『賢者』の制作メニューから作ったものを分解して流用するとかして、詳しい知識を持った方がいれば……1600もいればどこかにそういった人もいるでしょうね。またマジックアイテムと組み合わせることにより、元のものより優れたものが造れる可能性もあります」
「それは凄い！　さすがにパソコンなどのハイテクは無理でしょうが、人力で動かせるものとか、蒸気機関なら再現可能かも」
冷静が売りのスリフさんが興奮してます。
「そうですね。我々はそういうものがあることを知り、基本的な構造をおぼろげながら知っていますから」
「我輩はミシンを造って欲しいですにゃー。足踏みの真っ直ぐしか縫えないものでいいですにゃー」
「おう、そいつは造れそうだな」
ジョンさん、造る気マンマンですね。今にも工房に向かいそうです。
「あー、個人的な依頼は後でお願いします。話はまだおわっておりませんので」
「おう、悪いな。まだあるのか？」
「まあ、そんなに重要なものではありませんが……ギルドキャッスル、ギルドハウスをご利用の皆さん、トイレ、バスは標準装備ですよね？」
「おうよ、それがどうした？」
「気づいているギルドさんも多いと思いますが、地下室や目立たな

いところに倉庫がありませんか？　ペーパーロールの予備がありま
す。実は毎月の維持費のなかにトイレットペーパー代が入っていま
して、毎月使った分補充されております」
『なんだって！』
おや？　大合唱ですね。
「僕も知らなかったのですが、執事のセバスチャンが教えてくれま
した。ギルドホームを使っているところでもトイレ、風呂をつけた
ところではたぶんあると思います」
皆さん慌しく念話でどこかに連絡しております。ああ、知らない
ギルドさん多かったんですね。
「ありましたー。あー、今までなんであんな苦労を……」
ぐったりした沖田くんがぼやいてました。
「今までどうなさっていたんですか？」
「“紙”ですよ。『賢者』の隊員が――」
「説明しなくていい！」
首筋まで血の気を上らせてトシさんが静止なさいました。
『賢者』や『錬金術師』は書類を作るスキルがありますが、それ
に必要な紙やインクを造るスキルもあります。隊員さんが“紙”を
必要分だけ造っていたんですね……『東方記』だけではないようで
すが。精神的ダメージ食らってる人が多いです。そりゃあまあ、賢
者や錬金術のスキルで作るものがトイレットペーパー代わりなんて、
泣くに泣けないですものねー。
早く教えてあげればよかったですね。
「それから軽い疑問なのですが、『黒獅子騎士団』と『グリーン・
フラック』の皆さん」
「なんだ？」
「最近アルファの狩場ばかりに行かれているようですが、やはりデ
ルタ、イプシロンの狩場は恐ろしいですか？」
「んなわけあるか！」
ガンっ！　とレオーネさんが机を叩きました。

「しかし『銀狼騎士団』の方から聞いた話ではデルタ、イプシロンの狩場はガラガラだそうですよ」
「“天界の門”さえ動いてりゃあなあ」
「“帰還呪文”があるじゃないですか？」
『ほえ？』
まぬけ顔ですねえ。そういう顔も嫌いじゃないですよ、レオーネさん。
ヴォルグさんが無表情ながらも心持ち得意そうな顔をしております。（萌え）
「ギルドキャッスル、領地などタウンの外にあるギルドの持ち家は“帰還呪文”の行き先選択に入るでしょう？　『黒獅子騎士団』はイプシロンにキャッスルをお持ちですから、“帰還呪文”の行き先に指定すればイプシロンのキャッスル近くに出現するじゃないですか。そこから狩場にいけますよ？」
『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』の皆さんが凍りついた後『あああああああー』
悲鳴を上げられました。皆さん肺活量ありますね。耳が痛くなります。
「ご、合流できるじゃないか！　いままで無駄な時間を！」
ロビーさんが頭を抱えました。側近の方が慌てて念話しているようです。
「お気付きでなかった？」
「気づかねーよ！」
「知るかよ！　早く教えてくれよ！」
「聞かれませんでしたので。『銀狼騎士団』や『キノクニ屋』は活用しているようでしたよ」
「あれー？　知らなかったんですか？　ボクはてっきり知っていてアルファの狩場に執着しているもんだとばかり」
可愛い顔して沖田くんが追い討ちをかけます。というか、本気で言っていますね。

天然ですね。
空気読んでませんね。
恨めしそうな視線が『キノクニ屋』と『銀狼騎士団』に向けられました。
「へい。前からアマイズルに行く時は使ってましたよ」
アマイズルに“天界の門”はありません。島国ですので船を使ったり空飛ぶモンスターを召喚したりしなければ渡れませんが、『キノクニ屋』は一戸建てを購入し、“帰還呪文”の行き先のひとつにすることで時間短縮してます。
「荒稼ぎ、させてもらった」
「おや、狩場で見かけないと思ったら『銀狼騎士団』は他所にいってたのかい？」
蘭姐さんの言葉にヴォルグさんが頷きました。
「ああ、どうりで『銀狼騎士団』が狩場の占拠しないはずさぁ。イプシロンやデルタは人が少ないんだろう？」
「うちは全てのタウンにキャッスルがあるからな」
「うらやましいねぇ。うちはギルドキャッスルなんて持てないからねえ」
狩場の占拠問題解決しそうです。よかったですね。
さて、こうしてアルファのタウンには自治組織ができました。とりあえず基本的な取り決めが行われました。細かいことはこれからきまりますが、人権と安全の保障は絶対条件でしょう。
名称は――僕は全員の意見を聞いてからと思っていましたが、ゲーマーゆえのこだわりからひとつに絞れず、公募することになりました。
「でもいいのかい？　あんた、自分の持ち札全部きっちまって。握ってた強権全部手放すのと同じじゃないか」
蘭姐さんが言いたいのは、食事や下着の製造法を独占することで得られる人の関心ですね。会館の権利を含めて全部景気よく手放し

ましたから。
「かまいませんよ。確かに強い手札かもしれませんが、隠している
うちはそれ以上にはなりません。公開した方がより多くの方が創意
工夫して発展させてくれるものと思います」
「あのままならアルファを牛耳ることもできたろう？」
「いりません。僕らにはささやかな領地を治めることで手一杯です」
正直できる人に丸投げしたいです。というか、します。皆さんが
んばっていい街づくりしてください。そのために造ってもらった組
織ですからっ！
「たくっ、五人ぽっちのギルドでここまでやっちまうとは、大した
女だぜ」
「お褒めに預かり光栄です」
「女？　誰が？」
オキナガさんの単語にロビーさんが眉をひそめました。
皆さん一瞬きょとんとした顔なさいました。
「知らねえのか？　こいつは女だ。ネナベだぜ？」
「なにぃいいいい！」
ロビーさんの悲鳴がこだましました。そんなに意外ですか？　そ
ういえばロビーさんとは直接の面識ありませんでしたねー。
誤解なさっていたようです。

自治組織最初の仕事として『音楽隊』との交渉がありました。
『銀狼騎士団』に足止めを喰らっていた『音楽隊』メンバーと交
渉すると念話を送ってもらい、ギルドホームから『音楽隊』のギル
ドマスターを呼び出しました。
かーなーりビビッてました。それはそうでしょうね。アルファを
代表するギルドマスターがそろっていましたから。そうでなくとも
『銀狼騎士団』の足止めがかなり恐かったようです。
心中お察しします。僕でも恐いです。
自治組織の発足を伝え『音楽隊』の初心者に対しての虐待を咎め、

脱退したメンバーへのつきまといや嫌がらせを禁じました。場合によっては会館への出入り禁止もあると言われ、真っ青になっていました。

後日『音楽隊』は解散し、なけなしの資金とアイテムを抱えた元ギルマスを初めとした幹部メンバーはアルファを出たといいますが、定かではありません。

「あの、助けてくださってありがとうございました」
はれて自由の身になった助けられた元『音楽隊』の少女は勢いよく頭を下げた。回りの仲間もそれに習って頭を下げた。
「それでその」
もじもじと言い辛そうにする少女に向日葵は優しく聞いた。
「なんや？」
「提供してくださった装備とか、あ、使っちゃったものもあるし、痛んだものもあるんですけど、お返ししないと」
守護者や軽戦士の仲間がそれを聞いて慌てて装備を脱ごうとする。しかし『お茶会』のリュウタがそれを静止した。
「ああ、返さなくてもいいよ。君たちで使ってくれ」
「で、でも、お金ないし」
「あげるよ。低レベルのとき使ってた装備だから、もうレベルが合わないんだ。売っても二束三文だしね。どうせ倉庫でホコリかぶってたようなものだけど、使ってもらえるなら嬉しいよ」
「とっとき。あげたもんやさかいな。自分ら、これから大変やろう？　少しでも助けになればこっちも嬉しいわ」
優しく言われて初心者たちは胸にジンと来るものがあって涙が出た。
ああ、人の情けが見にしみる。
「でも、お金ないし、助けてもらっても報酬とかも払えないのに……あんなに、いっぱい助けてもらって……」

「報酬なんいらんわ。君たちの無事がなによりの報酬やわ。ほら、泣かんでえな。可愛い顔が台無しやで」

向日葵が少女の涙をハンカチで拭いた。

「ありがとう……ありがとう……ほんと……に……ありがとうございます」

「初心者救済の一環としてな、初心者受け入れていいっちゅうギルドを紹介することになったんよ。あんなとこと違ってみんな助けてくれるギルドや。たっくさんのギルドがどういうとこで、どういうことを助けてくれるか言うんや。ようきいとき。きっと気に入るギルドがあるで。今度はいいギルドにはいるんやで」

「あの、ここは？」

「ああ、うちもや。自治組織ができてな、そこに参加しとるギルドはみんなや」

大盤振る舞い（後書き）

おまけの人物設定。

リュウタ

元『銀狼騎士団』所属。騎士。
某ミリオン戦闘において『瀕死』状態になった彼は白衣の天使に助けられた。
そう、伝説の「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」をまとった『お茶会』に。
「危なすぎるだろ！　いろんな意味で！」
かくて彼は上司に直訴し快く承諾され『お茶会』の護衛を勤める。
ちなみにその上司とはもぐら叩き隊を率いていたあの人である。
「かわんないッすね、将軍……」
ミリオン戦闘後『お茶会』に移籍。同じように移籍してきたメンバーを仕切る護衛隊長を務める。他のギルドより「色香に迷って移籍した」と言われることもあるが、そういうわけではないらしい。
彼女がいる。彼女も『クリエイト・ミレニアム』の世界に来てしまっているらしい。念話で連絡を取ったり、時間を作ってはあっているらしい。リア充爆発しろとか言わないように。

『お茶会』とは向日葵率いる治療系とその護衛で構成されているのだ。

鈴鈴（りんれい）

『音楽隊』に監禁されていた吟遊詩人の少女。
本来なら少女Aぐらいで

「……なんだかついていったら不思議の国に連れて行かれそうだわ」
「もうここは“不思議の世界”よ。いきましょう。ここから出るの」
の二つの台詞が言わせられればよかったのだが、なんとなく弱気の代表として書いてみたらダイに気があるっぽくなってしまった。
そういうことにしとこう。小さな恋の物語。実るか？
気がついた人もいると思うが、囚われの新人が九人も増えていた。
まだまだ不幸な新人は多い。
昨日今日ゲームを始めたとたん“大転移”に巻き込まれたという子もいる。鈴鈴はその典型。レベル４か３ぐらい。さすがにこのレベルでは狩りにも連れて行けず、生産系としてこき使われる予定だったもよう。
名前の由来は某芸能人をからめたロボットアニメ。りんれいと読みづらかったらりんりんでもいいや。

終わりよければって……いいんですか？　これ？

渡されたレシピを前に生産系のギルドの皆さんが唸っていました。
「造れるレベルの職人さんがいないのですか？」
「いや、そんなこたぁねえけどよ。プライドの高い野朗が多いからよ、造るかどうか」
オキナガさんの言葉にジョンさんとスリフさんも同意見なのか苦笑いします。
「造ってもらわねば困りますにゃ」
レシピを提供した老師が憮然と言いました。スリフさんが慌てて弁解します。
「いや、造ってもらいますよ。ええ。下着の重要性は重々。しかし、海パンのレシピなんて、どこで手に入れました？　水着のクエストはいくつかありましたが、海パンのレシピはなかったと記憶しておりますが」
「……ひとつのクエストにつき三つのレシピからランダムに報酬が選ばれますにゃ。とったレシピは選択から外れますにゃ。そうして同じクエストを三回クリアするとそのクエストのレシピがコンプできますにゃ〜。海パンは七つのクエスト全21種うちのひとつしか入ってないハズレレシピにゃ」
スリフさんが目を見張りました。
「そういう仕組みだったのですか！」
「そうですにゃ」
このシステム、気づいた人は何人いるでしょう？　うちは偶然、分かったのですが。普通同じクエストを何回も請け負ったりしませんが、うちはマリーの懇願でコンプするまでつき合わされました。
コンプリートした瞬間、老師のウィンドゥにコンプお祝いメッセージが表示されたそうです。それがどんなメッセージだったのかは知りませんが、しばらくフリーズしておられた老師は海に向かって

叫びました。
「ま、またつまらぬものをコンプリートしてしまったのですにゃ～」
という老師の無念の叫びはその日の海とメンバーしか知りません。
笑いましたけど。
誰ですか、こんなシステム考えついた人は。責任者出てきなさい。
ややあってオキナガさんが聞きました。
「……………もしかしてコンプしてんのか？　水着レシピ」
「ｗｗｗｗんｗｗｗｗにゃんのことですかにゃｗｗｗｗｗｗ」
バレバレですね、老師。

自治組織設立は念話によってギルドメンバーに伝えられ、『キノクニ屋』は予め用意してあったビラを配ってアルファ中に知らせようとしました。
また、スリフさんの『フェアリーリング』内情報部『フェアリージャーナル』が号外を出して住人に広く伝えようとしました。
中規模ギルド『かわらばん屋』も盛大にこのことを伝えました。
どういう情報ソースを持っているのか知りませんが、結構詳しい情報を握っていたようです。
北側の広場で宣言を行うことになりましたが、誰がするかということで少しばかりもめました。
僕は本来最大手である『Ｂ・スミス』（所属メンバー約２６００）のジョンさんか戦闘系最大手の『銀狼騎士団』のヴォルグさんあたりがやるべきだと思いましたが、お二人とも「弁が立たない」という理由で固辞しました。他にも
「めんどくせえ」
「堅っ苦しい」
「大役過ぎる！」
等忌避する人が続出しました。
なぜか“発案者”ということで僕がするべきだという意見もありましたが、参加ギルド中最小（五人）のうちが宣言するのもどうか

と辞退させていただきました。
けっきょく『ワイルドカード』の公潤さんがすることにきまりました。
弁が立つことと、公明正大、清廉潔白、正義の味方、秩序の番人という本人のイメージが決め手です。
決してあみだくじや、ジャンケンで押し付けあったわけではありませんから。
ギルドマスターが各ギルドの代表として並び、そのなかで公潤さんが自治組織成立とその意義や役割を演説しました。
さて、会館の維持費や自治組織の資金ですがこれは自治組織に所属する全てのプレイヤーで払うことになります。多くのプレイヤーがいれば会館の維持費も払えます。
自治組織の構成員が会館に出入りしますと、口座に自動的に一日一Ａg貨が徴収されます。ただし銀行口座や手持ちなどの総資産が一定以下の場合は免除されます。その仕組みは事前に公開されました。
そして大々的に組織への参加を呼びかけます。
長いので省略しますが、一部だけ
「隣人とともに歩みましょう。隣人と助け合いましょう。苦しむ人には手をさしのべてあげてください。我々は一人では生きていけないのです」
大変分かりやすい説明ありがとうございました。洗脳されそうです。その背に後光が見えたのは僕だけでしょうか？
公潤さんってリアルでなにをなさっている人なのでしょう？　少し不安です。
他の参加ギルドのマスターも一言挨拶しました。
これぐらいするようにと、怒りのオーラを背負った公潤さんに言われたもので。
穏やかな人が怒ると恐いです。顔は笑っているのに、目がですね、笑ってないんです。そこに永久凍土を見たのは僕だけでしょうか。

広場や店では知れ渡った“味のある料理”の作り方のおかげで今まで休業していた料理店が店を開け、露店でも食べ物が売られていました。

『ルナ』チェーンはその役割を終え新装開店のため店舗が閉められました。そのかわり『キノクニ屋』は広場で無料で料理や飲み物を振舞いました。お酒は貴重な味のあるものです。

『B・スミス』『フェアリーリング』もこれに習いました。

『吟遊詩人』や『楽師』『歌手』『ダンサー』などの職業の方が歌い踊り、祭のように賑やかです。

皆が笑っていました。アルファの住人は自治組織を受け入れたのです。

この日は自治組織成立の記念日となりました。

なお初心者の救済処置として、自治組織に参加しているギルドの中で受け入れてもいいというギルドはその旨を表明しました。

その中には『黒獅子騎士団』もありました。

後日、件の謎の上位プレイヤーに助けられた初心者くんが『黒獅子騎士団』に入ったそうです。なんでも『黒獅子騎士団』の中に恩人を見つけたそうです（笑）

するべきことは全て終わりました。そのまま宴になだれ込み、ギルマスの皆さんも人の中に消えました。

相変わらずメイド執事姿の『キノクニ屋』メンバーが料理や飲み物を配ります。『B・スミス』のメンバーが豪快に食料を振る舞い、『高雅楼』の料理人が仕込みのいらない簡単な料理を売っています。蘭姐さんが歌っています。『黒獅子騎士団』が料理を貪り『グリーン・フラッグ』はやっと合流できたメンバーと再会を喜び合っています。『ルナティック・ハッター』は新鮮な果物とワインを提供しました。それを鯨飲しているのはジョンさんとオキナガさんのようです。呑み比べしてます？　マリーがアリスに言い寄るプレイヤーを追い払ってました。薔薇の花束を捧げたコロンくんが南さんを口

説いています。勇者だ。勇者がいる。あちらこちらに知った顔を見かけます。ヒマ姐が名前のとおり向日葵のように笑っています。暗くなってくると有志のギルドが花火を上げました。即興のラップを披露する人もいました。拍手と乾杯と歌と踊り。祝福のカオスです。
ひとしきり祭の雰囲気を楽しんだ後、僕は小さな路地に置かれたベンチで一休みしました。宴の中心となっている大通りから道一本離れたそこは人気がありません。
ワインと雰囲気に酔った体を休めるのにちょうどいいです。うちの連中もそれぞれに祭を楽しんでいることでしょう。
やっと荷を降ろせたような気がします。
「これで終わったか？」
いつの間にかヴォルグさんがいました。一人のようです。
「ええ、ありがとうございました。『銀狼騎士団』が手を貸してくれなければなにもできませんでした」
「……うちが持ち込んだものだ」
「ですけど請け負ったのは僕です」
少しだけヴォルグさんが笑いました。
「……褒美をくれないか？」
「かまいませんけど、なにが欲しいんですか――」
ヴォルグさんが欲しがるようなもの、うちにありますか？　と振り返った僕にヴォルグさんが唇を重ねました。
遠くで花火があがりました。
――……えーと………僕受けですか？

終わりよければって……いいんですか？　これ？（後書き）

うん、受け。

おまけ

『銀狼騎士団』言わずと知れた『クリエイト・ミレニアム』戦闘系最大手ギルド。最初の日いた約１２００人も八割ほどに過ぎなかったという大手。中枢にミリタリーマニアが多い。クリエイト・ミレニアムで戦士系をやりたければ『銀狼騎士団』で学べといわれるほど。

ヴォルグ　物静かで冷静（表情が乏しくて口下手　クロウ談）な守護者。リアルでもミリタリーマニア。しかしいったん戦闘となれば人が変るらしい。その落差から“狂戦士”の異名をとる。

『ワイルドカード』本来パーティのリーダーは人間の戦士がやるべきなのだが「おれ、頭悪いから」の一言で公潤にその役割が押し付けられた。パーティが大きくなりギルドになってもそのまま公潤がギルマスをやらされている。どこまで人柱なんだ。秩序を尊ぶギルマスの精神はそのままギルドの方針となっている。

公潤　物柔らかな法師。清廉潔白正義の味方“秩序の番人”の二つ名をとる。朗らかな向日葵がど真ん中である。

『黒獅子騎士団』困難なクエストに挑戦することを喜びとする精鋭で構成されたギルド。

レオーネ　熱血漢の守護者。かつて『銀狼騎士団』に所属していたが、一々低レベルのプレイヤーにまで気を使い戦術を考えるヴォルグに反発、自らギルドを立ち上げる。ある意味漢の中の漢。向日葵に気がある。

『東方記』歴史物好きの集まり。新撰組ファンを中心に幕臣、薩長士、ついでに平安や戦国時代も混じっている。

沖田ソウ　朗らかな武士。子供っぽいところもあるがやるときはやります。恋人のトシゾウに変らぬ愛をそそぐ。逃げられても追いかけそう。

『グリーン・フラッグ』自由の旗のもとに集まった自由人の集まり。

ロビー　短気な騎士。ロビンフッドのファンらしい。弓を使うこともある。かつてミリオン戦闘において『銀狼騎士団』とは別の勢力に属しており苦汁を舐めさせられたことがある。その参謀として"黒の錬金術師"の名を聞いた。『ルナティック・ハッター』とはほとんど接点がない。

『B・スミス』生産系の大手ギルド。鍛冶屋が始めたギルド。生産関係は全て網羅するほど巨大。"大転移"以降メンバーが増え続けている。

ジョン　おおらかな武士。自分の武器を作るため鍛冶屋をはじめたが、高性能の武器を作れるため依頼が来るようになりギルドをはじめた。

『フェアリーリング』数々の高レベルレシピを集めるクエストに挑戦するギルド。内部に情報を広く伝えるための新聞を発行する部署がある。

スリフ　知的な召喚師。賢者のサブ職業を主として考えている。知識の探求、新たなレシピの習得がよろこび。

『キノクニ屋』召喚師が多く『コモン』との貿易を主とするため、空飛ぶ召喚生物でキャラバンを構成するアクティブなギルド。

コロン・ブン　別名"空飛ぶ商売人"商売人でありながら挑戦者気

質の召喚師。戦闘系ギルドから軟弱と言われがちな生産系ギルドのメンバーだが、“恐怖の女王”南に本気でアタックしているというところで真の勇者と（特に銀狼騎士団メンバーに）崇められている。

『高雅楼』中規模戦闘系ギルド。生産系のように店舗を持っているが、本来は戦闘系。

胡蝶蘭　“仇花”の二つ名を持つ妖艶な暗殺者。普段は店で歌手をしているが、高レベル暗殺者である。ネカマ。女好き。

『ドラッカー』高レベル生産系メンバーの多い中規模ギルド。

オキナガ　癖のある妖術師。着流しに煙管を愛用している。からくり師として日々怪しげな研究をしていると言われている。

「巨大からくりは男の浪漫だろーが」

『お茶会』治療系の魔術師が中心のギルド。治療系の魔術師を貸し出すため友好関係が広い。

向日葵　朗らかな治療者。何気にイロイロとロックオンされているヒマ姐。天然ゆえに無自覚。大丈夫か？　友人一同はイロイロ心配だ。

『ルナティック・ハッター』

クロウ・リー　今さら紹介の必要があるだろうか？　本編の主人公。ネナベ。

アルファに少しだけ変化がありました。
まずいくつかの中規模ギルドが解散しました。三分の二ほどのメンバーを置き去りにして、中枢のメンバーは口座にあったお金とアイテムを抱えてアルファから去りました。
どうやら元ＰＫの悪徳ギルドだったようです。『音楽隊』の状況を見てあれが自治組織の制裁だと思い込み、明日は我が身とさっさと逃げ出したというのが顛末のようです。
あれは自治組織ではなく僕らの共同作戦だったのですが、時期が合いすぎたので誤解されたようです。
残された無一文同然のプレイヤーの自立支援のため、自治組織が店舗のギルドハウスを一軒用意しました。住居部分（８０人対応型）をプレイヤーのための無料宿泊施設として開放し、一階のニ店舗のうちひとつは有志による無料炊き出しです。もうひとつの店舗には組織に参加しているプレイヤーが昔使っていた１５レベルまでの装備を提供し、相場の四分の一以下という捨て値（中にはご自由にお持ちくださいというものもあります。１０レベル以下のものですが）で販売しています。
提供ギルドいわく、どうせ二束三文の低レベル装備、倉庫の整理になっていい、だそうです。どうせ新品はマーケットにありますものね。そういえば中古の低レベル装備というのはマーケットに流れませんね。買い取りに出しても会館がマーケットに流さないようです。どこへ行くんでしょう？
ささやかな売り上げは炊き出しの足しにします。
ホールで低レベルのソロプレイヤーでもできる採取や比較的安全な狩りのやり方とその狩場を講義する予定です。サブ職業の生産業のやり方も参加ギルドよりバックアップがあります。
ソロプレイヤーとしてやっていくもよし、ギルドに参加するもよ

し。自立できるよう手助けするつもりです。
ゲームとしてなら自力で稼ぎ、装備を揃え、情報とレシピを集めて自分を強化していくのが正しい楽しみ方なのでしょうが、現実世界となった『クリエイト・ミレニアム』ではそうもいきません。食べていかなければいけませんし、寝る必要もあるのです。早急にやっていけるまで育ってもらわねばなりません。

その日、領地にお客さんが来ました。そっくりな顔の暗殺者と法師の二人組ダイくんとサムくんです。
髪型と装備は違いますが、本当にそっくりな顔立ちをしています。心持ちサムくんのほうが大人しそうですかね？
「クロウさん」
「なんでしょう、ダイくん」
『音楽隊』から脱退したメンバーは一時『お茶会』と『キノクニ屋』が急遽短期で借りたギルドホームに収容されました。『お茶会』のギルドホームでは収容しきれない人数だったのでトイレ風呂付で一週間の契約です。
タウンの外にあるキャッスルや領地に移動するのも大変そうでしたし、早急に保護する必要があったので。
その間に自分の気に入ったギルドを選んでもらうつもりでした。
「あの、助けてもらってありがとうございました。それでですね」
「なんでしょう？」
「俺たち、報酬とか払えないんです。それどころか、装備とかもらっちゃって」
「あれはほとんど『お茶会』のですから、礼はそちらに」
場所が『お茶会』のギルドホームだったので、ほとんど『お茶会』メンバーのお古です。とはいえ、使ってない倉庫のこやしだったそうですが。
「こっちで使ってくれって言われました」
「そうですか」

「術とか技とかもただでもらってしまって」
術や技のレシピは普通買うものです。
「あれは提供者がいればすぐ作れるものですし、提供者にはなんの影響もないです」
『お茶会』とヴォルグさんと南さんが気前よく提供してくれたので、せいぜい“紙”ぐらいです。メンバーが偏っているので治療系の術は充実してましたが、攻撃系はあまり。技は守護者（ヴォルグ、南含む）と騎士、盗剣士は充実してましたけど、それいがいはあまり。まあ低レベルの技でしたけど。
「『お茶会』や『銀狼騎士団』や『キノクニ屋』の人達にも同じことを言われました」
「そうでしょうね」
底上げが必要だったのであげたものです。僕達にはそんなに負担ではないので。
「でも、俺たち恩返しがしたいんです！」
「ぼく達を『ルナティック・ハッター』に入れてください。今は低レベルですけど、レベル上げて、きっと役に立ちます！」
おや？
「そんなふうに考えなくてもいいですよ。本当に希望するギルドはないのですか？」
「ないです」
「治療系の仲間は『お茶会』に戦士系は『銀狼騎士団』生産系やりたいのは『キノクニ屋』にいきました。みんな恩返ししたいって」
考えてみれば一通りそろってましたね。それでいけばダイくんは『銀狼騎士団』、サムくんは『お茶会』に所属した方がいいのかもしれませんが、別に同じギルドでもかまわないはずですが。
「ここは俺たちの担当です」
「一生懸命がんばります。入れてください」
………うちもいちおう初心者受け入れを表明しているギルドです。今まで希望する人がいなかっただけで。

暗殺者のダイくんはハイスピードを売りとするうちの戦闘にはあうでしょう。法師のサムくんは待望の治療系です。うちにとってもそんなに悪い話ではありません。お二人には運命を感じていたところですし。

「分かりました。いいでしょう。でも恩返しとか考えなくていいですよ。ギルドとは楽しむための仲間ですから。さあいらっしゃい。皆に紹介します。うちは領地システムを使っていますから『コモン』の方もたくさんいます」

『はい！』

こうして僕らの仲間は二人増えました。

アルファは引越しブームです。あっちこっちでギルドがお引越ししています。

おもにギルドホームを使っていたギルドが動きます。理由は初心者を引き受けたため人数が増えたとか、一番は風呂とトイレです。

『クリエイト・ミレニアム』がゲームであった時代、ギルドホーム、ギルドハウスといっても本来の意味での家ではありませんでした。生産職の工房、倉庫、会議所、休憩所として使われ、住む必要はなかったのでホームにトイレ風呂などのオプションをつける人は少なかったのです。人数が多くても一番小さなホームを使い続けるギルドもありました。

しかし“大転移”以降、住居として使うにはトイレ風呂なしは困ります。会館の公衆トイレはかなり混雑したそうです。それに関する悲劇（笑い話？　本人にとっては悲劇でしょうが）をいくつか聞きました……寝るにしても個室の取れない集団部屋でプライバシーのない生活に嫌気がさす人が多かったそうです。

皆さん奮発して一ランクうえのホームに行くとか、同じレベルでもトイレ風呂付きのホームへ引っ越すとか、思い切って個室の取れるギルドハウスへ引っ越すとかしてます。快適な住居を求めて大移動です。

前のホームを売ったお金（契約が切れる寸前でも会館に購入時の金額の半額で売れます）を代金の足しにしているにしろ、一時的にギルド口座がカラに近くなったギルドもあるらしく、狩りに精を出すギルドが多くなりました。積極的に商売する人達もいます。会館は混雑していました。

「なんでジュ姐まで来るんですか？」

「お引越しの手伝い。ヒマちゃんとこ今日お引越しなんだって。終わったらお茶してから帰るわ」

『お茶会』もギルドホームをワンランク上げるようです。もちろん風呂トイレつき。『１００人までなら大丈夫』のホームですね。

「そうですか。では入会手続きが終わったら僕も顔を出します。ダイくん、サムくんも挨拶に寄りましょうね」

僕達はダイくんとサムくんの入会手続きに会館に来たのです。

「入会手続きが終わったら〝帰還呪文〟で領地に帰れるようになるよ。二人でも帰れるよね？」

しゃちこばった二人が元気よく返事しました。

『はい』

「別に先に返さなくてもいいでしょう？」

「だって、せっかくアルファにきたんだもん、ギルマスお泊まりするんじゃないの？」

「……僕がどこに泊まると？」

ジュ姐……

「どっこかしら（ハート）」

人の悪い微笑を残してジュ姐が階段を上っていきました。ナニを知っているんですか、ジュ姐！

双子が同時に首を傾げました。動きが完全にシンクロしてました。うん、ある意味可愛い。分かっていないようです。

分からなければそれでいいです。

純真なままでいてください。

手続きはすぐに終わりました。
「じゃあ、『お茶会』のギルドホームに行きましょうか」
上階へ行こうとした僕達はばったり公潤さんと鉢合わせしました。
「ちょうどいいですね。お呼びしようと思ったところです。組織の大事なお話があります。会議場まできてください」
にっこりと笑った公潤さんから逃がすものかという気迫を感じました。
なにかあったようです。

「ベータから帰順したいとの要請があった」

帰順　反逆を改め服従すること

「……いつからアルファとベータは戦争していたんですか？」
「していない。そういう表現だったのだ」
会館の会議室のひとつに十二のギルドの長が集められました。残念ながら遠征（デルタの狩場に出稼ぎ）中のロビーさんに代わり、つい先日までデルタにいたというアルンハイトさんが出席してます。
『銀狼騎士団』のヴォルグさんからベータの要請が伝えられました。
「ここからはわたしが」
北川さんが説明してくれるようです。その方がいいでしょう。ヴォルグさんはときどき言葉が足りません。
「アルファに自治組織ができたことがベータにも知れ渡りまして、ベータのギルドも参加したいそうです。彼らもまた法と秩序を必要としています。いくつかの有力ギルドが話し合い、我々にコンタクトを取ってきたというわけです」
ここでベータについて説明しましょう。
ベータは『クリエイト・ミレニアム』の一番最初からあるタウンのひとつです。アルファが混雑してきたときのためのタウンで、ア

ルファとはほぼ双子都市です。違いといえばゲームを始めるとき操作方法のチュートリアル施設がないことでしょうか。

『クリエイト・ミレニアム』を始めるプレイヤーはまずキャラクターメイキングを行います。造ったキャラクターは初心者修行場へ送られます。そこでタロウというＮＰＣに基本操作や戦闘のやり方について教えられます。そこでしばらく練習した後アルファの専用“天界の門”へ送られます。

もし操作など基本的なことを忘れてしまった場合は会館のチュートリアル施設に来ると復習させてくれます。この“天界の門”も現在沈黙しております。タロウさんはどこへ行ったのでしょう？

ベータにはこの施設がなく（アルファにしかありません）、アルファが混んでいるときに代わりにいくとか『基本は覚えたからもう少し上等な遊び方をしよう』という街です。

そのため２０レベルから６０ぐらいまでのプレイヤーが多いです。ギルドを立ち上げるのもこの街からというものが多いです。

狩場もアルファよりレベルの高い場所が少しあるという程度でしょうか。

基本を覚えたプレイヤーの街のため、アルファのような『ゲームの楽しみ方を教えてあげよう』という上級者はいません。アイテムの換金もアルファの方が少しばかり高値ですので換金目的の大手ギルドも行きません。

そんなわけでアルファと比べて上級者が少ないわけです。

現在ベータをホームタウンとしているプレイヤーは約５０００人です（『銀狼騎士団』調べ）

「なんで『銀狼騎士団』に？」

「我々にベータ砦（リネームしました。正式名称です）——失礼、ベータにギルドキャッスルがあるためです。念話で自治組織が作られたこと、我々『銀狼騎士団』がその中枢の一部であることを知ってたよってきました。代表と話がしたいそうですが、どなたがなさいますか？」

「話といっても、まず方針がきまりませんと」
「方針？」
「彼らは何をどこまで望んでいるか、ということです。それに有力ギルドといってもどれだけベータを代表しているのですか？」
僕の質問に北川さんは少し考えました。
「担当者の報告ですと、代表と名乗ってはいますが、三分の一程度ではないかと」
「あそこは小規模なギルドが多いですからね」
『銀狼騎士団』ベータ砦をのぞけばベータのギルドで１００人を越える大手と呼ばれるギルドは三つあるかどうか。ほとんどが小中のギルドです。ここである程度ギルドが大きくなるともっと難易度が上のタウンに移動してしまう場合が多いのです。
「なんで今さらアルファに頼ろうとする？　ベータでなんかあったかぁ？」
投げやりなレオーネさんに北川さんが冷たい視線を向けました。
「――なにも。『夜叉姫（仮）』も現れませんでしたし『東方記』の見回りも『ワイルドカード』もありませんでした。『ルナ』チェーンもなく下着屋もありません。自治組織を立ち上げようとする招待状もありませんでした」
「――僕になにか含むところでも？」
僕がらみのたとえが多いです、北川さん。
「滅相もない。ただ――強力な影響力を持つ人物もしくはギルドが現れなかったということです。」
誰のことですか？　影響力を持つ人物って。
「つまり我々が対処済みの問題が放置されている状態――だと思えばよろしいのでしょうか？」
「はい。狩場を占拠するほどのギルドはありませんが、それ以外のＰＫの横行、“大転移”のショックによる無気力、ギルド間の敵対などです。今回自治組織『ユグドラシル』の成立は彼らに刺激を与えました。彼らも“このままでいいはずがない”と思っていたよう

です」
「俺もついこの間まで別のタウンにいたが……あれは酷いものだぞ」
デルタ帰りのアルンハイトさんが陰鬱に言いました。よほど酷い環境だったようです。もっともクリュウと近いデルタと、アルファと同盟で正三角形を描くベータではかなり事情が違うと思います。
北川さんの報告を聞いて公潤さんが少し考え込みました。
「わたしとしては——彼らが救いを求めるのなら、救いの手を差し出すべきだと思います。彼らとわたし達にどれだけの違いがあるのでしょう。たまたま我々はアルファにいて、彼らがベータにいた。それだけだと思います」
後光がみえます、公潤さん。って、なぜ僕を見るんですか？
ああ、気がつけば、皆さん僕に注目してます。なぜ！
「な、なんですか？」
僕に何を求めているんですか！
「意見は？」
「意見と言われましても——アルファとベータは離れていますので、こちらの自治組織が直接ベータに関わるのは無理があります。“帰還呪文”で行き来できるのは『銀狼騎士団』だけですので。むしろ、ベータではベータの自治組織を作るべきだと。その場所の事情はその場所にいる人達にしか分かりません。自分達で立ち上がらなければいけません。我々にできて彼らにできないということはないと思います。自治組織ができた後、アルファと関係を築いていくのがよろしいかと」
「自治組織の成立を促すか？」
「ええ。我々という手本があります。まあ、落ち着けば——アルファとベータの間は比較的安全——フィールドを歩いて移動できるよう脅威度の低いモンスターしか出ないようデザインされているので、定期的にキャラバンなどを行き来させることもできると思いますが」
コロンくんが指を鳴らしました。
「定期便ですね。分かりました、その件うちが請け負います」

さすが“天かける商売人”です。
「いえ、定期便なら他にも公募して、交代制とか合同での運行が望ましいかと。やりたいギルドもあるでしょうから」
『キノクニ屋』に集中するのはよくないでしょう。
「では、代表を送ってベータの自治組織作ってもらうということで。代表は誰がいいでしょう？」
「スリフさんがいいと思います」
「僕が？　理由をきいても」
「アルファの場合、人望のある大手ギルドが多かったのでそこを中心にまとめることができましたが、ベータはその手は使えません。広く呼びかけ自治組織の設立を促さなければならないと思います。スリフさんなら『フェアリージャーナル』があるじゃないですか」
プロパガンダお願いします。
「組織編制も実績がありますし適任かと。ああそう、味のある料理の作り方はベータに知られているんでしょうか？」
「まだそこまでは」
「ではそれも広く伝えてください。ついでに下着のレシピ――といっても習得できるレベルの職人さんがいるかどうか……現物輸出した方がいいですかね」
ついでに商売してきなさい。５０００人ですよ。大商いです。
にんまりとスリフさんが笑いました。
「なるほど、僕が適任のようですね。引き受けましょう」
「ベータに送り届けるのはうちの“空飛ぶキャラバン”がやりましょう。早いですよ～」
コロンくんがすかさず立候補します。一人だけ抜け駆けはさせません、ということでしょう。
よっ商売人。
「なんならうちのベータ砦を使ってくれ。人員もまわそう。あそこなら中レベルでいいな？　３００人もいれば足りるか？　５００人でもいいぞ。希望するサブ職業があれば申告してくれ。希望にそう

ようにしよう」

僕は知っています。『銀狼騎士団』のアルファ城が過密状態なのを。もともと１０００人対応のギルドキャッスルですからね、人員が回せるならありがたいでしょう。

「ではその方向性で話をまとめましょう」

この後ベータに自治組織『ルーツ』が生まれました。アルファとは友好的なお付き合いをすることになります。

最初の波紋　ルーツ（後書き）

どちらも得するお付き合い。それが友好的なお付き合い。

閑話　位置関係（前書き）

なんか作品中で何度も説明したんですが、これに関する質問が多かったんで。

閑話　位置関係

『クリエイト・ミレニアム』の世界はアルファを中心に六角形を描く都市六つを中心に造られている。辺の長さは『馬で一週間』と表現されるが４００キロメートル。

ベータとアルファ間はある程度育ったプレイヤーがフィールド移動でたどり着けるよう比較的脅威度の低いモンスターしか出ないようデザインされている。それでも道なりにいくと馬で二週間以上かかるよう地形が作られている。

アルファとベータと同盟は正三角形を築く位置にある。これは同盟方面におけるクエストを冒険者が引き受けやすくするためのもの。それでもフィールドを道なりに行くとアルファから、ベータからいずれも三週間かかる。

アルファ、ベータ、ガンマーで正三角形を築く。ガンマーは初期の設定では上級者向きのタウンだった。そのためフィールドの出現モンスター脅威度はやや高目中級。道なりで三週間以上。

アルファ、ガンマー、アマイズルで正三角形。アマイズル方面は海になっている。アルファ、アマイズル、クリュウで正三角形なのだが、アマイズルは魔窟であるクリュウのモンスターから海で守られている。アルファ、ガンマー各方面から行くには地上移動で港まで一週間、航海は帆船なので潮や風の関係があり三日〜ひと月かかる場合がある。

クリュウはモンスターの魔窟である。山岳地帯。アルファからいくには距離だけなら道なり（途中から道はなく獣道になる）三週間だが、近づくごとに出現モンスターの脅威度が跳ね上がる。巨人とかもいるから低レベルのプレイヤーは近づくべからず。

封印されし都はアルファから道なりで三週間だが、入れない。アルファ、クリュウ、封印されし都で正三角形を描く。封印されし都は同盟とアルファで正三角形を描く位置にあり、クリュウのモンス

ターから同盟を守っている。
この六角形をプレイヤー達はファーストへキサゴンと称している。正式名ではない。
デルタ、イプシロンは後の拡張パックで追加されたタウン。クリュウ、封印されし都、イプシロンで正三角形を描く。各辺は同じく400キロメートル。道なりになら三週間。アルファ間はクリュウをかすめなければいけないため直接フィールド移動して行き来するプレイヤーはほぼいない。狩場、フィールド出現モンスターのレベルは半端ない。85を越えないプレイヤーは近づくべからず。
クリュウ、アマイズル、デルタで正三角形。直線距離は同じ。アマイズル方面は海。港まで地上移動で一週間。潮や風の関係でデルタからアマイズル、アルファ方面への出航は難しい。近距離の漁くらいは可能。蒸気船ができれば変るか？クリュウ、デルタ間は地続き。道なりで三週間。狩場、フィールド出現モンスターのレベルは半端ないので上級者のみ行きましょう。

閑話　位置関係（後書き）

ゲーム世界ということでフィールドマップはなるべく印象的なものがいいと思い設定してみたんですが、なーんか読み飛ばしている？って思えるような質問が多かったので。

今後位置関係に関する質問は返答しません。一人一人に答えるの疲れました。

「定期便といやあ、今作ってる蒸気機関だけどよ、ベータまで蒸気機関車通さねえ？　荒野をひた走る蒸気機関車、浪漫じゃねぇ？」
オキナガさんが夢見る少年のような顔をしました。
「確かに」
ジョンさんが以下同文。というか、あっちこっちでその場面を妄想しているらしき人がいます。
ヴォルグさん、あなたまで。
「却下」
「って、なんでだよ！」
「蒸気機関車なら線路を引かないといけませんよね？」
「おう。線路の上を走る蒸気機関車、浪漫だろうが」
懐古趣味でもあるんですか？
「線路の上になにか置かれたりしたら大事故になる可能性がありす。治安のいい日本でも自転車を放り込んだり、線路の上に石を置いたりする不届き者がいるんですよ。モンスターも徘徊するこの世界ではリスクが大きすぎないですか？」
「ああ、そうか……いいと思ったんだけどなぁ」
線路の上に石を置くぐらいやりかねない知恵のあるモンスターもいるので。ゴブリンくらい出ます。単体のはぐれゴブですが。
まあ、僕ら１００レベルのプレイヤーからしたらたいして脅威ではないのですが。僕だったら眠らせます。ソロの新人さんにはきついでしょうね。ちょっと育ったパーティがちょっとした冒険をするのにいい、みたいな感じでデザインされているのですよ。
問題は距離ですね。直線距離にして馬で一週間、アルファ、ベータ間は比較的なだらかな地形として設定されてますが、それでも迂回しなければならないところが多少あります。馬で二週間くらいですかね。

「んじゃ、馬車とかですねぇ。護衛つけて」
「幌馬車ですか。それはそれで西部の開拓時代のようですね」
スリフさんが嬉しそうに言います。
「別に馬じゃなくても召喚生物に引かせるって手もありますよね～」
嬉しそうですね、コロンくん。ベータとの定期便についてイロイロ夢が膨らんでいるようです。
「蒸気機関については予定通り船から始められては？　これ、頼まれていた“湧く水精石”と“火精の石”です」
僕は頼まれていた“湧く水精石”と“火精の石”をジョンさんに渡しました。
「おう、ありがとよ」
蒸気機関というものは水を熱し、そこから出る水蒸気の力を利用するものです。それで必要なのが熱と水です。かつての蒸気機関は燃料として大量の石炭と水を必要としました。そのためどうしても大型にならざるを得ないのです。
“湧く水精石”と“火精の石”は錬金術師が作れるマジックアイテムで“湧く水精石”は水筒に入れておけば常に水が満たされるというものです。水場が見つかりにくい冒険の場合とても重宝します。“火精の石”は封呪しておかないと常に熱を発し続けるという薪や石炭代わりになるものです。水と燃料はわざわざ高価なマジックアイテムを使わなくとも普通のを使ったほうがいいのであんまり流通してない代物です。これを使えば水のタンクや燃料用の保管場所がコンパクトにできるのではないかと思います。
蒸気船の開発はいまや生産系ギルドが総出で取り組んでいる一大プロジェクトです。これには戦闘系からも参加している人がいます。
「あしゃあ、こう見えてもリアルで船舶免許もっとるがよ！　商船高専もでとるんじゃ！　帆船にも半年ゃあのったがよ！　船んこつぁ、詳しいぜよ！」
『東方記』所属リョウマさん。

「自分、戦艦の構造に詳しい自信あります。ぜひプロジェクトに参加させて欲しいであります！」

『銀狼騎士団』所属の釜本氏。などなど要望が相次ぎました。

…………海軍作るつもりですか？　と聞いたところ

「べらんめえ、巨大からくり（メカ）は漢の夢だろうが！　車に蒸気機関車、巨大戦艦に無敵要塞、ロケット、巨大ロボット！」

このような返事が帰ってきました。

最後のひとつは実現不可能です、オキナガさん。

「これははずせねえ、漢の浪漫だろうが」

僕、女なので分かりません。

現在アルファではイロイロなものが再現されています。つい先日老師のもとに『B・スミス』『フェアリーリング』『ドラッカー』の連名で足踏みミシンが送られました。下着レシピの礼だそうです。

よろこぶ老師のもとに依頼が来ました。

「セクシー下着作っておくれ。二倍、いや、三倍だすよ！」

「セ、セクシー下着ですかにゃ！　にゃんで？」

「あたしがあんな『ミセパン』なんていう可愛らしいもの、にあうわけないだろ？　衣装に合うセクシーなの頼むよ。造れるよね。作るよね？　断ったら承知しないよ！　ゴラァ！」

最後のほう漢に戻ってますよ、蘭姐さん。

老師がこの依頼を受けたのかどうかは個人情報になりますので伏せさせていただきます。

僕もあるものを造りました。

『コモン』の女性にあるものをお聞きしたところ中世に使ってそうなものが出てきました。

そこで僕が改良を加えました。

マジックアイテムにですね、『符』というものがあります。一種類の魔法をこめることができます。これに“浄化”という魔法をこ

めまして、あるものを造りました。使い方は女性と僕の秘密です。
女性の月々のお悩みを解決するものです。
知り合いの女性に試してもらったところ、大変好評でした。漏れないし臭わないそうです。『キノクニ屋』の下着屋の女性の売り場の片隅に置かせてもらいました。マーケットに流すのはさすがに恥ずかしいです。
大変御好評をいただいております。
どうやらこの世界でも女性は妊娠可能なようです。気をつけてください、マリー、蘭姐さん。人事ではないのですよ。
ああ、恐ろしい。
このようにゲームだった時代では必要のなかったものが必要となり造られています。

ベータへの対応がきまり、会議はお開きになりました。さっそく長期の（いつ帰ってこられるんでしょうね？）出張に備えやる気マンマンのスリフさんがお帰りになりました。
たぶん、ベータでギルドキャッスルを買われるのではないでしょうか？
そうすれば『フェアリーリング』もベータへ行き放題です。その方が都合がよろしいでしょう。
ギルドキャッスルは高価ですが、利益がそれに勝ればよろしいのです。
気がつくとレオーネさんがヴォルグさんにぼやいておられました。
「なあ、低レベルのプレイヤーってホント、弱いのな。おれらもあんな弱かったわけ？　もー覚えてねえよ。もー弱すぎて、壊しちまいそうで、おっかねえよ。おまえらよくあんなのいっぱい、抱え込んでるよな」
「……なにをした？」
「……稽古で力加減間違えて、ちょっと瀕死にしちまった」
ちょっとで瀕死にしないでください。

『黒獅子騎士団』は初心者の受け入れを表明したため数人の新人が入りました。低レベルです。育てようとして——失敗したようです。それでやる気なし状態だったんですね。落ち込んでおられたんですか。

「それで？」

「……責めてくれりゃあ、こっちも気が楽なんだけどよ～。キラキラした目ぇして、自分が弱かったのがいけないんです、鍛えてください、とか言われちまってよ～」

がりがりと頭をかきむしられます。

「あ～、おっかねえ！　期待にこたえてやりたいのは山々なんだけどよ～、殺しちまうんじゃないかと思うと、おっかなくてよ～」

強者の悩みですね。手加減の具合がわからないと。

「うちで預かろうか？」

「それがよ『黒獅子騎士団』で強くなりたいっていいやがる」

もしかしてアノ初心者くんでしょうか？　慕われましたね～。

「では、合同訓練ではいかがですか？」

「クロウ？」

「“黒の錬金術師”」

「うちも二人ほど新人が入りました。僕らとはパーティバランスが悪いので、『銀狼騎士団』の訓練に混ぜてやってください。釣り合いの取れる人と組ませてもらえませんか？」

ダイくんとサムくんのレベル上げにちょうどいいです。

「それなら——」

「そやったら、『お茶会』も混ぜてんか？」

ヒマ姐さんが参加しました。

「治療系は単体やとレベル上げにくいねん。パーティ組ませてもらえるとありがたいわぁ。うちの新人レベル一桁なん」

「かまわない。明日にでも来るといい」

そういうわけで『ルナティック・ハッター』『黒獅子騎士団』『お茶会』『銀狼騎士団』の合同訓練が行われることになりました。

さすがに太っ腹です。

　さて、実は密かに総力を挙げてある作戦に取り組んでいました。うちもアマクサを貸し出しております。

　ガンマーでの人身売買被害者――奴隷として扱われている『コモン』と低レベルプレイヤーの救出です。

　『ガンマー砦（銀狼騎士団のギルドキャッスル６００人対応型）』を拠点に『銀狼騎士団』が下準備を進め、『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』そのほか召喚師の有志を乗せた『キノクニ屋』の“空飛ぶキャラバン”が超特急でガンマーを目指して移動しました。

　作戦は僕がやった『音楽隊』での救出作戦の変形です。

　囚われている低プレイヤーにも念話リストいうものがあります。それで人身売買と関係してない知り合いに助けを求めたので、そのプレイヤーさんを介して連絡を取り合いました。念話の使えない『コモン』さんには召喚師が召喚した召喚獣の中で“幻卯”のようにどこにでも入り込める特性を持ったものが連絡を取りました。

　けっこう何種類かいるんですよ。

　そして決行日には幻術などを駆使してもらってとにかくギルドホームを出る。さすがに会館を買い取るわけにはいかないので、後は人海戦術です。

　『銀狼騎士団』『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』など名だたるギルドの面々が被害者を囲って脱出します。プレイヤーは会館でいずれかのギルドに一時的に加入し、その場で“帰還呪文”でアルファのギルドキャッスルまでテレポートします。『コモン』の皆さんはそのまま『キノクニ屋』の“空飛ぶキャラバン”で逃亡します。

　それで帰れる場所のある人は護衛つきでそこまで送り返します。帰れる場所のない人は各自相談ですね。手に余るようなら本部に連絡となります。

　単純な作戦ですが、うまくいくといいですね。

僕はこの作戦がある大きな流れを産むとは考えていませんでした。というより、流れはすでにあり、僕らがそれを知ったのはそのときだったと言うべきでしょうか？

身内のおしゃべりの結果合同訓練がきまりました。お開きになりましたので帰ることにします。

「脳内ウィンドゥ呼び出してください。“帰還呪文”クリック。まだ実行押さないでくださいね」

初めて“帰還呪文”で領地に帰るダイくんとサムくんに“帰還呪文”での領地に帰る方法をレクチャーします。

「目的地がアルファになってますよ」

「小さな三角が両端にありますよね？　そこをクリックしてページをめくってください」

「あ、『陽だまり村入り口』になりました」

「それで実行を押すと領地まで帰れます。“帰還呪文”の目的地の一番最初はホームタウンです。ページをめくると領地が出てきます。分かりましたね？」

なんだか感激したような顔をしてます。どうしました？

「ぼく達『ルナティック・ハッター』の一員になったんですね」

「そうです。帰ったらお祝いしましょうね」

『ありがとうございます』

こうしてその日の夜はパーティをやりました。

ご馳走食べるほうのパーティですよ。

翌日から双子は『銀狼騎士団』の低レベルプレイヤーの訓練に混ぜてもらいました。二人のために装備を用意しました。

「これは新しい身代わり人形です」

サムくんに身代わり人形を渡しておきました。

「前のと違いますね」

「前のは３０００ダメージ引き受けられるやつでしたから。君達の

レベルだと耐久力使い残してしまいますから、ランク下げました。
使い残しは副作用が心配です」
術を施した「身代わり人形」が攻撃されると指定された人物にダメージがいくので取り扱い注意。
「なるべく使い切るよう調整してください。訓練終わっても術を施した人形が残った場合はディスペルすること。使い物にならなくなりますが、扱いに注意しなければならない人形が残るよりましです」
「はい。気をつけます」
こうしてダイくんとサムくんは合同訓練でレベル上げに行きました。
がんばって一人前になってくださいね。

ガンマーの救出部隊から作戦成功の連絡がありました。プレイヤーさんはアルファで保護しました。

え？　ギルドに入っていないプレイヤーさんとか『コモン』は出禁解けないじゃないのかって？　実は『コモン』の皆さんは室入出指定の対象にならないのです。ゲームの世界では『コモン』がギルドホームに入り込むなどというプログラムされていないことが起きるわけがなかったので、想定外なのですよ。

プレイヤーさんの場合はですね、ギルドホームのひとつを短期で借りまして、戦闘禁止解除しておきます。そこにですね、目当てのギルドの下っ端の方をこっそり招待しまして、“恐怖の女王”南さんを初めとして『銀狼騎士団』『黒獅子騎士団』『グリーン・フラッグ』の二つ名もちの超有名な方がずらっと並んで取り囲み、誠意を込めて説得いたしましたら、皆さん快く協力してくれたのです。

いやあ、話せば分かるものですね。誠意が大事です。誠意が。けっして「おどし」とか「きょうはく」とかのルビをいれてはいけません。

しかし、それから『コモン』さんを送っていった護衛隊から戸惑ったような連絡があったのです。

「村が消えた？」

『正しくは消えたのは村人です。村が無人になってます。家はあるんですが、どこも空っぽで。家畜小屋とかもです。畑とか野菜が野生化してますね』

「死体は？」

『ないです。てゆーか、消えますから。お嬢さん方どうしましょう？』

「相談してくれ……縁のある村があるならそちらのほうか、アルファで保護するかだ」

『アイサー』
念話を打ち切ったヴォルグさんに話しかけました。
「村が消えましたか」
「……モンスターに全滅させられたのか？　クエストを引き受けてなかったからな」
「違うと思いますよ」
確かに“大転移”以降プレイヤーはそれぞれのタウンに引きこもることが多く、日帰りでいける狩りには出かけても『コモン』のクエストを引き受けることがなくなりました。そういう村は存在するかもしれませんが、この場合は別の脅威のせいでしょう。
「心当たりがあるのか？」
「ええ、おそらくは――」
そこで別の護衛隊から念話が入りました。
「村を捨てる？」
『はい。なんでもたび重なる強盗団――ガンマーのギルドのことです（小声）――の襲撃に堪えかねまして、村を捨てる決意をしたそうです。さらわれた村娘が戻ってきたんで、それを追いかけてやつらが来るのを恐れてますんで。で、動かせるモンは抱えて逃げるつもりらしいっす。で、新天地までの護衛頼まれちまったんですけど、どうしましょう？』
「…………」
ヴォルグさんがショックを受けているようです。これくらい予想しておいてください。
僕が念話をかわりました。
「新天地の当てはあるんですか？　すでに用意していたとか？」
『いえ、全然当てはないみたいです。どっかガンマーから離れたところで一から開拓しなおすそうなんで』
「人数は？」
『20戸の小さな村です。100人もいません、えっと80人くらい？（誰かに聞いているらしい）』

「では、他の護衛隊にそちらに集まってもらいます。護衛隊が集結するまで出発は待ってもらってください。『キノクニ屋』の“空飛ぶキャラバン”でアルファまで連れてきてください。保護します。それまで村を護衛できますか？」

『はっ、お任せください』

そんなわけで連絡してその村に行く当てのなくなった『コモン』さんや護衛、『キノクニ屋』のキャラバンを回してもらいました。

「予想外でしたね」

重々しく公潤さんが息を吐きました。

「そうですか？」

「あン、『ルナティック・ハッター』の、おめえ予測してたんか？」

「ええ、そういうこともあるだろうなとは」

オキナガさんの言葉に僕は頷きました。

「というと？」

「僕らプレイヤーは『コモン』から見たら化け物ですよ。『コモン』は一般兵士で30台のレベルがやっとです。ところがプレイヤーは中級でそれを遥かに越えます。『コモン』にはどうしようもないほど強いモンスターを当たり前のように倒す『化け物』です。そういうのが徒党を組んで頻繁に襲ってくるんですよ？　財産を奪い、娘を浚い……ときには村人を手にかける。自衛しようにも『コモン』にはどうしようもありません。逃げられるなら逃げるでしょう？」

「もう役割を演じるだけじゃねえってことか。『コモン』が村を捨てるたぁなぁ」

「『コモン』が当たり前の人間になったというのは理解していたつもりなんですが……まだ理解が足りなかったようです」

公潤さんの苦悩がめにみえるようです。重々しい空気を背負っています。

「我々は彼らにどう償えば……」

「そこまで責任負えません」

プレイヤーのしたこと全責任を負う必要ないと思います。

「助けることはできます。でもそれは償いではないですね。そもそも我々がガンマーのプレイヤーのしたことの責任をとる必要がどこに？　たとえば、日本のどこかで誰かのしたことを、同じ日本人だからといって関係のない人が償う必要がありますか？　それをしでかした人が償うべきですね」

「…………そうなんですが…………」

「人道的な見解に則って支援はしますよ」

「んじゃ、どんな支援するん？　住むとことか、食べるものとか」

ヒマ姐が具体的なものを心配しました。

「またどっか用意するか？　あ〜スリフ出すんじゃなかったぜ」

ガリガリとジョンさんが頭をかきました。スリフさんはベータに長期出張中です。

「だがよ、『コモン』だろ？　どうすんだ？　プレイヤーみてえにはできねえだろう？」

「物資を渡してもそれで助けたことにはならんだろうな」

レオーネさんとロビーさん（デルタの遠征帰りです）が首をひねります。

「身を立たせなきゃならないんだろ？　難儀だねえ」

蘭姐さんが眉をひそめます。まあ、村人ですから。冒険者にはなれません。

「僕が引き受けましょうか？」

「いえ、そこまでひとつのギルドに負担をかけるわけには……」

「て、大丈夫なん、クロちん、そないなこと言うて」

「大丈夫か、大丈夫じゃないかを聞かれれば、あんまり大丈夫じゃありません。しかしお忘れですか？　『ルナティック・ハッター』は領地システムを使っています。住居ならあまってます」

「そういえば２００人対応型だったな、あの館」

「なんでそんなこと知ってんだ、ヴォルグ」

「………」

領地というのはキャッスルの変形なのです。館は一番小さいので200人対応型。お値段は同じ規模のキャッスルを買う場合の1・5倍ほどします。僕らはその館を五人で使っているので部屋が余っています。これに兵舎、使用人の棟もあるので200人は軽く受け入れられます。

「僕らが彼らを雇いましょう。ちょうど荒地を開墾したいと思っていたところです。一年、お金を出して雇います。その後は彼らに決めてもらいます」

「というと？」

「ひとつは、陽だまり村を足がかりに自分達の開墾村を作ること。アルファ周辺ならモンスターの出現率も低いし、レベルも低いです。これもひとつの選択。ひとつは、陽だまり村に家を建て田畑を作り陽だまり村の住人となること。僕らの領民になってもらいます。これもひとつの選択。ひとつは、このまま僕らに雇われ使用人になること。これもひとつの選択です。この中から選んでもらい、一年がかりで準備させます。どうでしょう？」

「妥当だとは思いますが……『ルナティック・ハッター』への負担が大きすぎませんか？」

公潤さんが僕らを心配してくれるようです。

「先行投資だと思えばいいです。ゆくゆくは僕らにも得になることですから」

こうして陽だまり村に新たな住人が来ることになりました。

この流れは止まらず、結果的にアルファの周辺にいくつかの村ができ、陽だまり村の戸数も増えました。『銀狼騎士団』ガンマー砦が駆け込み寺のような役割を果たし、ガンマーのギルドと睨み合うようになってしまいました。

しかし、この事態による結果はこれだけではなかったのです。

「人が増えている？」

『そうなんすよ。低プレイヤーさん逃がしたもので、減っているは

ずなんすが、数十人程度ガンマーの登録者増えてます。ここがこういうところだって、念話ネットワークで知れ渡っているはずなんすけど』
「そういうニーズもあるって言うことでしょう。アルファやベータから行こうと思えば行けないことはないです」
　元ＰＫさんとかかも知れませんねー。アルファに居場所がなくなった彼らが向かったのかも知れません。
『それから、これは自分の思い過ごしかもしれませんが――』
「なんだ？」
『食料の流通が若干滞ってんじゃねーかと。マーケットの食料品が減ってきているような気がします。野菜とか果物とか。米、麦なんかの主食はそうでもないんすけど。肉や魚はかわんないっす。気のせいっすかね？』
「報告ご苦労。監視を続けてくれ」
『アイサー』
念話を打ち切ったヴォルグさんが僕に向き直りました。
「どう思う？」
どうして僕に聞くんですか？
「流通の滞りは事実でしょう。僕は以前に『『コモン』がいなければタウンとしての機能を失う』と言いましたよね？　ガンマーがそうなりつつあるということです」
「どういうことだ？」
「タウンは消費型の都市です。では、その消費される食料はどこから来るんですか？」
　これくらい分かりますよね。
「タウンの外？　……村！」
「そうです。会館の『コモン』のマーケットはタウン周辺の村から食料品の買い付けをしているんです。これは会館の職員に確認しましたので確実です。ところが、ガンマー周辺にある村はたび重なる強盗団（ガンマーのギルド）の襲撃に逃げ出しています。つまりは供給源を自らなくして

いってるんですよ」
　ざわざわと会議場が騒がしくなりました。
「米、麦は一時期に大量購入して保管してあるものなので一年は持ちます。魚、肉などはプレイヤーが供給できます。しかし、野菜、果物は保存が効きにくいです。生鮮食品が品薄にもなるでしょうね」
「それは……大変なことになるのでは……」
　公潤さんはお優しいですね〜。自業自得のガンマーのプレイヤーを心配してあげるのですか。
「もうなってます。ただそれに気付いていないだけです。最悪の場合、ガンマーには食糧危機が起き、会館の職員を含むタウン住みの『コモン』が逃げ出し、ガンマーの都市としての機能がストップします」
「………………どうにかできねぇのか？」
　レオーネさんが呟くようにおっしゃいました。
「どうにかとは？　我々はすでにガンマーの有力ギルドに対して人身売買と強盗などの行為について抗議していますよね？」
「ええ、返事ははかばかしいものではありませんでしたが……」
　公潤さんが沈うつに呟きました。
　罵声しか帰ってこなかったそうです。邪魔するなとか、うるせえとか、勝手だろうとか。その好き勝手振舞った結果がこれです。
「こっちがなにを言っても同じだと思いますよ。会館の食料が尽きるまで。どうしようがあります？」
　皆さん黙り込みました。
「なるほど『コモン』との関係は大事だな」
「ええ、手遅れになる前に気付いてくれることを祈りましょう」
　人は一人では生きていけないのです。
　種は蒔いて育てなければ実を結びません。
　たとえ今蒔いたとしても収穫まで長い時間が必要です。
　誰かが作らねば、そこにはなにもないのです。
　彼らがそれに気付いたとき、どうするでしょう？
　手遅れでなければいいですね。

波紋の三　栄枯盛衰（後書き）

クロウ、優しいんだか厳しいんだか。

ミリオン戦闘におけるクロウ・リーについて　ギルド『かわらばん屋』

ここでユグドラシル発足の影の功労者と言われるクロウ・リーについて伝えたいと思う。

クロウ・リーとは何者か？　ギルド“ルナティック・ハッター”のギルドマスターである。メイン職業は補助魔法使いでありサブ職業は錬金術師である。

“ルナティック・ハッター”は僅か五人（現在では二人増えて七人）の零細ギルドであるが、普通１００人を超える大手ギルドでなければ使用しない領地システムを使っている風変わりなギルドである。

本来一桁の人数のギルドは宿屋を拠点とするか小さなギルドハウスを拠点にするのが普通だが、彼のギルドはいきなり領地を持ってしまったのだ。彼らは名だたる二つ名もちでもある。

“老師”ソウセキ。

“贋物”マリアンネット。

“鉄壁”ジュネ。

“憑くもの”アマクサ。

そして“黒の錬金術師”クロウ・リー。

少し聞くだけではクロウという名と錬金術師というサブ職業でつけられた二つ名のようにも思えるが、そうではない。

ではここで“黒の錬金術師”の名を広く伝えたあのミリオン戦闘について語るとしよう。

ミリオン戦闘――それは一年に一度運営側が主催したイベントである。

クエストの内容はシンプル。

“封印されし都”の一部の封印が解かれ、神託が下される。プレイヤーは特定の陣営に属し時間までにその地点に達し、下される神

託を受け取ること。それを雇い主に渡せばクリア。莫大な報酬を受け取れるというものだ。
なお時間に下った神託をプレイヤーが手にした時点で“封印されし都”には再び封印がされ、“封印されし都”にいたプレイヤーは全て依頼主の住居に強制転移させられる。
この場合最大の障害となるのはモンスターではない。別陣営に雇われたプレイヤーである。この依頼者は同盟を始めいくつかの国から複数選ばれる。神託はひとつでありそれを奪い合うことになる。
そう、このイベントの趣旨はプレイヤー同士の大規模戦闘なのである。
あの有名プレイヤーと戦ってみたい。名を上げたい。そういうプレイヤーのためのイベントだ。
なかには日ごろ入ることのできない“封印されし都”に入れるということで、戦闘そっちのけであたりの探索や地図作りに励むプレイヤーもいるという。（そのため“封印されし都”の様子もある程度知られている）
だがクロウ・リーはこのときある陣営に属していたがその戦法は『撹乱』『封じ込め』『無力化』『足止め』であった。
『符』というマジックアイテムがある。一種類の魔法をこめて本人以外でも発動させられるというものだ。また、『びっくり箱』というマジックアイテムがある。一種類の魔法が込められ、一定時間または特定の条件付けで中に込められた魔法を発動させられる。
いずれも安価かつ低レベルのものだが、クロウ・リーはこれを戦場にばら撒いたのである。
たとえば『妨害』。索敵を妨害するだけの魔法である。この魔法は普通は奇襲を仕掛けたいときにかける魔法だが、逆にこの魔法がかかっていれば（小マップの妨害、索敵ができなくなる等で分かる）敵がどこかに潜んでいて奇襲を狙っているとわかる。
クロウ・リーはそれを逆手に取った。
どれだけのプレイヤーがいもしない敵を警戒し足止めを喰らった

ことか。頭脳派ほどこの心理トリックに引っかかった。
凶悪なのは『びっくり箱』である。誰もいないと安心して進軍すると、突然発動する『眠りの霧』『愚か者の罠』『毒沼』などの無力化系魔法。まさに地雷。
『眠りの霧』で眠らされた仲間をディスペルで起こそうとしたとたん、時間差で二つ目の『眠りの霧』が発動することすらあった。
鬼か、あんたは。
「早く起こしてくれ〜」
「二次災害だと！　謀ったなぁぁぁあ！」
「こんなやられ方はいやだ〜（ＴＴ）」
「ディスペル！！　ディスペルをぉぉ！」
「治してくれ〜。俺に戦わせろ〜」
「ちくしょう！　どこのどいつだ！　真っ黒だろ！！」
等の悲鳴が響き、ディスペルが飛び交った。かつてこれほどディスペルが飛び交った戦場があっただろうか？　なかにはディスペルを使いすぎてＭＰがなくなった魔術師系もいる。
恐らくそれも狙いの一つだったのだろう。
ディスペル多用によるＭＰの枯渇。これにより治療系はもとより魔術師系の魔法も封じられた。

また『妨害』と“憑くもの”アマクサの幻卯の幻術を組み合わせ誘導し、別陣営と別陣営を鉢合わさせ潰し合わせた。
卑怯といわんか？　これは。
圧巻は誰もがネタアイテムとしか思わなかった『伝説のハリセン』(正式名称である）と盗剣士の組み合わせである。
『伝説のハリセン』とは叩かれたものはスパーンという小気味よい音とともにダメージの有無に関わらず三ヘクサ後へすっ飛ぶ（移動する）というだけのマジックアイテムである。
盗剣士のスキル連打は使えないが、その敏捷性をもってすれば普通の連打はできる。叩かれた数×三ヘクサ分だけ後へ飛ばされるの

である。先頭の戦士が叩かれれば、後列を巻き込んで連打×三ヘクサ分飛ばされる。なにがあってもきっちり移動する。魔法なのでとまらない。とにかく触れれば魔法の発動条件が満たされるのだ。剣でも盾でも鎧でも。

「こんなんありか〜」

「こんなやられ方はいやだ〜」

「ハメ技だろ、これは！！」

「卑怯者〜」

「まっとうに戦え〜」

「戦わせてください！　お願いします！」

「負け獅子の遠吠えですにゃ〜」

「またいらしてねん（はーと）まってるわん（投げキッス）」

観戦モードの不参加ユーザーがパソコンの前で腹を抱えて笑っていたことは想像に難くない。

おまえら鬼だろう。

“鉄壁”の名を関する守護者が背後に控えていたこともあり、けっきょく“ルナティック・ハッター”は任されたところを守りきり突破されなかった。

むろん、この作戦は同陣営に『銀狼騎士団』が所属していたからこそ成り立っていたといえる。

まっとうな攻略は『銀狼騎士団』に任せ、自分達はひたすら対立陣営の足止めに徹したのだ。『銀狼騎士団』と『東方記』のニアミスもあり、“狂戦士”ヴォルグまたは“恐怖の女王”南と“疾風迅雷”沖田ソウまたは“氷闘鬼”トシゾウとの対決を期待したユーザーも多いだろうが、あいにく小競り合いに終わりこのカードが実現することはなかった。

神託はけっきょく『銀狼騎士団』が手にいれた。

この戦いにおいてクロウ・リーは稀代のトリックスター“黒の錬金術師”として名を知らしめる。

その戦いぶりを耳にした『銀狼騎士団』幹部は「敵に回したくないものだな」と呟いたという。

ギルド『かわらばん屋』の記事抜粋。

（後書き

ミリオン戦闘におけるクロウ・リーについて　ギルド『かわらばん屋』

一番始末に終えないのは全部ルール内だと言うことです。
「え～ルール違反なんかひとつもしてないですよ」（クロウ談）

沖田くんとトシさんの二つ名初公開。

『伝説のハリセン』入手方法。

とある夫婦喧嘩の仲裁をせよ。

トアル攻撃力が洒落にならない種族（本人達の名誉のため伏せる）の夫婦が喧嘩を始めた（夫が一方的に『伝説のハリセン』でしばたかれる）。夫が夫婦の記念日をころっと忘れていたのだ。
プレイヤー達は夫からの依頼で妻のご機嫌を取るためのアイテム入手を依頼される。アイテムは食材やら宝石やら六種類の中からランダムにきまる。いずれも入手難易度８５～９０。依頼を受ける際も妻の乱入あり。この場での仲裁は不可能。依頼主を見捨てて喧嘩に巻き込まれないよう避難せよ。（酷っ
期間内にアイテムを入手できると夫婦は仲直りし、プレイヤーに報酬ともう喧嘩をしない証として妻より（夫をしばき倒していた）『伝説のハリセン』を譲られる（一本のみ）。
期間内にアイテムを入手できないとミッション失敗で報酬も『伝説のハリセン』も受け取れない。だがアイテムを入手していればマーケットで売りさばくか会館で換金できる。レベルが高いものなのでけっこういい儲けにはなる。
その場合夫婦は破壊しつくされた住居の瓦礫の中で勝手に仲直りしている。

年に四回しか発生しないクエストで、『伝説のハリセン』も十二本は出回っていないというレアアイテムである。

トアルこのアイテムを入手したギルドの会話。

「この『伝説（きけんぶつ）のハリセン』どうしますにゃ？（汗）」

「……僕達が保管しましょう。世間に出すにはあまりにも危険です」

波紋の四　技術革命の道（前書き）

長いので二話に分けました。

蒼い空に風をはらんだ白い帆がはえます。白波をたて優美な船体が進んで――

「って、なんで帆船なんですか！」

僕達はアルファの街から見て東の方向にあるとある入り江にきておりました。ここには小さな港町があります。道なりで一週間かかるのですが、有志のギルドにより定期便が作られました。それが有翼の召喚獣によるものなので最短距離を馬の三倍ほどの速さで進むため半日かかりません。

『クリエイト・ミレニアム』がゲームだった時代、（運営の都合で）なるべくスペースを広く使うため山やら渓谷やら森を配置して蛇行するようにデザインされた道ではありますが、現実となった今では別に道を通せるのではないかと道路工事の経験があるという『タイマーズ』など一部の有志ギルドが工事に着手しております。自治組織から補助金でました。開通すれば報奨金も出ます。いずれ地上移動でももっと短時間での移動が可能になるかもしれません。

もともとアマイズル行きの船が出る港ですが、そこに〝ユグドラシル〟が購入した造船所兼乗組員養成所があります。神戸海軍塾と名づけようとした人もいましたが、神戸ではないので却下されました。

マニアですね。

けっきょく養成所とのみ呼ばれております。

「おう、見学かい？　ご両人」

オキナガさんが声をかけてきました。

「あれはなんだ？」

ヴォルグさんが聞きました。

「練習航海だぜ」

「ここは蒸気船を作っているのではなかったんですか？」

「おう。だからよ、ベースはあれと同型なんでぇ。できる前に乗りなれておかねえと。トウシロが操船なんぞできるわけねえだろ？　リョウマの野朗が経験者でよかったぜ」

『東方記』のリョウマさんは船舶免許をお持ちでさらに商船高専の出身で帆船の経験もあります。どうやら甲板で色々指示しているのがリョウマさんのようです。

「機帆船（機械と帆の両方で走る船のこと）ですか？　純正の蒸気船ではないのですね」

「べらんめえ。この世界にゃあ蒸気船なんて概念はねえんだぞ。トウシロがうろ覚えでひいた設計図でトウシロが一から手で作るってか？」

「…………それも恐い話ですね」

この世界では職人としてスキルがあるとしても、手で作るのなら本人の経験がものをいいます。そういうなら高レベルの大工であろうと素人ですね。

「大工んなかに船のレシピ習得している奴がいてよ、メニューで造った船を改造することとんなったんでぇ。もともと『クリエイト・ミレニアム』は海洋クエストにあんま力入れてなかったんだが、Ｐｅｔａｌでトーア諸島が追加されただろ？　それにあわせて色々な航海用アイテムが追加されてて助かったぜぇ」

なるほど。確かに素人が一から作るのは恐いです。

もともと『クリエイト・ミレニアム』では船はアマイズルまでいくためだけのものでした。船も『コモン』が動かすものであり、プレイヤーは船主にはなれましたが、船員にはなれなかったのです。

しかし最新拡張パックでアマイズルとガンマーとで正三角形を作る位置にトーア諸島が追加されました。アルファから見て真東の方向になります。海洋クエストを増やすつもりだったのでしょう。それにあわせて船の種類や必要なアイテム、そのレシピなどが追加されました。それを流用するつもりのようです。

もう一度入り江を走る帆船を見ました。三本のマストにそれぞれ

縦帆が張られ、船首のマストにだけ二枚の横帆が張られています。実に優美で美しいです。
「トップスル・スクーナーですか？　スピード重視？　バーク船の方が練習用には向いているのでは？」
「ああ？　積載重視だとでかくなんだろうが。試験型だぜ？　馬力がな」
なるほど。
「蒸気機関を乗せたら帆がたたみっ放しになりますね」
「おおよ。邪魔んなるからな。けど、マスト切っちまうわけにもいかねえしな。知ってるかい？　日本に来た黒船は実は一週間分しか燃料炭がのせれなかったんだぜ。だもんで実は帆で航海してたようなもんさ。こっちはおめえさんが造った“火精の石”があるモンでんな心配はないけどよ、いざというときのため操帆ぐらいできるようにならないとな」
この燃料というのは大きなファクターです。西部劇の映画などを見れば分かるでしょうが、蒸気機関車は一両分の石炭を積んでおります。タンクも大きく、燃費が悪いことがよくわかると思います。このため蒸気船は長いあいだ「遅い船」だったわけです。やがて補給地が整備されるまで帆船が大海原を駆け巡っていたのです。
しかし“火精の石”は十年ぐらい品質保証できます。“湧く水精石”があるので航海にありがちな水の心配もありません。無補給で長期行動が可能。
「どうですか？」
「蒸気船なら、改造型の機帆船はもう少しで実験航海できるぐらいにはなるぜ。手で作っている純正の蒸気船ならまだまだでぇ。乗組員は――いちおう船舶操縦士免許持っている奴が三人いるんだけどよ、帆船経験のあるやつはリョウマ一人だぜ。あとはやる気はあるけどトウシロばっかりだ。順風の時ならともかく、切りあがりはまだ無理でえ。タッキングもそうだがウェアリングでも裏帆を打ちやがる。こんな感じだな」

聞いた話ではマストに登って「俺は×〇王になる！」と叫んだ人もいるそうです。引き摺り下ろされて説教されたそうですが。

海〇はだめです。〇賊は。

舵輪を握り締めて「〇×の海は俺の海」と叫んだ人もいるそうな。引っぺがされて説教されたそうですが。

海〇はだめだとゆうとろうが。

マニアですね。

やる気はあるけど腕が追いついていないということでしょうか？海〇×になる前に使える船乗りになってください。

帆船は帆で風をはらんで推進力にしております。ですので風と潮の流れに大きく左右されます。一日千里、五里二十日といわれているそうです。風さえあれば千里でも一日でいけますが、風がなければ五里進むのにも二十日はかかるという意味だそうです。

帆船は風によっては進めない方向ができます。むろんこれは向かい風なわけです。逆に真後ろからの風だと一番後ろの帆だけが風をうけとめることになります。これもよくないそうです。一番いいのは斜め後方からの風だそうな。

逆風でも斜めになら進めるそうです。これを切り上がりといいます。なので帆船はジグザグに進むそうなんですが、この船の向きを変える操作をタッキング、ウェアリングというそうです。裏帆を打つとは帆の裏に風が当たるというか、風を逃がすことで、こうなると船は止まります。

まあ、蒸気機関がつけば関係ありませんが。

もともと蒸気船が発達したのは人間が作り出した運河（スエズ運河）がほとんど無風だったためです。蒸気船でなければ通れないわけです。

大海原を航海するのを前提とした帆船と違い最初から運河を通るための設計がされました。マストがないため重心を下げるためのバラストもいらず、喫水が浅くていい船が造られたわけです。運河も船が通ることを考慮されて跳ね橋が作られたわけですが、蒸気船の

概念のない『クリエイト・ミレニアム』の世界ではそんな仕掛けはないわけで、川を遡れば橋にぶち当たりますね。
まあ、その前に流れに逆らって進むのは素人にはきついですよ。水の力を舐めてはいけません。
「ああ、裏帆打ちやがった」
船が方向を変えようとして止まってしまったようです。
「さっさと立て直せ！　あん？　おいらはオキナガだ、勝先生じゃねえよ」
乗組員と念話していたようです。誰と話していたか分かるような気がします。
「大丈夫なんですか？」
「召喚師も乗ってんだ。風の精霊でもよびゃあすむことだ。まあ、最後の手段だといってあるがな」
……ひょっとして蒸気船とか必要ないんじゃないでしょうか？
「まあ、万が一のことがあっても全員プレイヤーでぇ。復活するぜ」
……小型ボートは積んでありますが、救命胴衣の代わりになるものも考えましょう。
まあ、万が一のことがあっても大聖堂に転移されるだけってことでしょうが。
がんばってください。
「ディーゼルとかは考えなかったのですか？」
「エンジンっつーのは内部で霧状にした燃料にプラグで火ぃつけて小爆発させてんだぜ？　内部で霧状にする仕掛けが難しいんだよ」
流用できるものが極端に減るということですね。プラグもないし。そもそも電気系の技術が全滅です。まあ、一足飛びに進化させるのは無理でしょう。
「軽油やガソリンもないからな……」
ありませんね～。そういう設定。そこからですか。
「いや、てんぷら油でも動かせるこたあ、動かせるが、強度が問題だろうが」

そういえばスクーターをてんぷら油で動かしている人の話を昔聞いた覚えがあります。
技術というのはなかなかに再現が難しいようです。とりあえず現実の技術の発達をトレースしているようです。
がんばってください。

波紋の四　技術革命の道（後書き）

実は見物でも査察でもなくデートかもしれない。

波紋の五　恋愛もよう色々

『東方記』のギルドキャッスルは和風のつくりで三棟からなる。２００人対応型。リネームされ「屯所」と命名されている。そのうち道場を含む母屋に当たる棟を「試衛館」と呼ぶ。

その「試衛館」では最近毎晩トアル部屋の前で騒ぐ男がいた。

「トシさーん、いいじゃないですか～。いれてくださいよ～。一緒に寝ましょう。どうせ隣同士ですし～」注　念話中。

その部屋――副ギルマスのトシゾウの部屋では部屋の主が布団の上で枕を抱えていた。

「だめ！　絶対、だめ！」注　念話中。

「え～、どうしてですか？　昔はお泊りして一緒（の部屋）に寝てたじゃないですかぁ」

「いつの話よ！　幼児(こども)のころならともかく、もう一緒になんか寝られないから！」

「酷いですよ、進入禁止にするなんて～。いれてくださ～い。男同士じゃないですか。お話とかして親睦を深めましょうよ～」

キャッスルなどの個室は独立したゾーンであり、部屋の主を設定できる。主が設定された部屋は本人がギルドを脱退するなどしなければ、その主以外の設定変更を受け付けない。

トシゾウに進入禁止設定されてしまった沖田は寝巻きで枕を抱えたまま部屋の前で毎晩粘っているのだった。

少し離れたところでそれを見守る『東方記』のメンバーがいた。

黒猫の頭部を持つ獣人の耳がぴくぴく動いた。

「毎晩毎晩、迷惑ですにゃ～。獣人は耳がいいのでお互いつらいですにゃ」

狼の頭部を持つ獣人斉藤は柱にもたれかかったまま憮然と呟いた。

「まあな。しかし考えてみろ、イゾウ。あの哀願が聞こえなくなる

ということは、副長が部屋に入れてやるということだぞ。なかでなにが起きるか……」

「ぐふぅうう！」
イゾウは膝から崩れ落ちた。荒い息のした呻くように言う。
「よ……世にも恐ろしいものを……想像してしまったにゃ……」
「………俺もした」
男達の間にしばしの沈黙があった。
ナニを想像したのかは謎である。
その顔が毛皮に包まれていなければ死人のような顔色をしているのが分かっただろう。
イゾウはトシゾウの部屋を顧みて詫びた。
「副長！　拙者が間違ってましたにゃ！　これくらい我慢しますにゃ！　負けないでくださいにゃ！」
「屯所」名物となりつつある局長の副長部屋参り。それが途絶えるのがいつなのかは神のみぞ知る……

『お茶会』所属の騎士リュウタ。
彼は『銀狼騎士団』からの移籍組である。伝説の「高性能皮鎧程度の防御力のあるナース服」が披露されたミリオン戦闘直後に移籍したため、「色香に迷った」とも言われることもあるが完全な言いがかりである。彼は彼の騎士道精神に則りか弱きものを守るため移籍したのだ。
その証拠に彼には別のギルドに所属する妖術師の彼女がいたりする。
とあるオープンカフェ。昼下がりのそこはそこそこ繁盛していた。日よけのパラソルと白い丸テーブルに椅子。とある男女が喫茶を楽しんでいた。

金色のツインテール。幼い顔立ちなのにそこに浮かぶ表情は妙に大人びていた。傍らに立てかけてある杖が彼女が魔術師系の職業であることを示している。愛らしいワンピースでめかしこんではいるものの、その桃のごとき唇から飛び出す言葉は辛らつだった。

「忙しくて会いにこれなかったですって？　それでも時間を作って会いに来るのが誠意ではなくって？　誠意が足りないのよ、誠意が」

冷たく言い放たれてもリュウタの笑みは崩れない。カジュアルな普段着である彼はそうすると好青年にも見えなくもない。穏やかに微笑みながら――

「嫌われちゃった？」

そんなことないだろうという自信すら垣間見える。

少女はふいっと横を向く。

「嫌いとは言っていませんわ」

不機嫌を装う横顔は頬が赤らんでいる。

「よかった」

リュウタはフォークに一口分のケーキをとり、彼女――エルシーに向けて差し出す。

その意図するものを察してエルシーは顔を背けた。

にこにこにこにこ。

それでもリュウタはフォークを引っ込めない。

しばしなにかの葛藤があって――エルシーは観念したようにその小さい口に一口サイズのケーキを迎え入れた。

モテ男爆発しろ！

ラブコメ男絶滅しやがれ！

リアルツンデレとかあり得ねー！

その光景を見せ付けられた男達はどす黒い無限の呪いをかけるのだが、「二人だけの世界」を造っているカップルには効かない。

当然のごとく効かない。

しょせん幸せなものの勝ちだった。

『銀狼騎士団』所属ボルック。そんな彼もそうした負け犬組の一人であった。

（どちくしょう！　モテるやつは呪われろ！）

騎士を職業とする彼は『銀狼騎士団』でも幹部のカンスト組である。もっとも『銀狼騎士団』は現在でもカンスト組６００人強を誇る押しも押されもせぬ戦闘系最大大手ギルドである。六百分の一。めずらしくもない。

“爆炎斧”の二つ名を持ってはいるものの、それすらもめずらしくない。

むしろ「南女王様のしたっぱ」として認識されている節がある。確かに南直属の部下で護衛でもあるが、それなりの実力者（本当）なのである。ギルドの中でも使える男として知られている。

そんな彼は恋愛運があまりない。

リアルでは言わずもがな（聞かないように）、ゲームの中ですらネカマに引っかかった。それで『黒獅子騎士団』の神威とは友となったのは記憶に新しい。

せっかくの非番に目に毒なものを見てボルックはへこんだ。

リアルであ〜んなんかするカップルは絶滅するべきだと思う。

勘定をすませて店を出る。

アルファの街にはまだまだ娯楽が少ない。飲食店はあるがそれで長時間潰せるわけでもない。新聞のようなものもあるが、本といえば魔法書のような実用品がおもで娯楽用の小説などはつい先日まで皆無だった。

もともと『クリエイト・ミレニアム』自体が遊びだったのである。そこで生活すること自体が遊びだった。その中での娯楽は設定されていない。

今では有志が本を出してはいるが――男には理解できない類のも

のが多くて泣ける。腐女子作者率高すぎ！
装備は買うまでもなく、備品も間に合っている。どこに行く当てもなくぶらぶらしていると、三人ずれの女の子の一人に呼び止められた。
「もしかして、ボルックさんじゃありませんか？」
「あれ？　あ、これはお久しぶりです」
呼び止めた女性には見覚えがあった。
ガンマーで監禁されていた『コモン』の女性だ。救出したはいいものの、生まれ故郷の村に連れて行ったら村が無人になっていてアルファで一時保護したのだ。
「今日は鎧じゃないんですね」
「ああ、非番――休みなんで」
「あの、よろしかったら一緒にお茶でもいかがですか？」
女性――ナーシャという――は連れにことわってボルックとカフェに入った。
今日二度目のカフェだが、ボルックはつきあうつもりだった。
ナーシャは栗色の髪の奇麗な『コモン』の女性である。その美しさが災いしてガンマーのギルドに目をつけられて浚われたのだ。売り買いされて――どんな目にあわされたのかは簡単に想像できる。村にたどり着いたとき――変わり果てた故郷に彼女達は泣きじゃくった。なだめすかしてなんとかアルファに連れてきたのだ。
彼女達が今どうしているか気にはなっていた。
「どうっすか？　アルファの街は」
「はい。仕事も見つかってなんとかやってます。皆さん親切にしてくれます」
「それはよかった」
冒険者に酷い目に合わされたのだ。冒険者――プレイヤーの街に拒絶反応を起こしても不思議ではない。
しかしなんとか馴染んでいるようだった。
「あの、家族と連絡がとれたんです」

「本当っすか。そりゃあ、よかった」
その後の調べでガンマーから日帰りできる範囲の村々が姿を消していることが確認された。どうやらその範囲がガンマーのプレイヤーが暴れまくったところらしい。
「遠くの村を頼っていったらしいんですけど、アルファの人達がさらわれた人を助けたって噂が流れたそうなんです。それでもしかしたらって、ユグドラシル宛に問い合わせがあったそうで。手紙出しました」
「よかったすね。ご家族は？」
「元気です。自分達の畑を作るためがんばっているそうです」
ガンマー付近から退去した『コモン』の村人は別の村に移り住んだり自分達で新しい開墾村を作っているようである。
逞しい。
「そりゃよかった。あ、そんじゃ家族のところに帰るんすか？」
ナーシャが寂しげに微笑んだ。
「いえ……知っている人もいるから」
「……すんません。無神経なこと言って」
ナーシャが浚われてどんな目にあわされたのかは簡単に想像ができる。被害者ではあるのだが――偏見の目で見られ後ろ指を差されるかも知れない。
彼女はなにも悪くないのに。
「死のうと思ってました……」
「え？」
「あそこで……毎日毎日死にたいとばかり」
ナーシャの瞳からぽろりと涙がこぼれた。
「あの日……白い兎がやってきて希望をくれました。死んでもいいって思って、飛び出して……もう大丈夫ですって……守ってくれて……村がなくなっていて途方にくれてたわたし達に手を差し伸べてくれて……」
つっかえつっかえ言葉をつむぎながら泣きながら笑顔を作ってい

た。
「ありがとうございました。あなた達がいなかったら、わたし、生きていけませんでした」
「もう大丈夫です。ここにはあんな無法なやつらはいません。いたら自分、全力で叩き潰します。あなたに手は出させません」
「ありがとうございます。あの、ご迷惑でなかったら、またこうしてお話してくれませんか？」
「はい。喜んで」

この瞬間、ボルックは呪うほうから呪われるほうになったのだが、本人は気付いてなかった。

その日、『キノクニ屋』のコロン・ブンはめかしこんで大輪の薔薇の花束を用意していた。
「どうしたんですか、旦那」
「南さんが今日非番なんだ。デートに誘おうと思って。どうかな？きまってる？」
「……はい。旦那、きまってます」
コロンは『銀狼騎士団』の南女史にアタックをかけている。それひとつで軟弱といわれがちな生産系でありながら戦闘系からも勇者と讃えられている。
確かに勇者かもしれない。
断られてはいないようだが柴から見れば「南女王に傅く下僕」かミツグ君（死語）である。
もっともアルファでも恐らくは指折りの資産家であろうコロンにしてみれば女性一人にいくら貢いでもはした金かもしれないが。
「んじゃ行ってくるよ」
「お気をつけて～」
手を振る柴にメンバーの女の子が声をかけた。
「番頭さん、一息いれましょう。今日はおいしいお菓子があるんで

すよ〜」
「ありがとう。じゃあ、そうしようか」
お茶の用意をしていた数人の女史がきゃあ（はーと）と騒いだ。
柴は女の子にもてる。もてるのだが――
コロンはそれを見ると複雑な気分になる。
『キノクニ屋』の敏腕番頭副ギルマスの柴。颯爽とした態度が女の子に大人気。大人気なのだが――ネナベである。
ネナベなんです。
(女同士なんだよな、あれ)
もてるというべきか、仲がいいだけというべきか。
複雑な気分になりながらも、本命に挑むべくコロンはギルドを後にした。

波紋の五　恋愛もよう色々（後書き）

いつまでもつやら『東方記』のトシさん。健闘を祈るべきか、さっさと諦めろというべきか？

リュウタの彼女初登場。呪いの内容はこんなもんでいいですか？

ボルック氏に春到来。あんなところに伏線が。気づいた人はいたかな？

某勇者の行く末を心配する人多いので追加しました。

うむ、複雑。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7574t/

黒の錬金術師　理の探求者

2011年10月7日20時57分発行